

博士学位論文

現代日本語における気象現象の概念化
—概念メタファー理論によるアプローチ—

名古屋大学大学院国際言語文化研究科
日本語文化専攻

松浦 光

平成 29 年 3 月

目次

第1章 序論.....	1
1.1 はじめに.....	1
1.2 本稿の目的と対象.....	3
1.3 本稿の構成.....	4
第2章 理論的背景.....	6
2.1 はじめに.....	6
2.2 概念メタファーと身体性.....	9
2.3 概念メタファーの具体例.....	12
2.4 概念メタファー理論の争点.....	15
2.4.1 概念領域間の対応関係.....	15
2.4.2 文脈と解釈.....	20
2.4.3 概念メタファーの実在性.....	23
2.5 その他援用する諸概念.....	24
2.5.1 概念化.....	24
2.5.2 領域.....	25
2.6 本章のまとめ.....	26
第3章 「光」と視覚に関するメタファー表現—「明るい」と「暗い」—.....	27
3.1 はじめに.....	27
3.2 「光」の概念化と明るさ.....	27
3.3 「明るい」と「暗い」の考察.....	30
3.3.1 身体経験における「明るい」・「暗い」の性質.....	31
3.3.1.1 「明るい」・「暗い」の制約.....	31
3.3.1.2 空間における「明るい」・「暗い」.....	32
3.3.1.3 視界における「明るい」・「暗い」.....	33
3.3.2 メタファー的意味における「明るい」・「暗い」の性質.....	34
3.3.2.1 感情領域における「明るい」・「暗い」.....	34
3.3.2.2 知識領域における「明るい」・「暗い」.....	36
3.3.2.3 時間領域における「明るい」・「暗い」.....	37

3.4 本章のまとめ	40
第4章 温度感覚に関するメタファー表現―「熱い」「あたたかい」「冷たい」―	42
4.1 はじめに	42
4.2 「熱い」「あたたかい」「冷たい」の意味の記述	43
4.3 温度感覚に関する概念メタファー	44
4.4 「熱い」「あたたかい」「冷たい」の考察	45
4.4.1 身体経験における温度感覚	45
4.4.2 メタファー的意味における「熱い」「あたたかい」「冷たい」	49
4.4.3 温度感覚の捉え方と概念メタファー	52
4.4.4 「熱い」「あたたかい」「冷たい」が明示されないメタファー表現	57
4.5 本章のまとめ	59
第5章 「晴れる」と「曇る」に関するメタファー表現	61
5.1 はじめに	61
5.2 気象現象と感情・思考の理解	61
5.2.1 「晴れる」と「曇る」の意味の記述	61
5.2.2 「雲」と「霧」の意味の記述	62
5.2.3 <<感情は天候>>とメタファー写像	64
5.2.4 気象現象における「光」と遮蔽物	65
5.3 気象現象と状況の理解	67
5.3.1 <<状況は天候>>とメタファー写像	67
5.3.2 運動と移動物	67
5.4 「晴れる」と「曇る」の考察	68
5.4.1 気象現象における「晴れる」・「曇る」の性質	69
5.4.1.1 空における「晴れる」・「曇る」	69
5.4.1.2 知覚者の視界における「晴れる」・「曇る」	69
5.4.1.3 遮蔽物としての「雲」・「霧」の性質	70
5.4.1.4 「晴れる」・「曇る」の制約	71
5.4.2 メタファー的意味における「晴れる」・「曇る」の性質	72
5.4.2.1 感情領域における「晴れる」・「曇る」	72
5.4.2.2 思考領域における「晴れる」・「曇る」	76

5.5 「雲」・「霧」と状況の理解	78
5.5.1 気象現象における「雲」・「霧」の相違点	78
5.5.2 状況領域における「雲」・「霧」	81
5.6 本章のまとめ	85
第6章 「風」に関するメタファー表現	87
6.1 はじめに	87
6.2 「風」を通した状況の理解	87
6.3 「風」の移動と構成要素	87
6.4 「風」の考察	89
6.4.1 身体経験における「風」の性質	89
6.4.1.1 「風」の「方向」と「力」	89
6.4.1.2 「風」の移動の捉え方	90
6.4.2 状況領域における「風」の性質	92
6.4.2.1 「風」の移動と状況の変化	92
6.4.2.2 「風」の発生と人間の言動	93
6.5 本章のまとめ	99
第7章 「嵐」と「台風」に関するメタファー表現	101
7.1 はじめに	101
7.2 「嵐」と「台風」の定義と関係性	101
7.3 行為者としての気象現象	103
7.4 気象現象と評価性	105
7.5 「嵐」と「台風」の考察	105
7.5.1 気象現象における「嵐」「台風」の共通点	105
7.5.2 気象現象における「嵐」「台風」の相違点	106
7.5.3 メタファー的意味における「嵐」「台風」	109
7.6 本章のまとめ	114
第8章 結論	116
8.1 本稿のまとめ	116
8.2 今後の課題	118
参考文献	121

謝辭.....	130
---------	-----

本稿の第3章、第4章、第5章、第6章は、以下の論文に基づき、その後の研究の成果を加味して、大幅に加筆・修正を施したものである。

第3章 2015年5月 「現代日本語における光の捉え方と概念化―「明るい」と「暗い」を中心に―」
『日本認知言語学会論文集』15, 288-300.

第4章 2015年2月 「人間の営みにおける身体感覚の概念化―「明るい」と「あたたかい」を中心に―」
『言葉と文化』16, 73-86, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻.

第5章 2013年2月 「気象現象とメタファーの一考察―精神における「晴れる」を中心に―」
『言葉と文化』14, 113-127, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻.

2014年4月 「概念メタファーからみた空模様―新聞記事を資料とした「雲」と「霧」の考察―」
『表現研究』(99), 60-69, 表現学会.

2014年5月 「「晴れる」と「曇る」のメタファー的意味の実現」
『日本認知言語学会論文集』14, 312-322.

第6章 2015年12月 「現代日本語におけるメタファー表現としての「風」の考察―なぜ「先輩風」は吹くのか?―」
『日本語用論学会大会発表論文集』10, 151-158.

<凡例>

- (1) 用例の出典は用例の後の()内に示す。インターネットの検索エンジンで得た実例の場合、用例の後にその URL を記す。また、用例の後に出典が示されていないものは全て稿者による作例である。
- (2) 用例中の傍線は断りのないもの以外全て稿者に拠る。実線は分析対象表現、点線は分析対象表現以外の注目すべき箇所を示す。
- (3) 容認度の基準として、NINJAL-LWP for BCCWJ や Google 検索で用例の有無を確認した後、稿者の内省を行っている。「*」がつく場合、調査時点では容認できない用例である。「??」「?」は非文ではないが、容認されにくいことを表す。なお、「?」の数は、容認度が下がることを表す。
- (4) 英文の概訳は、全て稿者に拠る。
- (5) 例文番号は、各章ごとの通し番号を付す。
- (6) 図表番号は、各章ごとの通し番号を付す。
- (7) 注は、各ページ末に挙げる。なお、注の番号は、全章を通じての通し番号である。
- (8) 本稿における英語による引用箇所以外の学術用語は小文字で表記する。概念メタファーは、「<<A は B>>」または、「“A IS B”」（A は目標領域、B は起点領域）で大文字を用いて表記する。

第1章 序論

1.1 はじめに

日本語では、気象現象をどのように捉え、概念化しているのだろうか。気象現象は、国や風土によって大きく変わり、その土地に住む人々によって捉え方も違っている。日本においては、四季が存在し、季節は移り変わる。そして、日本語には、気象現象に関する慣用句や比喻表現が豊富に存在し、日本の天気の特徴をみることができる。例えば、『大辞林』第三版では、「気象・天文の言葉」という特別ページが存在するほどでもある。他にも、個別的な気象現象に関する言葉だけを集めた本や辞典も多く出版されている。一例として、『雨のことば辞典』には、季語から気象用語、各地の方言まで、雨に関する言葉だけで約 1200 語も収録されている。

日本の気候については、気象庁の HP では以下のように記述されている。

日本列島は南北に長いため、北は亜寒帯から南は亜熱帯まで、さまざまな気候区分に属しています。また、日本列島には、高い山々が連なる山脈があるため、冬は日本海側では曇りや雪または雨の日が多い一方、太平洋側では晴れの日が多くなります。これらのように、地方によって天候には大きな違いが見られます¹。

このように、日本全体としては、「晴れ」「曇り」「雨」に対して、一定の経験に基づいて天気を捉えていることが確認できる。これが、常夏状態であったり、ずっと「曇り」や「雨」の状態が続いたり、「雨」がなかなか降らなかったりする、国や地域であったら、天気の捉え方も変わるだろう。

さらに、言語表現に関わる日本の天気の特徴については、靱山(2006)において次のようにまとめられている。

(日本の) 天気の特徴 (についての私たちの知識)

- (1) (日本の) 天気は変わりやすい (=比較的短いサイクルで変化する)。

¹ 気象庁「日本の天候」

(http://www.jma.go.jp/jma/kishou/now/kisetsu_riyou/tenkou/Average_Climate_Japan.html)

(最終アクセス日 2017/02/04)

- (2) 「晴れ」は（日本に住む）人間にとって好ましい天気である。（＝雨や曇りの状態から「晴れる」ことは好ましい変化である）。
- (3) 「雨」は（日本に住む）人間にとって好ましくない天気である。
- (4) 「曇り」は、「雨」より好ましくない天気とは言えないが「晴れ」と比べて、（日本に住む）人間にとって好ましくない天気である（＝晴れた状態から「曇る」ことは好ましくない変化である/変化が進んで、「雨」というさらに悪い状態に進む兆候である）。

梶山(2006:70-71)

ここからも、日本において天気は変わりやすく、日本人にとって好ましい天気と好ましくない天気が存在すると捉えられていることが分かる。こういった知識に基づいて、我々は気象現象に関するメタファー表現を産出していると考えられる。

本稿は、Lakoff and Johnson (1980)の概念メタファー理論の枠組みで現代日本語における気象現象の概念化のプロセスを明らかにする。日本における気象現象は身体経験の基盤となる。そして、気象現象は起点領域となり、感情・思考・状況など様々な抽象的な領域に写像される。

しかしながら、Lakoff and Johnson (1980)の概念メタファー理論(conceptual metaphor theory)において、メタファー写像は一貫性を持つとされるが、以下のような例ではメタファー表現の容認度に差が生じているのが確認できる。

- (1) 恨みが晴れる。・*怒りが晴れる。/迷いが晴れる。・*不審が晴れる。
- (2) 憂さが晴れる。・*憂さが曇る。/*判断が晴れる。・判断が曇る。

これらの例が示すように、メタファー写像にはギャップがあり、メタファー的意味の実現には制約が存在する。このような起点領域、目標領域の写像関係ではメタファー的意味の実現が可能であるはずの表現が実際には成立しない現象は「まだら」問題と呼ばれている。(鍋島(2011))本稿は、「まだら」問題に対して、「現象の構成要素」という概念を提案する。この「現象の構成要素」を用いて、気象現象を中心とした個別的なメタファー表現の分析を試みる。

1.2 本稿の目的と対象

本稿では、次の2点を研究の目的とする。

- ①現代日本語において気象現象はどのように捉えられ、概念化されるのか。
- ②気象現象を起点領域とするメタファー表現の「まだら」問題の要因となり得るものは何か。

現代日本語における気象現象と概念メタファーを中心に挙げた主な先行研究は大森(2004)、初山(2006)、李(2007)、篠原・松中(2010)などがあるが、管見の限り、気象現象に関する日本語のメタファー表現を個別に扱ったものは存在しない。また、そのほとんどはメタファー表現の写像の偏りや性質の違いまでは言及されていない。

一般的には、「まだら」問題に対して、Lakoff(1993)の「不変性原理(Invariance Principle)」、Grady(1997)の「プライマリー・メタファー(primary metaphor)」、松本(2007)の「語義的経済性の制約」などで説明がなされている。こういった流れの中で、鍋島(2011)では、次のような「多重制約充足的メタファー観」が提案されている。

人間にはさまざまな認知機構（イメージ・スキーマ/構造的認知、カテゴリー性の認知、近接性）による共起リンクがあり、メタファーもそのシステム全体の中で考える必要がある。評価性などの認知機構は、基盤として働くとともに、制約として働く。メタファー同士の連携、合成、衝突もあり得る。

鍋島(2011:119)

本稿においても、この「多重制約充足的メタファー観」に立って、概念メタファーを考えていく。つまり、従来の研究のように「まだら」問題を統一的に説明できる原理を追究するのではなく、一般的には説明しにくいような個々のメタファー表現に注目して扱う。「多重制約充足的メタファー観」に立てば、メタファー表現ごとに認知機構が異なることが想定されるため、個別的にメタファー表現をみていかなければその基盤と制約を導き出すことができないと考えるためである。

また、現代日本語の言語事実を通しての気象現象の概念化のプロセスの解明を目指す。そのため、本稿は、文学作品上の詩的なメタファー表現を扱うわけではなく、日常的なメタファー表現を考察対象とし、言語使用の多寡を問題にしない。

本稿では、概念メタファーを現象の身体経験という観点から捉え直す。外界の現象の概念化は、認知主体のおかれる環境との相互作用で起こっている。我々はその環境の中で際立った要素を知覚している。外界の現象において、直接的に身体経験として作用する要素が存在することを本稿では提案する。

構成要素の先行研究として、瀬戸(1995b:90-110)では、空間の構成要素を、「場所」と「方向」としている。瀬戸は、「場所」は、静的な空間を含意し、位置・形・延長（広がり）が問題となり、「方向」は、動的な空間を含意し、前後・左右・上下が問題になると述べている。この構成要素がメタファー表現に対して、豊かな生産性を秘めていることを示している。鍋島(2004:106-107)においても、<<理解することは見ることである>>のフレーム構造内で、「見る人(Seer)」と「見られるもの(See)」の関係以外に外部環境が写像の要素となる可能性にもふれている。鍋島は、仮ではあるがその要素として、「光源(Light)」と「障害物(Blockage)」を挙げている。そして、「光源」が存在する場合は見えやすく、「障害物」が存在する場合は見えにくいなど、それぞれの要素に属性が付随していることにも言及がなされている。

これらはフレームの構成要素であると考えられるが、本稿ではさらに現象そのものに着目する。認知主体がおかれる環境では常に何らかの要素が身体経験に作用していると考えられる。本稿では、認知主体がおかれる外界の現象に対する概念化のプロセス（捉え方）において、身体経験に直接的に作用する要素を「現象の構成要素」と呼ぶ。なお、ここでの現象とは、事物とは言いにくい「光」や「天候」という意味で用いる。

これについて、気象現象で考えると、「晴れる」時には、「雲」・「霧」のような遮蔽物には覆われず「光」が存在することが前提にある。また、「風」を知覚しているということは、「風」自体の「方向」や「力」を経験していることになる。我々は、こういった要素を捉えることで、メタファー表現を産出していることを主張する。

つまり、現代日本語における気象現象の概念化のプロセスを明らかにすることが本稿の目的である。ひいては、研究の成果として「まだら」問題について「現象の構成要素」を用いて捉え直す有効性を主張したい。

1.3 本稿の構成

本稿の構成は、次のとおりである。

第 2 章では、認知言語学における概念メタファー理論に至るまでのメタファーの研究史

を確認する。そして、概念メタファー理論の争点を整理する。それに基づき、前提とする言語観と援用する諸概念について述べて、本稿の立場を提示する。

第3章では、「光」の明るさを表す「明るい」と「暗い」を取り上げ、光の概念化のプロセスを探る。

第4章では、温度感覚に関する「熱い」「あたたかい」「冷たい」を考察対象とし、温度感覚の概念化のプロセスを明らかにする。

第5章では、気象現象における「晴れる」と「曇る」に関するメタファー表現を考察する。起点領域である気象現象における「光」と遮蔽物と移動物という現象の構成要素がメタファー的意味の実現に影響を与えていることを主張する。

第6章では、気象現象である「風」を取り上げ、メタファー表現としての「風」を現象の構成要素を用いて分析する。そして、メタファー表現としての「風」の動機づけを明らかにする。

第7章では、「嵐」と「嵐」の一種である「台風」をそれぞれが持つ固有の性質について考察する。そこから気象現象が持つ固有の性質の捉え方がメタファー的意味に影響を与えていることを主張する。

第8章では、本稿の結論をまとめ、今後の課題を述べる。

第2章 理論的背景

2.1 はじめに

メタファー(metaphor)は、伝統的に「ことばのあや」として修辞学の中に位置づけられてきた。その起源は二千数百年前のアリストテレスの『詩学』『弁論術』（紀元前 330 年頃）にまで遡ることになる。アリストテレスの『詩学』では、比喩（転用語）を(1)類を種に転用するもの、(2)種を類に転用するもの、(3)種を別の種に転用するもの、(4)比例関係によって転用するもの、4 つに分類をしている。現在の比喩の分類で考えると、(1)と(2)はシネクドキー²、(3)と(4)がメタファーに該当する。その中で、特に(4)比例関係によって転用するものについて、「老年」と「夕べ」、「人生」と「一日」の比例関係から「一日の老年」、「人生の日没」と表すことができることに言及がされている。つまり、アリストテレスはこの型の比喩について、かけ離れた 2 つのものが「関係の類似」を感知することによって成立することを指摘していた。これは、単に比喩が転用ではないことを意味する。しかしながら、アリストテレスの関心は説得・装飾のためのレトリック（修辞技法）そのものにあり、メタファーに関する議論自体は 20 世紀まで修辞学の範疇に閉じ込められたままであった。(瀬戸(2002:16-17)、香西(2004:62-64))

20 世紀になって、ようやく I.A.Richards(1936)によってメタファー研究に光が当てられることになった。I.A.Richards は、「メタファーは言語に偏在する原理」であり、「思考はメタファー的」とし、メタファーを捉え直した。そして、比喩表現の三つの要素として「喩えられるもの」（主意=tenor）、「喩えるもの」（媒体=vehicle）、この両者の類似性を説明する「根拠」（ground）を挙げた。また、思考と比喩については、佐藤(1978[1992])においても、レトリックの働きについて我々の認識をありのまま表現する「発見的認識の造形」と位置付けられている。その中で比喩を「埋もれている意外な類似性を発見し、認識するもの」として捉えた。これは、メタファーを思考の問題として取り扱った先進的な研究であると言え、後のメタファー研究にも多大な影響を与えた。(野内(2000)、多門(2006)、半沢(2016))

それ以降にも、メタファーについて様々な議論がなされてきた。ここでは、代表的なものをみていく。字義通りの表現の代わりに用いて字義通りの指示対象と等しい意味を表すものとしてメタファーを考える「代替説(substitution view)」、隠喩を二重の提喩と捉える

² 本稿におけるシネクドキーは、森(2013:89)の「「類・種関係（カテゴリー階層の上下関係）」に関わる比喩」という定義に従う。

Group μ(1970)による「二重提喩説」、Searle(1979)らを中心とする理論でメタファーを2つの事物を比較し、その間にある客観的な類似性を強調し、類似している対象を明示するシミリーを省略したものとする「比較説(comparison view)」、Black(1954、1979)が提唱した比喩的な意味と字義通りの意味が相互作用することによってメタファーの意味が決定されると考える「相互作用説(interaction theory)」、Glucksberg and Keysar(1993)、Glucksberg(2001)らが主張するメタファーを単にカテゴリー化に過ぎないと考える「カテゴリー包含説(category inclusion theory)」が、メタファーに関する主な説としてある。これらの伝統的な見方は、多少の差はあるものの、メタファーを言語レベルの問題と捉える点、美的に言葉を装飾する修辞技法としてメタファーを捉える点、個々のメタファー表現の間に一貫性を認めていない点、で共通している。また、部分的に、認知言語学のメタファー観に影響を与えている。(高尾(2003:188-198)、鍋島(2011:8-10)、笠貫(2013:54-56))

以上のように、メタファーに関する伝統的議論を考えれば、認知言語学誕生以前の20世紀後半までの構造主義言語学、生成文法において、研究対象とされにくいのは自明であろう。Taylor(2003)においても、次のような言及がある。

メタファーは、生成文法にとって常に扱い難いものであった。そもそもの問題は、語の意味は必要十分な素性の束として表わされるところにある。このアプローチによると、意味は明確な境界を持った事象として現れる。語を結びつけて句を作ることができるかどうかは、その句を構成する形式の意味素性が整合性を有するかどうか、すなわち、選択制限に違反しないかどうかという問題に帰着する。語の結び付きが容認可能かどうかは、意味特徴に整合性があるかないかのいずれかであり、当然、白黒がはっきりする問題である。

Taylor(2003)[辻・鍋島・篠原・菅井(訳)(2008:208-209)]

これをみると、言語の構造や形式ばかりが重視される従来の言語学においては、メタファーは扱うことが難しく、その価値すらも見出しにくいものと考えられていたことが分かる。それは、メタファーが長い間、言語学の範疇で扱われなかった理由の一つであると言える。

1980年代になって Lakoff、Langacker、Fillmore らによって認知言語学が誕生した。認知言語学は、人間の一般的な認知能力を想定して、言語能力を人間の認知能力と環境との相互作用を反映したものとして捉える言語学である。山梨(2000)では、認知言語学について

以下のように述べられている。

言葉は、主体が外部世界を認識し、この世界との相互作用による経験的な基盤を動機づけとして発展してきた記号系の一種である。言葉の背後には、言語主体の外部世界にたいする認識のモード、外部世界のカテゴリー化、概念化のプロセスが、何らかの形で反映されている。認知言語学は、このような人間の認知能力にかかわる要因を言語現象の記述、説明の基盤とするアプローチをとる。このアプローチをとることにより、言葉の背後に存在する言語主体の認知能力との関連で、言語現象を包括的にとらえ直していく方向がみえてくる。このことは、決して言葉の形式・構造の側面を軽視することを意味するわけではない。むしろ、形式・構造にかかわる制約も、根源的に言語主体の認知能力や運用能力にかかわる制約によって動機づけられているという視点にたつことを意味する。

山梨(2000:18)

認知言語学の枠組みによって、メタファーは新たに見直されることになった。Lakoff and Johnson (1980)は、今までのメタファー研究の流れと大きく異なる理論を構築し、身体的経験豊かで具体的な起点領域(source domain)から身体的経験があまりない抽象的な目標領域(target domain)への概念領域間の体系的な写像関係と捉える「概念メタファー理論(conceptual metaphor theory)」を提唱した。Reddy(1979)の「導管メタファー(conduit metaphor)」の影響を受けた、Lakoff and Johnson (1980)のメタファー観は次の文に集約できる。

「メタファーの本質は、ある事柄を他の事柄を通して理解し、経験することである。」

Lakoff and Johnson (1980)[渡部・楠瀬・下谷(訳)(1986:6)]

この理論によると、メタファーは言葉のレベルだけではなく、物事の「捉え方」という根本的な概念レベルにも生じている。簡単に言えば、我々の認識そのものがメタファーであるという考え方である。

つまり、概念メタファーの登場によって、メタファーは修辞学の分野から言語学での分野の議論の対象に位置付けられたと言える。現在では、認知言語学においてメタファーは主要

なテーマの一つとなっている。

2.2 概念メタファーと身体性

概念メタファー理論では、メタファーの存在理由である動機づけが我々の日常的な身体経験である身体性に根ざしていると考えられる。Lakoff(1987)は、これを「経験基盤主義(experientialism)」と名付けた。経験基盤主義において、言語を含む人間の認知は、身体的・心理的経験(知識)を基盤に、環境世界との相互作用によって構成されるという前提に基づいている。Taylor(2003)においても、メタファーと経験的基盤について以下のように述べられている。

メタファーが認知言語学のパラダイムで中心的な問題になったのは、メタファーが経験的基盤を持つからにはほかならない。構造主義言語学にとって、言語は、言語話者の認知や経験とは独立した自己完結的な記号体であった。これに対し、認知言語学は、言語構造の性質が恣意的なものではなく動機づけが与えられる点を積極的に強調している。メタファーの経験的基盤に言及することで、恣意的か有契的かという二分法、いい換えれば、言語と文化の関係との関連で取り上げられる問題について有意義な議論が喚起されるだろう。一方で、経験の中には、通常の健全な人間すべてに共通するものもあれば、文化や環境などの条件によって厳しく限定されるものもあるのだから、メタファー表現に通言語的な類似性と通言語的な多様性の両方を見出すことがあっても、驚くには値しない。

Taylor(2003)[辻・鍋島・篠原・菅井(訳)(2008:223)]

本稿も、このような身体性を重視した言語観をとる。言い換えれば、経験をする身体は全世界で共通するが、その身体が置かれる文化や環境によって経験は異なるという捉え方である。また、山梨(2012)においても、身体的経験と概念体系について次のようにまとめられている。

日常言語の概念体系は、言語主体の身体的な経験に根ざしている。その中でも、特に日常生活の伝達に関わる主観的な意味のかなりの部分は、言語主体と環境との相互作用に基づく身体経験をその発現の背景的な基盤としている。また、一見したところ抽象的

な概念として慣用化している意味のかなりの部分は、身体経験によって動機づけられている。ここで問題とする身体的な経験の中には、少なくとも以下のような経験が含まれる。

空間認知に関わる経験

五感に関わる経験

運動感覚に関わる経験

体感に関わる経験

この種の経験は、日常言語の概念体系の基本的な意味の発現の背景的な基盤となっている。例えば、(i)空間に関わる経験は、上・下、高・低、前・後、遠・近、左・右、等の次元、(ii)五感に関わる経験は、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚の次元、(iii)運動感覚に関わる経験は、速度、バランス、等の次元、(iv)体感に関わる経験は、軽・重、寒・暖、等の次元の意味の基盤を構成している。

山梨(2012:61)

また、山梨は、この種の身体経験がすべて相互に独立して存在するわけではないと述べている。その例として、紐の長・短は視覚だけではなく、実際に触って触覚で判断でき、振って体感することでも判断できること、川の深・浅は視覚以外に川に石を投げて音を聴いて聴覚で判断でき、川に飛び込んで体感でも判断できること、などを挙げている。

日常生活の中で繰り返される身体経験は「イメージ・スキーマ(image schema)」として構造化される。Johnson(1987)に基づき、イメージ・スキーマを次のようにまとめる。

・人間の身体運動、物体の操作、そして知覚的相互作用には、繰り返し生じるパターンがあり、このパターンがなければ、我々の経験は混沌として理解不能なものとなってしまふ。このパターンを「イメージ・スキーマ」と呼ぶ。これらのパターンは、イメージの主要な働きを持つ。

・イメージ・スキーマは、それぞれの部分が関係し合い、統一的な全体として組織化されたゲシュタルト構造であり、これによって、我々の経験に認識可能な秩序が表出する。

この秩序を把握しようとしたり、それについて推論したりする際に、このような身体的な基盤を持つイメージ・スキーマが中心的な役割を果たす。

Johnson(1987:xix)[谷口(2003:46)に基づく]

また、Johnson(1987:126)は、主なイメージ・スキーマとして以下を挙げている。ここでは、多種多様なイメージ・スキーマが提案されている。

CONTAINER(容器) / BALANCE(バランス) / COMPULSION(強制) / BLOCKAGE(妨害) / COUNTERFORCE(対抗力) / RESTRAINT REMOVAL(制止の除去) / ENABLEMENT(力の可能性) / ATTRACTION(牽引) / MASS-COUNT(連続体・個体) / PATH(経路) / LINK(リンク) / CENTER-PERIPHERY(中心・周辺) / CYCLE(周期) / NEAR-FAR(近・遠) / SCALE(尺度) / PART-WHOLE(部分・全体) / MERGING(境界) / SPLITTING(分割) / FULL-EMPTY(充満・空虚) / MATCHING(適合) / SUPERIMPOSITION(重ね合わせ) / ITERATION(反復) / CONTACT(接触) / PROCESS(過程) / SURFACE(表面) / OBJECT(対象) / COLLECTION(集められたもの)

このイメージ・スキーマのリストは、Clausner and Croft (1999)によって引き継がれる。次のように、Johnson(1987)のリストが7つのグループに分類し直され、改編が試みられた。

SPACE(空間): UP-DOWN(上・下), FRONT-BACK(前・後), LEFT RIGHT(左・右), NEAR-FAR(近・遠), CENTER-PERIPHERY(中心・周辺), CONTACT(接触)

SCALE(尺度): PATH(経路)

CONTAINER(容器): CONTAINMENT(抑制), IN-OUT(内・外), SURFACE(表面), FULL-EMPTY(充満・空虚), CONTENT(内容物)

FORCE(力): BALANCE(バランス), COUNTERFORCE(対抗力), COMPULSION(強制), RESTRAINT(制止), ENABLOEMENT(力の可能性), BLOCKAGE(妨害), DIVERSION(転換), ATTRACTION(牽引)

UNITY/ MULTIPLICITY(単一性/複数性): MERGING(適合), COLLECTION(集められたもの), SPLITTING(分割), ITERATION(反復),
PART-WHOLE(部分-全体), MASS-COUNT(連続体-個体), LINK(リンク)

IDENTITY(同一性): MATCHING(適合), SUPERIMPOSITION(重ね合わせ)

EXISTENCE(存在): REMOVAL(除去), BOUNDED SPACE(有界空間), CYCLE(周期),
OBJECT(対象), PROCESS(過程)

Clausner and Croft (1999:15)

概念メタファーにおいて、領域間の写像(mapping)には、イメージ・スキーマが内在すると考えられている。換言すれば、イメージ・スキーマは、日常経験と抽象的な概念をつなぐ役割を果たしていると言える。

2.3 概念メタファーの具体例

本節では、英語の用例は Lakoff and Johnson (1980) [日本語訳は谷口(2003:9-44)、笠貫(2013:57-61)に基づく]、日本語の用例は谷口(2003)を基に概念メタファーの具体例を確認していく。なお、本稿において、概念レベルのメタファーを具現化したものを「メタファー表現」と呼ぶ。Lakoff and Johnson (1980)では、この概念メタファーに3つのタイプが提唱されている。

・「構造のメタファー(structural metaphor)」

：抽象的な構造を持った経験を具体的な構造を持った経験として捉える。

(1) You're wasting my time.

(あなたは私の時間を浪費している。) <<時間は金>>

Lakoff and Johnson (1980:7)

(2) We'll just have to go our separate ways.

(私たちは別々の道を行ったほうがいいだろう。) <<恋愛は旅>>

Lakoff and Johnson (1980:44)

・「存在のメタファー(ontological metaphor)」

: 抽象的なものを「物体」や「物質」など、実体のある具象物として捉える。

(3) I look forward to the arrival of Christmas.

(クリスマスがやってくるのが楽しみだ。) <<時間は移動する物体>>

Lakoff and Johnson (1980:42)

(4) We're out of trouble now.

(私たちはトラブルから脱した。) <<状態は位置>>³

Lakoff and Johnson (1980:32)

・「方向のメタファー(orientational metaphor)」

: 非空間的な経験を「上下」などの位置関係として捉える。

(5) Things are looking up.

(状況は上向きだ。) <<良いことは上 悪いことは下>>

Lakoff and Johnson (1980:16)

(6) He is under my control.

(彼は私の支配下にある。) <<支配力があるのは上、支配されるのは下>>

Lakoff and Johnson (1980:15)

以上のように、我々は、抽象的な領域を具体的な身体的経験を通して理解していることが確認できる。我々は身体で物事を知覚し、身体を使って物事を操作することができる。言い換えれば、我々はこの具体的な物事への身体経験によって抽象的な形のない物事についても理解しているのである。さらに、<<楽しいことは上、悲しいことは下>>((7)~(13))、<<議論は戦争>>((14)~(19))で具体的にメタファー表現をみていく。

・ <<楽しいことは上、悲しいことは下>>

(7) I'm feeling up.

³ この例では、トラブルという状態を容器として捉えている。存在のメタファーにおける具象物の一種としての「容器」は「容器のメタファー(container metaphor)」とも呼ばれる。

(気分は上々だ。)

- (8) My sprits rose.

(気分が高揚した。)

- (9) I'm feeling down.

(落ち込んでいる。)

- (10) My sprits sank.

(気分が沈んだ。)

Lakoff and Johnson (1980:15)

- (11) 有頂天になる。

- (12) 天にも昇る気分だ。

- (13) 気分はどん底だ。

谷口(2003:20)

我々は、楽しい時・嬉しい時には姿勢が上向きになり、逆に、悲しい時にはうつむいた姿勢になる。感情と姿勢の運動という身体的経験から、「楽しいことは上」、「悲しいことは下」という結び付けが行われる。この概念領域間の写像によって日本語、英語、共に上、下という方向を用いて、一貫したメタファー表現が生まれていることが分かる。

・ <<議論は戦争>>

- (14) Your claims are indefensible.

(あなたの主張は守りようがない。)

- (15) He attacked every weak point in argument.

(彼は、私の議論の弱点をすべて攻撃した。)

- (16) I demolished his argument.

(彼の議論を粉砕した。)

- (17) You disagree? OK, Shoot!

(反対か？わかった、撃ってみろ？(=言ってみろ！))

- (18) He shot down all of my arguments.

(彼は私の議論をすべて撃ち落とした。)

Lakoff and Johnson (1980:4)

これらの用例は、「議論」をいずれも「戦争」に関わる表現で述べている。一見、「議論」と「戦争」はまったく異なる行為である。議論は戦争のように武器や身体的な力を用いたりせず、言葉を通じて行うものであるが、我々は、陣地の奪い合いをするかのように((14))、身体的・物理的な力をもつかのように((15)、(16))、武器を用いるかのように((17)、(18))、「議論」を表現する。

言い換えれば、我々は、「戦争」の持つ様々な経験を用いて「議論」を表す言語表現を生み出している。これも、「議論」という経験の構造が「戦争」の経験の構造と豊富に合致することを基盤としていることで生まれる言語表現である。一方、概念メタファーによって同じような言語表現が形成されるならば、文化的な相違も当然ながら生じてくる。＜＜議論は戦争＞＞といった概念メタファーは日本語でも英語と同じように見受けられるが、(19)～(21)では「戦争」にもちいられる武器が英語の場合とは異なっている。

(19) 相手の弱点を突く。

(20) 相手の意見を一刀両断にする。

(21) ミッチー、サッチーを斬る！

谷口(2003:28)

英語の場合は、先程の用例にもみられたように「銃器」が具現化しているが、日本語の場合は、「刀」が武器としての中心的役割を果たしていたという連想が働くため、言語表現のレベルでは「刀」に関するものが多く生じている。そして、根源的には英語の場合と同様に＜＜議論は戦争＞＞という概念メタファーがあるからこそ、日本語であっても(19)～(21)のような創造的なメタファーが生まれている。また、そのメタファー表現が難なく解釈される。

2.4 概念メタファー理論の争点

本節では、概念メタファー理論の争点となるトピックをそれぞれ概観していく。これらの概念メタファー理論における争点を整理することで、本稿の立場を明示する。

2.4.1 概念領域間の対応関係

概念メタファー理論においては、メタファーは概念領域間の写像と考える。しかしながら、(22)～(25)をみると、＜＜理論は建物＞＞、＜＜人生は旅＞＞においてメタファー的意味の実

現に容認度の差が生じているのが確認できる。

・ <<理論は建物>>

(22) a. This theory has a solid foundation.

(この理論には強固な土台がある。)

b. *This theory has {no French windows/white walls}.

(この理論には{フランス窓/白い壁}がない。)

Grady(1997:39-40)

(23) a. 困難な理論の構築に着手した。

b. *困難な理論の構築に着工した。

黒田(2005:41)

・ <<人生は旅>>

(24) 駅まで{歩く/*歩む}。

(25) a. 孤高の人生を{*歩く/歩む}。

b. {学問/信仰}の道を{??歩く/歩む}。

松本(2007:79)

ここで、<<理論は建物>> を考えてみると、Grady(1997) の(22)では、理論に対して、その根幹を土台と捉えることができるが、フランス窓や白い壁が容認できないことが示されている。また、黒田(2005)の(23)でも、理論に対して、着手することはできるものの、着工することはできないことが分かる。さらに、<<人生は旅>>においても、松本(2007)の挙げた(24)、(25)でも、物理的な移動とメタファー的な移動で「歩く」と「歩む」で容認度が変わることが示されている。

以上のように、概念メタファーによる写像にはギャップが存在し、メタファー的意味の実現には制約が存在することが確認できる。このような起点領域、目標領域の写像関係ではメタファー的意味の実現が可能であるはずの表現が実際には成立しない現象を「まだら」問題と呼ぶ。(鍋島(2011:93))

今までみてきたように、様々な概念メタファーにおいて、「まだら」問題が生じている。日本語では、類義関係にある言語表現にメタファー的な意味の違いや容認度の違いがみら

れ、細かな制約が存在するのである。

Lakoff 自身は、メタファー的意味の実現の制約について、Lakoff(1990)の「不変性仮説(Invariance Hypothesis)」を発展させて、Lakoff(1993)で以下の「不変性原理(Invariance Principle)」を提唱している。

Metaphorical mappings preserve the cognitive topology (that is, the image-schema structure) of the source domain, in a way consistent with inherent structure of the target domain.

(概訳:メタファー写像は起点領域のイメージ・スキーマ構造を目標領域に内在する構造と一貫するあり方で保持する。)

Lakoff(1993:215)

この説によれば、概念メタファーにおいて、目標領域で矛盾がない限り、起点領域から目標領域に内在するイメージ・スキーマ構造は写像される。言い換えれば、目標領域が起点領域からの写像に矛盾する場合、写像を拒否(override)することも起こる。

それに対して、Grady(1997)は、概念メタファーにおける①写像の欠如、②経験基盤の欠如、③他の目標領域に関わるメタファーとの区別、という問題を指摘した。その上で、直接的な身体経験を基盤とした概念メタファーである「プライマリー・メタファー(primary metaphor)」を提案している。<<理論は建物>>(<<THEORIES ARE BUILDING>>)は、実際には a.<<組織は物理的構造>>(<<ORGANIZATION IS PHYSICAL STRUCTURE>>)、b.<<存続は直立>>(<<VIABILITY IS ERECTNESS>>)という 2 つのプライマリー・メタファーから構成される、複合的なメタファーである。よって、(22)でみた写像のギャップは、合成された 2 つのプライマリー・メタファーを分解することによって、解決できるとしている。つまり、複数のメタファーやメタファー表現が相互に関連したネットワークを形成するという考え方である。この考え方に従うと、合成されたメタファーに衝突するものは、メタファー的意味の実現が阻害されることになる。メタファーのネットワークについては鍋島(2011)でも議論され、メタファーの継承と合成に以下の定義づけがなされている。

- ・メタファーの継承

メタファーA とメタファーB がカテゴリー関係にある場合、両者は「継承関係」にある

という。また、下位メタファーが上位メタファーの写像を引き継ぐことを「継承を受ける」という。

鍋島(2011:96)

・メタファーの合成

WISX というメタファーA と、YISZ というメタファーB があり、Y と Z がそれぞれ W と X の属性などの形で、W と Y および X と Z の間に整合性があり、
<<Y な W は Z な X>>などのメタファーC が成立した場合、C は A と B から合成されたメタファーと考える。

鍋島(2011:99)

本稿においても、メタファーのネットワークを想定して、考察を進める。但し、気象現象の概念化に着目するため、メタファー表現を中心にメタファーのネットワークを分析する立場をとる。

日本語の「まだら」の研究としては、鍋島(2003)において、<<感情は液体>>に対し、液体としての感情が全ての液体を表す言語表現と共起しないことを問題として、検証が行われている。「勇気」という感情を取り上げ、以下のように<容認可能な液体としての勇気>と<容認不可能な液体としての勇気>を分析して、勇気は上に向かって出現するものと捉えられていることを指摘した。

<容認可能な液体としての勇気>

- (26) a. 勇気があふれる。
b. 勇気が満ちる。
c. 勇気がほとばしる。
d. 勇気を絞り出す。

鍋島(2003:90)

<容認不可能な液体としての勇気>

- (27) a. *勇気が漏れる。
b. *勇気が垂れる。
c. *勇気がしたたる。

これにより、勇気の液体表現の可能性を規定するメタファーとして「①感情は液体である」、「②よいことは上である」というメタファーの合成を導き出した。このメタファーの合成が衝突することで、液体を表す感情表現と共起しない言語表現も存在すると鍋島は述べている。また、黒田(2005)では、被害発生を表す「襲う」を考察し、概念メタファー理論における領域の曖昧さと理論の過剰般化を指摘している。ここでは、領域が曖昧であるため被害発生を表す「襲う」がどの概念メタファーによって産出されたか特定しにくいこと、同じ領域内でも写像されやすいものと、写像されにくいものがあることなどが、問題とされている。

さらに、鍋島(2003)、黒田(2005)の議論を引き継いだ研究に松本(2007)がある。松本(2007)では、(27)「勇気が漏れる」という言語表現について<<良きは上>>との不整合によるものだとする鍋島に対して以下の例を示して、論じた。

(28) 恵みが降り注ぐ/幸運が舞い降りる/愛情を注ぐ/緑したたる季節

松本(2007:55)

これらの例は下方向への移動を表すメタファー表現が好ましいことを表していることが分かる。もし、<<良きは上>>との不整合が起こるならば、下方向への移動で好ましいことを表す例はメタファー的意味の実現は阻害され、成立しないことになるが実際には成立してしまう。「漏れる」は、<流動物が、本来中に収まっているべき容器から、小さい空隙を通して少量ずつ出る>という基本的意味を持つが、勇気が人にみなぎりあふれているとき、本来収まっているべき領域から出る、あるいは少しずつ出る、とは考えにくい。つまり、このメタファー的対応に合わない要素を「漏れる」は持っていることになる。松本は、そこに「勇気が漏れる」の不自然さがあると述べている。さらに、松本は語の持つ過剰指定と他の語との競合との関係から写像されないとする「語義的経済性の制約」を提示した。

語義的経済性の制約：概念間の対応関係がある時、ある語がそれに基づくメタファーの意味を実現させることができるのは、より適切な語（過剰指定がより少ない表現）がなく、かつ、同じ意味を表すものとして他の語が定着していない場合のみである。

しかしながら、この「語義的経済性の制約」も、メタファーの意味を持つ適切な語になるには何が要因となるのか、類義関係にある言語表現のメタファー的意味の定着の階層性など、検討の余地が残る。例えば、(29)のように他の感情で考えてみる。

(29) 勇気が{*漏れる/湧き上がる}。/不満が漏れる/湧き上がる}。

「勇気」は、「漏れる」ことはないが、「湧き上がる」。それに対して、「不満」では、「不満が漏れる」、「不満が湧き上がる」が容認でき、上下・多少の両方の液体の動きが成立してしまう。言い換えれば、「勇気」、「不満」は共に「湧き上がる」という液体が上の方向に動く性質を持つものに対して、液体が下の方向の動く性質の「漏れる」は「不満」のみメタファー的意味の実現がされる。これは「不満」が持つ少しずつ出てくる側面を持つ性質が表れていることが考えられる。このように目標領域の感情が持つ性質によって、「湧き上がる」と「漏れる」の持つ語の過剰指定や語の競合も変わることが指摘できる。これでは、「感情は液体である」、「感情は方向性を持つ」ということが指摘できるのみであり、共起性を決めるには至らないということである。

この<<感情は液体>>の「まだら」問題については、後藤(2015)でも議論されている。液体の放出を表す動詞は、<力>のスキーマに支えられ、[抑圧]、[活発さ]、[安定性]、等の観点から特徴付けられることを提案している。一つの方向として、(29)で示した例のような場合も、起点領域における液体の放出を表す動詞の意味や同じ感情でもその強さや程度性によって、容認度が変わると考えられる。例えば、同じ「不満」でもちょっとした「不満」は「漏れる」ことはあるが「湧き上がる」ことはなく、激しい「不満」は「漏れる」よりも「湧き上がる」ものとして捉えられてしまう。このような語の意味だけではなくフレームの構成要素や複数の概念メタファーが介在する現象が起こっている。

だからこそ、メタファー表現の基盤となる身体経験を本稿では考えていく。よって、本稿はその様々な側面を考察するために文脈に沿って、メタファー表現を捉え直す立場をとる。

2.4.2 文脈と解釈

次に、概念メタファー理論の争点として、文脈におけるメタファー表現の扱いが挙げられ

る。Stern(2000)は、Lakoff の概念メタファー理論に対して、文脈感応性(context sensitivity)が欠如していることを指摘した。慣習的な隠喩と比べながら、Shakespeare、Talmud、Wittgenstein のテキストにおける the Sun を用いた隠喩を例に挙げ、文脈ごとに領域の構築のされ方は特徴的で、際立つものと背景化されるものや推論のパターンなどがさまざまに異なることを示している。また、Cruse(2008)では、隠喩は起点領域と目標領域の対応関係だけではなく、多くの隠喩には領域どうしの親密な溶解(fusion)があることを提示している。この現象の例として、(30)が挙げられている。

(30) My voice bounced around the near-empty space.

(私の声はほとんど空虚な空間を跳ね回った(こだました)。)

Cruse(2008:149)

ここでは、実体のない声(反響)と跳ね返るボールが溶解している。声がボールとして捉えられているが、声自体はいつもボールとしては捉えられるわけではない。また、それに該当する概念メタファーも存在しない。つまり、溶解しているのは字義的なモノ(声)であり、起点のモノ(言葉で明示されていないボール)は溶解に一役買っているが、それ自体の再概念化はされていない。(Cruse(2011))

また、Fauconnier and Turner(1998)では、(31)のような隠喩において起点領域にも目標領域にもない創発的な意味が生まれる現象を問題としている。そこで、領域の代わりに、基本的な 4 つのスペースを設定するブレンディング理論(blending theory)を提唱した。この理論では、「起点領域」と「目標領域」に該当する 2 つの「入力スペース(input space)」が設定されるが、ここに「起点」「目標」の区別はない。そして、両スペースからの共通の要素を抽出した「一般スペース(generic space)」、2 つの入力スペースを融合する「混合スペース(blended space)」が設定される。

(31) You are digging your own grave.

(あなたは自らの墓を掘っている。)

Fauconnier and Turner(1998:149)

この例は、「本人がそうとは気づかずに大きな失敗につながる愚行をしている」というよ

うな意味に解釈されるメタファー表現である。ここでは、起点領域における<死>が目標領域では<失敗>に、<自ら墓を掘る行為>が<愚行>に対応するはずである。だが、目標領域では<愚行>が<失敗>の原因になるのに対して起点領域では<墓を掘ること>が<死>の原因にならず、対応する要素間の因果関係が一致しない。そこで、ブレンディング理論を用いれば、一方の入力スペースから<死>や<墓を掘ること>など具体的な要素を、また、もう一方の入力スペースから因果関係の方向性を得て、混合スペースで合わせた結果である、という説明がつくとされる。(笠貫(2013:62-63))

さらに、文脈において何をメタファー表現とするかという問題も残っている。例えば、(32)を解釈する場合を考えてみる。

(32) The Mayor of Ankara is the current favourite for the succession.

(アンカラ市長が現在のところ後継者争いの本命だ。)

Deignan(2005:28)

この favourite を単に解釈するならば、基本義からは他の人からえこひいきされている人、文脈からは有権者から気に入られている候補者と解釈できなくもない。しかし、メタファー表現として捉えることで、<<選挙は競馬>>によって「本命」「対抗」「大穴」などの競争フレームが喚起され、「本命」となる候補者と解釈することが適切であろう。(鍋島・中野(2016:9-10))このような、文脈や発話者や発話状況によって字義的にも、メタファー的にも、解釈できるような例はごく自然に存在する。

こういった例に対して、Pragglejaz Group(2007)では、メタファーの認定基準が曖昧であることを問題としている。その問題の解決策として、テキストからのメタファー認定手法である MIP(Metaphor Identification Procedure)を考案した。この手法は、Steen et al.(2010)によって MIPVU として発展されている。但し、この手法自体にも改善点や限界が存在し、また日本語研究においてどこまで応用できるかは今後の研究を待つことになるだろう。(鍋島・中野(2016))

以上のように、先行研究を概観することによって、メタファー表現を考えていく上での文脈の重要性が確認できる。そもそも、自動的に特定のコーパスからメタファー表現を抽出し、タグ付けする手法は多寡をみるためには有効であるとしても限界が存在する。なぜなら、文脈を通してメタファー表現をみていかなければ、写像関係やメタファー的解釈が導き出せ

ないからである。同じ言語形式でも、文脈によって喚起される領域が変わり、解釈も変わるのは、当然であると言える。

2.4.3 概念メタファーの実在性

近年では、心理学の研究においても概念メタファーやイメージ・スキーマの実在性の検証が盛んに行われている。特に、Gibbs(2006)をはじめとする「身体化理論(embodiment theory)」が注目されている。身体化理論とは、認知現象の多くが人間の身体や感覚・運動情報をもとに成り立っている、あるいはそれらと密接に関わりを持っているとする理論である。理解している文の内容が、実際の行動、特に理解している文の内容と関わるような行動に影響する現象は、「行為-文一致効果(action-sentence compatibility effect)」と呼ばれる。行為-文一致効果が認められれば、我々が文を理解している時には、その文が意味するところの行動をシミュレートしていることが考えられるとされる。

日本における研究では、平ら(2006)が、128 の日本語動詞文について、「○が□を持ち上げた」といった短い文を参加者に刺激として呈示し、主語にあたる図形○の位置を固定した4×9 マスのグリッド上に、述語の□を自由に描画させるという実験を行った。この描画法は、主語と述語の位置関係から、参加者の動詞そのものの空間表象を検討することを目的とする。その結果、「持ち上げた」「捨てた」といった具体的な行為を表す動詞について、□の描画位置は上方向または下方向に描かれる傾向にあることが明らかになった。同様に、「尊敬した」「軽蔑した」といったような抽象的な行為を表す動詞に関しても、具体的な行為を表す動詞同様に上方向や下方向に□が描画される傾向にあることが分かった。この結果によって、具体文、抽象文、共に行為-文一致効果がみられ、抽象概念をもとにした動詞を理解する際には、空間的な情報が同時に生起することが支持された。

この結果が全面的に支持できるかについて、平ら(2009)では、さらなる検証として行為文理解時における空間認知について検討を行うことを目的とする実験を行っている。この実験では、聴覚的に呈示された文の意味判断課題と視覚刺激同定課題の二種類が用いられた。実験参加者は、刺激文の上、下、水平方向のイメージを聴覚的に聞き、直後に参加者の視野上方向ないし下方向に出現する刺激が何であるかキーボードのキーで同定することが求められる。刺激同定に要する時間を従属変数とし、行為文の理解が実際の行動に与える影響が検証された。この実験の結果においては、具体文では、行為-文一致効果がみられ、行為文の理解はその文のイメージが意味する方向に出現する刺激の同定を促進させることを示し

た。しかし、抽象文では、行為-文一致効果がみられず、刺激同定課題に対し、行為文を理解したことによる影響はみられなかったという結果になった。

結果については、今後の検証を待つことになるが、考慮すべき要因は存在するだろう。平(2010:262-264)においても、具体概念は必ずしも抽象概念と 1 対 1 対応の関係で結び付いているわけではないことが述べられている。例えば、平は、空間の上下は感情の悲喜、質の良し悪し、量の多少なども想起されることを挙げている。本稿も、具体概念と抽象概念との対応関係だけではなく、その多義性や比喻性も検討する必要があると考える。

2.5 その他援用する諸概念

本稿で用いるその他援用する諸概念をここではまとめる。本稿では、特に断りのない場合、以下の意味で用語の概念を用いる。

2.5.1 概念化

Langacker(1987、2008)によれば、認知言語学では意味は概念化であると説明される。概念化は認知言語学の根幹をなす概念である。吉村(2013)は、「概念化」について以下のよう

に記述している。

概念化は認知意味論における「解釈」(construal)とほぼ同義であるが、解釈が概念内容(conceptual content)の個別的理解に重点を置く述語であるのに対して、概念化は理解における認知過程に重点が置かれる。われわれは本来、様々な身体能力(五感、運動、生理感覚)や生物学的能力(神経機構、大脳生理、内臓機能)を持った存在である。普段の日常経験の大半は、無意識であるが、こうした身体性(embodiment)と外界(すでに貯蔵されている記憶などの心の世界も含む)との交流を通じて営まれている。身体性と外界の交流が生み出すものは、例えばある物を見て一定のイメージを喚起したり、状況や前後関係から推論を行って結論を導いたり、出来事がきっかけになって特定の記憶を呼び起こし、付随してポジティブな感情や嫌悪感を抱いたりすることである。このように、「身体性」→「外界との交流」→「イメージ、記憶、感情、推論・判断」と連なる一連の認知過程において意味が構築・創造されることを概念化と呼ぶ。従って、表現の意味とは、言語使用者である概念化者(概念主体)(conceptualizer)が、ある物、ある事態に対してどのように認知処理を行ったかを通して顕在化する不断に動的な性

質のものである。

吉村(2013:29)

これに似た概念に「捉え方」と「解釈」がある。もちろん、これらの概念は連続的に存在する。菅井(2013)では、この区別について次のように述べている。

「解釈」とは、発話のプロセスにおいて把握事態を分節し、意味あるものとして構築する創造的な営みを言う。解釈の仕方を特に「捉え方」と呼び、専門用語として用いる。言語表現の構造や体系は、究極的に「把握事態をどう解釈したか」によって決まるといえるのが概念主義の意味観である。発話された言語表現を読み取る意味での「解釈」(interpretation)と区別する。

菅井(2013:27)

本稿における、「概念化」、「捉え方」、「解釈」は、これらの考えに従う。すなわち、外界の現象に対する解釈の仕方を「捉え方(construal)」、捉え方に基づき意味が構築・創造されることを「概念化(conceptualization)」、言語化された文脈において読み取った意味を「解釈(interpretation)」と呼ぶことにする。つまり、本稿では、「光」や「天候」を知覚して解釈している段階を捉え方、その捉え方に基づき意味を構築・創造することを概念化、概念化して言語表現として現れたものを文脈に基づき意味を読み取ることが解釈である。

2.5.2 領域

認知言語学では、概念は単独で存在するのではなく、前提/背景となる知識構造の中で関連づけられることによって初めて成立すると考えられる。このような、知識の総体を領域(domain)と呼ぶ。Clausner and Croft (1999)は、Lakoff の概念メタファー理論における領域、Langacker の認知文法における領域、Fillmore のフレーム意味論におけるフレームは、大枠同じ概念を表すとするという見解を示している。鍋島(2011)でも、この見解は引き継がれており、以下のように述べられている。

領域の考え方に従えば、人間はある事物や言語表現をそれ自体として認知しているのではなく、ある事物や言語現象からそれにまつわる領域を想起し、(場合によっては複

数の領域の選定、調整、統一化をおこないながら) 領域に関する知識を援用して推論や決定をおこなっていることになる。

鍋島(2011:32)

こういった議論を踏まえ、鍋島は「ゲシュタルト性」と「局所性」を持つものとしての領域を想定している。鍋島によれば、「ゲシュタルト性」とは、特定の概念や知識はグループをなしており、全体の想起なしに一部だけでは想起できないという意味である。また、「局所性」とは、人間の知識には容量的な限界があり、一時に想起される知識に制限がある、という意味である。

本稿では、次の概念メタファーを設定し、概念領域間の考察を行う。主な考察対象となる概念メタファーは、<<喜びは光>>、<<知識は光>>、<<希望は光>>、<<興奮は熱>>、<<愛は火>>、<<優しさはあたたかさ>>、<<感情は天候>>、<<思考は天候>>、<<状況は天候>>、<<言動は風>>、である。そして、これらの概念メタファーが複数のプライマリー・メタファーの影響を受けていることと各々の概念メタファーが相互に関係していることも本稿では提示する。

2.6 本章のまとめ

本章では、認知言語学における概念メタファー理論に至るまでのメタファーの研究史を確認した。そして、概念メタファー理論の争点を指摘した。それに基づき、前提とする言語観と援用する諸概念について述べて、本稿の立場を提示した。

次章以降は、このような考え方に基づいて、実際に言語表現の分析を行っていく。

第3章 「光」と視覚に関するメタファー表現—「明るい」と「暗い」—

3.1 はじめに

本章では、「光」の明るさを表す「明るい」と「暗い」を取り上げ、「光」の概念化のプロセスを探る。「光」は空間で知覚されることにより、我々に様々な身体経験をもたらす。空間における「光」の明るさは「明るい」「暗い」と捉えられ、視覚に影響を与える。そして、視覚の「見える」という経験が感情・知識・時間を目標領域として写像される。それによって、物理的に「光」を発しているわけではない人や物事が「光」を発するかのように「明るい」「暗い」と捉えられている。だが、なぜ感情・知識・時間が明るさを通して捉えられるか、その写像の動機づけは明らかになっていない。また、以下のような例では、(1)知識領域、(2)時間領域において、容認度に差がでることが指摘できる⁴。

- (1) 地理に明るい。/??(趣味の)釣りに明るい。
- (2) ??明るい過去。/暗い過去。

このように、写像に偏りが存在し、全てにメタファー的意味の実現がされるわけではない。しかし、この写像の偏りの要因は明らかになっていない。

これらの現象の要因として光源(発光体・反射体)、光り方(瞬間的・持続的)、届き方(前/後・中心/周辺)の3点の「光」の捉え方が目標領域における「光」の概念化に影響を与えていると考える。さらに、この「光」の捉え方がメタファー的意味の実現の制約となることを主張する。

3.2 「光」の概念化と明るさ

「光」に関するメタファー研究として、瀬戸(1995a)は、光の最大の特性を「明るさ」とし、メタファーとして意味を展開する際、互いに関連する意味の方向性として(1)輝き、(2)希望、(3)明らかなを、挙げている。他に、鍋島(2011)でも<<希望は光>>が提示されている。

⁴ NINJAL-LWP for BCCWJ(最終アクセス日 2016/05/03)で調査したところ、(1)「～に明るい」の用例は208例あり、その中で「名詞+～に明るい」は、「地理」「事情」「法律」のように専門的な知識がほとんどを占める。一方、趣味のような必要とされない知識については、「ゲーム」1例、「ブランド」1例ぐらいしか見つからなかった。また、(2)について、「明るい」が名詞を修飾する用例は2590例あり、時間に関する名詞を修飾する場合は「未来」「将来」など未実現の時間に関する用例が大半であって、「過去」のような既に起こってしまった時間に関する名詞を修飾する用例は1例も見つからなかった。

並びに、山梨(2000、2012)は、<理解>の概念の見立てに使われる一つに<光モデル>を挙げている。これを反映する表現として「光が当たる」「明らかになる」「明るみに出る」「白日の下にさらされる」などに言及し、その背後に近接性のリンクの存在を指摘している。

そして、Kövecses(2010[2002])においては、<<HAPPINESS IS LIGHT>> (喜びは光)が挙げられている。また、<<KNOWN IS LIGHT>> (既知は光)が、<<KNOWING IS SEEING>> (理解は見ること)の具現化であることが言及されている。Deignan(2005)では、<<KNOWN IS LIGHT>>、<<HAPPINESS IS LIGHT>>、<<GOODNESS IS LIGHT>> (良いことは光)について、コーパス調査が行われている。他に、視覚に関する概念メタファーとして Lakoff and Johnson(1980)、Sweetser(1990)、Grady(1997)においても、<<KNOWING/UNDERSTANDING IS SEEING >> (理解は見ること)が挙げられている。これらの先行研究を通して起点領域が光となる場合、目標領域は希望、感情、知識が写像されることが確認できる。

一方、入学(2002)では「光」を遮る遮蔽物について提示されている。日中を<遮蔽物が存在しない>状態であるとし、太陽光からの派生概念「透明」、「無」、「白色」を挙げ、その対極にある闇を<遮蔽物が存在する>状態であるとし、派生概念「不透明」、「有」、「有色」を挙げている。この遮蔽物については、<<A PRODUCER OF NIGHT IS A COVER >> (夜を作り出すものは遮蔽物である)という記述がある。つまり、遮蔽物は「光」を遮る性質を持ち、視界に影響を与える。

さらに、Sullivan(2013)では、英語における光自体が持つフレームが提案されている。Sullivan は、光自体に、<LOCATION_OF_LIGHT frame>と<LIGHT_MOVEMENT frame>が存在し、それぞれの光に関する言語表現において喚起されるフレームが異なることが指摘されている。以下の図のように、それぞれのフレームの構成要素と喚起される言語表現がまとめられている。

図 2-1 LOCATION_OF_LIGHT frame(sunny, bright, dark)

■ LIGHT
■ FIGURE
■ GROUND
■ DEGREE (of brightness)
...etc.

Sullivan(2013:39)

図 2-2 LIGHT_MOVEMENT frame(brilliant, bright, dim)

■ EMITTER
■ BEAM
■ DEGREE (of brightness)
...etc.

Sullivan(同上:40)

つまり、<LOCATION_OF_LIGHT frame>は、光自体の存在する場所に関するフレームである。このフレームでは、FIGURE は光を発する物事や人を発光体として捉えている。一方、<LIGHT_MOVEMENT frame>は、光自体の移動に関するフレームである。このフレームでは、光は物体化され、移動物として捉えられている。

Sullivan によれば、<< HAPPINESS IS LIGHT >>において、sunny と bright は、写像されるのに対して、brilliant の写像が起こらないのは、このフレームの喚起の違いが原因であるとされる。これは、sunny と bright は、<LOCATION_OF_LIGHT frame>が喚起され、光の位置である GROUND と幸せな状態が位置として対応されるのに対し、brilliant は、<LIGHT_MOVEMENT frame>が喚起される光の動きを表す言語表現であり、光の位置である GROUND を含んでいないため写像が起こらないという説明になる。換言すれば、光自体の存在する場所に関する言語表現である sunny は幸せな状態と光の位置が結び付くのに対して、brilliant は光の動きを表す言語表現であるため状態を表す位置とは結び付かないと考えられる。Sullivan は、こういった現象を通して、不変性原理はイメージ・スキーマだけではなく喚起されるフレームまで拡大適応すべきであるとの主張をしている。

「明るい」の意味については、大石(2007)は「感覚と気分の同時体験」・「心の理論」・「尺

度融合」の3つの認知機構の観点を用いて「明るい」の意味を分類している。また、今井(編)(2011)でも、「明るい」と「暗い」を多義語として意味の記述を行っている。共に、「はっきり見える」という経験に基づく視覚と将来や未来などの時間との関係にも言及されている。さらに、空間と時間との関係については、Lakoff and Johnson (1980)において<<FUTURE IS FRONT;PAST IS BACK>> (未来は前;過去は後)が挙げられている。これらの先行研究は、「光」がもたらす「見える」という経験が感情・知識・時間を目標領域として写像されることを示している。

以上のような研究があるものの、現代日本語において、どのような場合に「光」に関する言語表現のメタファー的意味が実現されるか、阻害されるか、先行研究では明らかになってはいない。

浅野(1979)では、日本語における光に関する表現「光る」と「輝く」の分析から、光源には、太陽・月・星などの「天体」、電灯・ネオン・シャンデリアなど人工の「発光体」、ダイヤモンド・金銀などの宝石や金属などの「反射体」⁵が存在することを指摘している。また、「光る」は、瞬間的・持続的な光であり、「輝く」は、「光る」よりもさらに持続的な光であることも分析されている。そもそも、反射体は別の光源である発光体が存在しなければ、光源になり得ないという点で、発光体と性質に大きな違いがあると言える。

本稿では、この浅野を援用し、「明るい」と「暗い」において、光源・光り方・届き方、という3点の「光」の捉え方を考える。まず、光源として「光」を発する「発光体」⁶、「光」を反射する「反射体」の2種類に分類する。また、光り方には、瞬間的・持続的の2通り、届き方としては、前/後・中心/周辺の2通りを設定する。

3.3 「明るい」と「暗い」の考察

本節では、身体経験における「明るい」と「暗い」の性質を考察した後、目標領域である感情・知識・時間における「明るい」と「暗い」のメタファー的意味の実現を実際の用例を基に考察する。

⁵ 浅野(1979)は、波・水面・雪なども反射によって、光ったり、輝いたりすることにも言及している。

⁶ 本稿では、「明るい」「暗い」を分析する上で、「天体」を光源として持続的に強い「光」を発するという点で「発光体」と同一の性質を持つものと考え、「発光体」に含まれるものとする。

3.3.1 身体経験における「明るい」・「暗い」の性質

3.3.1.1 「明るい」・「暗い」の制約

「光」の明るさについて、久島(2001)では、「明るい」と「暗い」は、場所における光の明るさを表す表現であると提示している。久島は、これらの語が物に使える場合は、月・電灯などの光源が地上や部屋をどの程度照らしているかが問題となることを述べている。しかし、(3)～(5)にあるような制約が存在する。

- (3) 電球が{明るい/暗い}。
- (4) ダイヤモンド・金銀が{??明るい/?暗い}。
- (5) 点滅した・ちかちかした電球が??明るい。

まず、光源が発光体である(3)「電球が{明るい/暗い}」が言えるのに対して、(4)「ダイヤモンド・金銀が{??明るい/?暗い}」など光源が反射体の「光」には、「明るい」・「暗い」が使いにくいという制約が指摘できる。反射体の「光」は、空間を十分に照らすほど強くはないからである。さらに、(5)「点滅した・ちかちかした電球」でも、瞬間的で弱い光では空間を照らすことができないため容認度が下がる。一方、「電球」というものは、誰かが消さない限り、もしくは、それ自体が切れない限り、消えることのない持続的な発光体である。つまり、物自体が何かを照らさずに単に「光」を放っている状態は、「明るい」・「暗い」ではなく「輝かしい」「眩しい」などと捉えられる。

ここから、光源が瞬間的な「光」では、空間の明るさを保つことができないことが確認できる。我々が明るさを知覚するには、発光体による持続的な「光」を必要とする。言い換えれば、空間が明るくなるには、光源の持続的な「光」によって照らされなければならない。また、(6)～(8)では、光と発光体の明るさについて考える。

- (6) 部屋が{明るい/暗い}。
- (7) 電球が{明るい/?輝かしい/眩しい}。
- (8) 街灯が{明るい/輝かしい/眩しい}。

(6)「部屋が{明るい/暗い}」では、部屋という空間において「光」が照らされている。言い換えれば、発光体の持続的な「光」が存在することが含意される。そのため違和感なく容認

できる。さらに、発光体について考えると、(7)のような解釈の違いが出てくる。「電球が明るい」場合には、適切に発光体が空間を照らしている状態である。「電球が??輝かやかしい」場合、電球は小さい発光体で弱い光を放つため容認度が下がってしまう。但し、「電球が眩しい」場合は、放たれた光の視覚への働きに焦点が当たるために容認される。(8)「街灯」のようなものは、空間を照らすこともでき、強い光を放つことができるため「明るい」「輝かしい」「眩しい」でも容認される。

以上のように、「明るい」と「暗い」には、次の制約が存在する。我々が明るさを知覚するには、光源である発光体の発する持続的な「光」を必要とする。光源が反射体で瞬間的な「光」では「明るい」とは捉えにくい。「明るい」と「暗い」は、発光体の発する持続的な「光」による空間の明るさを表す言語表現であると言える。

3.3.1.2 空間における「明るい」・「暗い」

我々は、明るさが保たれてはじめて空間を知覚することができる。反対に、明るさが保たれていない空間では、我々は対象を見ることができず、方向も分からず、動くことさえできないこともある。(9)～(12)は、「光」による空間の届き方に関する用例である。

- (9) 頂上が近づくにつれ、木々の間隔がまばらになり、眼の前が明るくなる。(BCCWJ: 西谷史『ブラディー・セイント女鬼』)
- (10) 同ドラマ全体のセットづくりについて「女性が主役なので荒々しい映像にはしたくない。小道具や造園、植木をうまく背景に入れ込んで、(人物の)後ろが暗くならないような雰囲気を出すように設計している」と思い入れを語った。(毎日新聞 2011/02/18)
- (11) ペンギン島がライトアップされるなど、ナイターならではの演出もあった。ペンギンは夜間、ペンギン島でじっとしていることが多いが、ライトに照らされて周囲が明るいため、通常の夜間より活発でプールで泳ぎ回る個体も。(中日新聞 2013/08/06)
- (12) 現場は片側1車線の直線で、街灯がなく暗い場所だった。(読売新聞 2013/11/13)

(9)では、「光」を遮る遮蔽物である木々の間隔がまばらになっていき、暗い状態が明るくなることが表されており、眼の前の遮蔽物がなくなると、明るくなることが確認できる。一方、(10)のドラマのセットでは前から光源であるライトなどの「光」を持続的に当てても、

後ろが暗くなることが述べられている。このように、「光」は前に存在するものであり、後ろは「光」が届きづらく、必然的に暗くなる⁷。

そして、(11)は、夜のペンギン島で光源であるライトを中心に周辺が明るくなっていることが分かる。中心であるライトに近接する空間は明るい、遠ざかると暗くなる。さらに、(12)のように太陽の「光」も届かない夜に光源である街灯がないと、暗くなる。

以上のように「光」の届き方を考えると、光と空間との関係は、Johnson(1987:112-126)の提示するイメージ・スキーマの中の<前/後>、<中心/周辺>に一致する。つまり、前や中心は、「光」が当たる状態であり、後/周辺は、「光」が当たらない状態であると捉えられる。

3.3.1.3 視界における「明るい」・「暗い」

「光」の明るさは、人間の視覚によって捉えられる。(13)～(15)は、視界における明るさに関する用例である。

- (13) 双眼鏡の内部にあるプリズムに特殊コーティングを施して反射を防止し、集光効果を向上。視界が明るくなり、くっきり見える効果があるという。(日経産業新聞 2013/04/17)
- (14) 不慮のけがや道に迷った時に、思いがけず下山に時間を要することもある。ふもとに近づくほど、多くの木々に遮られて視界が暗くなり、焦りにもつながる。(読売新聞 2011/09/01)
- (15) また終始、明るい時間帯を歩くため、夜の登山に比べると安全。ただ明るい時間帯とは言っても、早朝や下山に時間がかかった場合は暗く見通しが悪くなることもあるので、ヘッドライトなどは忘れずに。(<http://news.mynavi.jp/news/2014/07/01/011/>)

(13)では、双眼鏡内部のプリズムが光源である太陽の「光」を集め、視界が明るくなることで、くっきり見えることが分かる。だが、(14)のように光源の太陽の「光」が木々のような遮蔽物に遮られると視界が暗くなる。暗い状態は、見えない状態であり、焦りにもつながる。また、遮蔽物がなくなると、「光」が差し込み明るくなる。(15)にあるように、「明るい

⁷ この現象を反映した言語表現として「後ろ暗い」がある。「後ろ暗い」には、「①内心やましい点がある。うしろめたい。「私は一・いことはしていない」 ②行動に裏表があって疑わしい。「君をも一・き御事に思ひ奉りて／盛衰記 8」 [派生] 一さ (名) 」(『大辞林』第三版(2006:218))という記述があり、後ろが暗くなり、見えなくなることが好ましくない状態を表す言語表現であると言える。

時間帯」には、太陽光が照らすため、我々は、対象を見ることができ、安全に動くことができるのに対して、「暗い時間帯」は、見通しが悪く、動くことが危険である。

我々は日頃「明るい」ことで見ることができ、「暗い」ことで見えないことを経験している。空間の中で視界は、遮蔽物に遮られると暗くなる。また、目をつぶったり、暗い方面に視線を逸らしたりするなど、意図的に身体を動かすことで視界が「暗い」と捉えられる。

もし、明るくなければ、我々は対象を見ることができず、目の前に何があるか、視覚的に把握できない。活動する際に、何かにつまずいたり、襲われたりすることも、察知することができない。明るければ、それらを避けることができ、安心することができる。遮蔽物のない「明るい」状態とは、何も塞がれていない状態であり、爽快感が伴う。「光」の明るさは、我々が活動することの手助けをし、活力や楽しみや喜びなどの感情とも結び付く。「明るい」とは対象を見ることができ、安心して活動できる好ましい状態であり、「暗い」とは対象を見ることができず、不安で活動できない好ましくない状態である。

3.3.2 メタファー的意味における「明るい」・「暗い」の性質

3.3.2.1 感情領域における「明るい」・「暗い」

身体経験における明るさは、我々の感情にも影響を与える。(16)～(19)は、感情領域における明るさに関する用例である。ここでは、<<喜びは光>>における「明るい」・「暗い」についてみる。

(16) これまで、どこの病院も、予約とは名ばかりで、長時間待たされるのは当たり前。しかし、この病院は予約時間通りに診察してくれます。病状をきちんと説明してくれ、薬の飲み方や費用のことなども患者の意向をしっかりと聞いて処理してくれます。

これこそが患者の目線に立った診察ではないかと思います。暗くなりがちな病気との闘いに、先生の変わらぬ態度とわかりやすい説明は「きっと病気も良くなる」と、明るい気持ちにさせられる病院です。(東京新聞 2013/10/14)

(17) 「作業しながらのおしゃべりが楽しい」「利用者さんから元気をもらう」。利用者、職員に交じり、縄跳びを組み立てる六、七十代の女性らの表情は明るい。(中日新聞 2010/08/26)

(18) 話を親身に聴き、保育所に入所するにはどうしたらいいのかを一緒に考え、丁寧に説明し、他にも幼稚園や保育所の一時預かり、子育て広場、育児相談の窓口などを案内

します。話しているうちに、不安に思っていたことや相談できなかったことを話したり、利用できるサービスを知って、暗かった表情がだんだんと明るくなり、最後に「ありがとうございました。」と言っていた時がうれしいです。

(<https://job.rikunabi.com/2016/company/senior/r432280052/K104/>)

- (19) 受験生や引率者の控室となった建物では、受験生同士で昼食を取りながら試験内容を話し合ったり、引率の教員に報告したりする姿が見られた。すべての試験を終えると、一様に緊張感から解放され、明るい表情を浮かべていた。(中日新聞 2014/01/20)

(16)では、病気で「暗い気持ち」になっている時に、医者「変わらぬ態度とわかりやすい説明」によって「明るい気持ち」になると捉えられている。つまり、病気で活力のない状態である「暗い気持ち」が医者の言動によって、心という空間に遮蔽物として存在した不安が消え、希望を感じたのが「明るい気持ち」である。「光」が照らす「明るい」状態は、人間にとって遮蔽物がなく、対象を見ることができる。見えることによって、不安がない状態になり、行動することができる。言い換えれば知覚者の心の中の希望を見出すことができる物事が発光体であり、その物事から想定される活動的で前向きな気持ちである感情が「光」として捉えられているのである⁸。

さらに、(17)～(19)は、感情が表情に表れるメトニミー⁹表現である。(17)のように知覚者が楽しみや喜びを感じたり、活発で元気になったりすると心が明るくなり、その感情が表情に表れる。これは、知覚者が発光体となり、「光」となる楽しみや喜びなどの感情が表情との隣接性に基づくメトニミー表現である。(18)でも、発光体である相談者が不安に感じている状態が「暗かった表情」であり、それが話者と相談することで不安がだんだん消えていき「光」となる安心感を発して、「表情が明るい」と捉えられる。また、(19)のように試験の緊張から解放され、受験生も発光体となり、「光」となる安心感や爽快感を発すると「明るい表情」になる。

これらの言語表現は、身体経験における「光」を遮る遮蔽物がなくなって、「光」が差し

⁸ この用例は、現段階で深く踏み込めないが<<希望は光>>と<<喜びは光>>が連続的に関係する可能性も考えられる。一つの可能性として、知覚者の心の中の希望や感情が発光体となる「明るい気持ち」と解釈する場合がある。もしくは、ある人に対して感情を持った発光体と周りの人々から捉えられる「明るい人」と解釈する場合がある。これは、発光体が知覚者の心の中にあるか、発光体が知覚者そのものにあるかという発光体の捉え方に違いがあって、文脈に左右されることもあるだろう。

⁹ 本稿におけるメトニミーは、西村(2008:82)の「ある言語表現の複数の用法が、単一の共有フレームを喚起しつつ、そのフレーム内の互いに異なる局面ないし段階を焦点化する現象」という定義に従う。

込む状態を基盤としている。従って、精神的な遮蔽物である不安や緊張が存在する暗い気持ちと表情との隣接性に基づき表れるのが「暗い表情」であり、活気と共に喜びや楽しみなど幸福に関する感情が表れることや、精神的な遮蔽物が消えることで自由に活動できることが安心感や爽快感として感情と表情の隣接性に基づき表れるのが「明るい表情」として捉えられている。つまり、感情を持つ知覚者が発光体となり、喜びに関する感情や安心感や爽快感が「光」として捉えられ、感情と顔の表情の隣接性に基づきに表れるのが「明るい表情」である。

3.3.2.2 知識領域における「明るい」・「暗い」

「光」が存在することで「見える」という我々の身体経験は、知識領域へと写像される。本節は、<<知識は光>>におけるメタファーの意味で用いられる「人ガ知識分野ニ明るい」という特殊な構文を検討する。まず、(20)～(22)は、知識領域における明るさに関する用例である。。

- (20) 若い頃、しばらくこのあたりに住んでいた私は、地理に明るい。(日本経済新聞 2014/02/06)
- (21) ところが日本では、そんな経験を持つバイオベンチャー経営者はほとんどいない。投資するベンチャーキャピタル(VC)側にもこの分野に明るいプロフェッショナルが少なく、単に科学・技術的評価が高いというだけで投資決定をしてしまいがちだ。(日経産業新聞 2010/12/28)
- (22) 山梨町長は「電力業界の事情に暗く、勉強不足だった。契約に対する過信もあり、こうした事態になって遺憾だ」としている。(東京新聞 2012/06/05)

(20)「地理」、(21)「バイオ」について知識を持っていることを「明るい」と捉えている。そして、(22)「電力業界の事情」について、知識が乏しいことを「暗い」と捉えている。

これらの知識に共通することは、知識を「光」と捉えていることである。知識も、一度習得すれば忘れない限り、持続的に利用することができる。これは、発光体の持続的な「光」が照らすことで周辺を明るくするという性質に一致する。

人にとって能力が発揮される知識とは、誰かから必要とされる専門的な知識である。「光」は、光源の中心から暗い周辺へ届く性質を持つ。つまり、人を光源である発光体、知識を「光」

と捉えている。動物や昆虫と同様に人も「光」を求めて集まる。「～に{明るい/暗い}」の形式についてみても、ここでの「ニ」格は、能力の発揮される対象の「ニ」格¹⁰であると考えられる¹¹。光源である発光体の人が専門的な方面に能力を発揮する知識としての「光」を持っていることが指摘できる。

さらに、「～に{明るい/暗い}」に関して、以下のような制約が存在する。(23)～(25)について考える。

(23) 彼は??(趣味の)釣りに明るい。

(24) 彼は??ケーキに明るい。

(25) 様々な洋菓子を扱うそのお店のパティシエの中でも、彼はケーキに明るい。

(23)「(趣味の) 釣り」、(24)「ケーキ」は、個人の好みに左右されるものであり、「光」としては捉えられない知識である。従って、周辺の他者に有益な知識にはならず容認度が下がる。

よって、(24)の容認度を上げるには、(25)「様々な洋菓子を扱うそのお店のパティシエの中」のような周りの人間を設定する。パティシエが求められる知識を持つということを明示すると、ケーキの知識でも周りのパティシエを照らすことができる「光」として捉えられる。言い換えれば、光源の発光体であるパティシエの持つ知識が「光」と捉えられている。ここから、「～に{明るい/暗い}」は、「～{に詳しい/詳しくない}」とは意味が異なり、周辺の他者に有益な知識と捉えられなければ容認度が下がるという制約が存在することが指摘できる。

3.3.2.3 時間領域における「明るい」・「暗い」

我々は、空間での身体経験を基に時間領域においても「明るい」・「暗い」と捉えている。

¹⁰ 小矢野(1980)では、能力の発揮される対象の「ニ」格が提唱されている。「名詞 1+ガ 名詞 2+ニ 形容詞」で、名詞 1 は人間、形容詞に「明ルイ、暗イ、詳シイ、ウトイ」が入る場合、どんな方面に関する知識なのか名詞 2 に表されると指摘している。この際、名詞 2 には、人間の知識の対象となり得る広い範囲の名詞が用いられる。

¹¹ 大石(2010)において、起点領域、目標領域で共起する助詞が異なる現象に言及がなされている。例えば、「あふれる」は、起点領域では「液体」に対して多く「ガ」格をとり「ニ」格がほとんど現れないが、目標領域の活気・感情では「魅力」「活気」「喜び」などは「ガ」格より「ニ」格を多くとる。これらの現象の要因として、メタファーにおいて変更あるいは限定された意味と相性のよい構文が選択されやすいという傾向が提示されている。「明るい」「暗い」も、起点領域では「～が{明るい/暗い}」では「ガ」格をとるが、目標領域の知識領域では「～に{明るい/暗い}」のように形式上「ニ」格をとる現象も、能力の発揮される対象の「ニ」格と相性が良く、その影響を受けていると考えられる。

時間領域では、時間という空間の中で、<<希望は光>>によって未実現の物事が光源である発光体として希望と捉えられていることを主張する。(26)～(29)では、時間領域における明るさについて考える。

(26) 彼には未来がある。/彼には過去がある。

(27) 彼には{明るい/?暗い}未来がある。/彼には{??明るい/暗い}過去がある。

(28) しかし、悲観してばかりでは将来が暗くなります。(東京新聞 2013/12/29)

(29) 暗い過去のせいでストレスになっていたことが、輝かしい過去に変わればもう恐怖も不安もなくなります。(http://happy lifestyle.com/2745)

(26)では、単純に好ましい未来、好ましくない過去に解釈される。これは、様々な未来や過去が存在する中、意味が範囲を狭め、特定されるシネクドキーである。未来は未実現の物事を含意しており、過去は既に物事が起こってしまっている状態で戻ることができない。物事は、時間を経ることで進行していく。我々にとって未来は前にあり、前は進行方向であると捉えられている。そして、視界が遮られない限り、この未実現の物事は前と捉えられる未来に見える。未来は、発光体である未実現の物事が発する希望に照らされる空間と捉えられることが指摘できる。

だが、(27)「明るい未来」と「?暗い未来」、「??明るい過去」と「暗い過去」では、容認度に差が出る。時間を空間と捉える中で、前は見ることができることによって「光」があると捉えられる。同時に、自分の前に「光」があれば、自分の背後は自分が遮蔽物となって暗い影になる。これによって、前にある未来は「明るい」、後ろにある過去は「暗い」、という「光」の届き方が生まれる。「光」による空間の届き方が制約となり、容認度に差が生じることが指摘できる。なお、(28)「将来が暗くなる」のように、「見通しがきかない」状態は、前のことでも暗くなることもある。未来は多くの不確定要素や不安要素で遮られることで見えないう点では共通するが、希望が持てる未実現の物事の存在する未来は明るく、不確定要素や不安要素が遮る未来は暗くなる。

一方、過去は、好ましいことでも既に起こった具体的な出来事であり、特定することができる。つまり、過去は、既に実現されてしまった物事として捉えられる。それにより、空間として捉えるよりも物として概念化が起こる。未来に関する言語表現にはない「過去を引き

ずる」「過去を背負う」などが示すように、既に起こってしまった過去は物として捉えられる。よって、空間の明るさを表す「明るい」ではなく物自体の放つ強い光を表す(29)のように「輝かしい」の方が、容認度が上がる。

この「光」と捉えられる希望は、知覚者によって捉え方が変わる。(30)～(34)は、身体の向きによって明るさが変わる用例である。

(30) 彼は過去を振り返った。瀬戸(1995b:101)

(31) 彼は過去に目を向けた。

(32) コンフェデ杯後、暗い過去を振り返るより、明るい未来に期待したほうが得策とばかり、一瞬、盛り上がりかけていた代表監督交代を望む声は、すっかり萎んでしまった。

(<http://news.livedoor.com/article/detail/7871295/>)

(33) 土山さんは治安維持法が公布された1925年、長崎市で生まれた。青年時代は警察、特高警察、憲兵が市民を監視する暗い時代だった。(毎日新聞 2013/08/10)

(34) 自身はプリンストン大に招かれる前、学問も市民運動も充実した時期だった。「書いていて、今がいかにかに1960年代と違うか、明確になりました。60年代は若者にとって先に希望の持てる明るい時代だった。今は老いの時代。社会の主要テーマが年金、高齢者医療、介護、少子化でしょ。人類的主要テーマといえば、資源の枯渇、環境問題、発展途上国の飢え、それらを巡る内戦や戦争、自然災害。気の毒なくらい楽しくない時代ですよ」穏やかな表情、柔らかい口調。でも出てくる言葉は厳しい。(毎日新聞 2008/05/23)

(30)、(31)では、知覚者の身体の向きを変えることによっても過去が捉えられることを示している。我々は、通常は前を向いて生活をしている。だが、「振り返る」「目を向ける」のように身体の向きを変えることで後ろを見ることが可能となる。(32)のように「コンフェデ杯後」を基準にすれば、「暗い過去」を振り返り、「明るい未来」に期待することができる。

(33)では、1925年に生まれた話者である土山さんが終戦後から戦前である自身の青年期の時点を視点に立って身体をおいている。発光体になり得るはずの物事に対して、希望を見出すことができず「光」を捉えられない「暗い時代」であると述べている。さらに、(34)では、1960年代のある時点で視点に立って話者が身体をおいている。学問も市民運動などの発展性のある未実現の物事を発光体とし、それらに対して「光」である希望を感じた「明る

い時代」と捉え、一方、現在は問題が山積する楽しくない時代だと捉えている。

以上のように、我々は、時間を空間として捉えている。その空間は、未来は前、過去は後ろ、という捉え方が存在する。未来は、未実現の空間が含意され、過去は既に起こってしまった物として捉えられている。但し、ある空間としての時間に対して身体の向きを変えることもできる。

3.4 本章のまとめ

本章では、「明るい」と「暗い」における、「光」と視覚を基盤としたメタファー的意味の実現を明らかにした。その背景には、光源（発光体・反射体）、光り方（瞬間的・持続的）、届き方（前/後・中心/周辺）、の3点の「光」の捉え方が影響を与えている。空間の明るさが保たれるためには、発光体を光源とする持続的な「光」を必要とする。この「光」と空間の関係によって、前/後、中心/周辺、という届き方が形成される。但し、「光」が遮蔽物によって遮られると暗くなる。

感情領域において、<<喜びは光>>によって、人が光源として発光体になり、喜びに関する感情が「光」と捉えられる。つまり、「光」によって見えることで、活気、楽しみ、などを伴い活動できることにより喜びに関する感情が「光」として捉えられる。また、心に不安や心配や緊張のような遮蔽物が存在する場合、その遮蔽物が消えることで安心感、爽快感などの感情も「光」としても捉えられる。なお、これらの感情の解釈は文脈に左右され、連続的である。

知識領域において、<<知識は光>>によって人が光源として発光体となり、知識は「光」と捉えられる。さらに、中心となる人が持つ知識が周辺の人々に必要とされないと「光」として捉えられないという制約となる。

時間領域において、未実現の物事が光源として存在する。<<希望は光>>によって、空間としての時間における未実現の物事に対して、知覚者が希望を持つことで発光体として、「光」を発すると捉えられる。それによって、未実現の物事が発光体、という概念化が起こる。

本章では、「明るい」と「暗い」の考察によって、<<喜びは光>>、<<知識は光>>、<<希望は光>>において、光源（発光体・反射体）、光り方（瞬間的・持続的）、届き方（前/後・中心/周辺）、の3点の「光」の捉え方を提示した。「明るい」と「暗い」には、光源として発光体が存在し、「光」で照らされる空間とそれを知覚する視界が身体経験として存在する。

この3点の「光」の捉え方が目標領域の感情・知識・時間において、メタファー的意味の実現に影響を与えていることを指摘した。

第4章 温度感覚に関するメタファー表現—「熱い」「あたたかい」「冷たい」—

4.1 はじめに

触覚で経験される「熱い」¹²「あたたかい」¹³「冷たい」は、温度の高低に関する身体経験である。＜＜興奮は熱＞＞、＜＜恋愛は火＞＞、＜＜優しさはあたたかさ＞＞において、これらの温度感覚に対する捉え方が言語表現に反映されている。そして、物理的には温度を感じさせない人間の性格・言動に対しても、我々はメタファー的に温度を通して理解している。例えば、以下のように同じ視線でも温度感覚を通して様々な捉え方がされている。

- (1) 海外の有名大学への進学熱が中高生の間で高まり始めている。米ハーバード大など有名大合格を目指す専門塾が高校生の熱い視線を集め、海外進学用コースを設置する学校も。(毎日新聞 2013/06/21)
- (2) 虐待を受けている子どもたちは、自分から「助けて」とはなかなか言えません。けれども周りの人が目を向ければ、ちょっとしたサインが見えることがあります。皆さんの温かい視線で、子どもたちのSOSをキャッチしましょう。
(<http://www.city.hofu.yamaguchi.jp/soshiki/19/gyakutaiboushi.html>)
- (3) バブルの熱にあてられてしまった大人たちに対して、若者が冷たい視線を送っていることに大人たちは早く気付いた方が良くはないだろうか。(東京新聞 2013/08/14)

(1)では関心が高まっていることが「熱い」と捉えられ、(2)では優しさを感じるものが「あたたかい」と捉えられ、(3)では軽蔑を感じるものが「冷たい」と捉えられている。このように、温度感覚に関する言語表現に対し、様々な解釈がされているのが分かる。この現象の動機づけにも、複数の概念メタファーが影響すると考えられる。本章では「熱い」「あたたかい」「冷たい」を考察対象とし、温度感覚の概念化のプロセスを明らかにすることを目的とする。

¹² 「熱い」には、「熱い」、「暑い」の2通りの表記があるが、本稿では温度感覚に関するメタファー表現に注目するため「熱い」を考察対象とする。

¹³ 「あたたかい」には、「暖かい」、「温かい」の2通りの表記がある。本稿では、温度感覚に関するメタファー表現に注目するため「暖かい」、「温かい」を共に区別せず、かな表記の「あたたかい」を含めて考察対象とする。引用に関連のある箇所以外は「あたたかい」と表記する。

4.2「熱い」「あたたかい」「冷たい」の意味の記述

まず、辞書における「熱い」「あたたかい」「冷たい」の意味記述を確認する。『大辞林』第三版(2006)では、以下のように記されている。

・あつい [熱い]

①㊦温度が高くて、触れにくい状態だ。

↔ 冷たい 「－・い湯」 「お茶は－・いのがいい」

④体温が高いように感じられる。 「熱が出て体が－・い」

②（比喩的に）

㊦熱情のために、燃えるように感じられる。わき立つようだ。 「－・い血潮」 「－・い思い」 「興奮して－・くなる」

④多くの人々の強い関心を集めている。 「－・い視線を注ぐ」 「今、中国が－・い」

㊦（「お熱い」の形で）熱愛している男女を、からかいの気持ちを込めていう語。 「お－・い仲」〔改まった気持ちで表現する場合、連体形には文語形を用いることが多い。

「熱き涙」「熱き血潮」〕

[派生] ーが・る （動ラ五〔四〕） ーげ （形動） ーさ （名）

『大辞林』第三版(2006:52)

・あたたかい [暖かい・温かい]

〔形容動詞「あたたか」の形容詞化したもの。近世以降の語〕

①気温や温度が程よい。あったかい。 「－・い日ざし」

②金銭が十分ある。あったかい。 「懐が－・い」

③愛情や思いやりがある。 ↔ 冷たい 「－・い手をさしのべる」

[派生] ーげ （形動） ーさ （名） ーみ （名）

(同上:49)

・つめたい [冷たい]

①物の温度が低くてひややかである。 ↔ 熱い 「－・い飲み物」 「風が－・い」

②愛情や思いやりがない。やさしさ・あたたかさがなく。冷淡だ。 ↔ あたたかい 「心の－・い人」 「－・い仕打ち」 「わざと－・く当たる」

③寒い。 「いと－・きころなれば／枕草子 184」 → 寒い（補説欄）

[派生] ーが・る (動ラ五[四]) ーげ (形動) ーさ (名)

[句] 冷たい戦争・冷たくなる

(同上: 1694)

ここでは、「熱い」の意味①㉔と「あたたかい」の意味①と「冷たい」の意味①が温度の高低を表すことが分かる。また、メタファー的な用法である「熱い」の意味②の㉔と㉕は感情の激しさ、㉖は関心の高さを表すのに対し、「あたたかい」の意味③と「冷たい」の意味②は優しさの有無を表していることが記述されている。

4.3 温度感覚に関する概念メタファー

次に、温度感覚に関する概念メタファーについて検討する。Grady(1997)には、①が、Kovecses(2010[2002])には、②が挙げられ、③が影響することが指摘されている。

- ① a. <<INTENSITY OF ACTIVITY IS HEAT>> (活動の強度は熱)
b. <<INTENSITY OF EMOTION IS HEAT>> (感情の強度は熱)
c. <<AFFECTION IS WARMTH>> (優しさはあたたかさ)
- ② a. <<ANGER IS FIRE>> (怒りは火)
b. <<LOVE IS FIRE>> (愛は火)
c. <<ENTHUSIASM IS FIRE>> (熱意は火)
d. <<CONFLICT IS FIRE>> (衝突は火)
- ③ <<THE INTENSITY (OF A SITUATION) IS THE INTENSITY OF HEAT>>
(状況の強度は熱の強度)

これらをみると、温度感覚に関する概念メタファーにおいて、起点領域には熱、あたたかさ、火が存在し、目標領域には(活動)の強度、(感情)の強度、優しさ、愛、熱意、衝突、(状況)の強度が存在することが分かる。しかしながら、現代日本語において熱、あたたかさ、火の相互関係が曖昧であり、どのようなプロセスで温度感覚の概念化が起こるかは明らかになっていない。

また、鍋島(2011)では、<<因果は火>>を挙げ、火や熱の発生と推移で語れる出来事はそれ自体に興奮などを含んでいて、熱を持っていると指摘している。図 4-1 のように、火およ

び熱を使用した出来事のメタファー写像が示されている。しかしながら、この写像関係に対して、日本語における個別の言語表現からの検証はなされていない。

図 4-1 <<因果は火>>のメタファー写像 鍋島(2011:204)

活気あるモノ・コト	←	火
開始	←	火がつく
促進	←	火に油を注ぐ
終焉	←	火が消える

本稿では、温度感覚を生起させる発生源、温度感覚を知覚すると捉えられる感覚主体、温度感覚について判断する観察者、を設定して、「熱い」「あたたかい」「冷たい」を分析していく。この分析を通して、温度感覚の概念化のプロセスを明らかにする。

4.4 「熱い」「あたたかい」「冷たい」の考察

本節では、起点領域である身体経験における温度感覚の性質を考察した後、目標領域である人間の性格・言動における「熱い」「あたたかい」「冷たい」のメタファー的意味を実際の用例を基に考察する。

4.4.1 身体経験における温度感覚

我々は、温度感覚の高低に対して様々な捉え方をしている。その捉え方には、発生源と感覚主体と観察者との相互関係が存在する。まず、(4)～(6)は、人間が持つ熱に関する「熱い」の用例である。

- (4) 先週から夫がカゼをひいていたのですが、私にもそのカゼは微妙にうつっていて、喉が痛い日があったりなかったりしていました（以前に耳鼻科からもらった薬を飲むとすぐに症状がなくなってしまう・・・数日ほったらかすとまた痛くなるというあまりよろしくないパターンです）。そうしたら、今度は娘にもうつたらしく、金曜日の朝身体が熱かったので熱を測ったら37.5℃あったので幼稚園を休ませました。(BCCWJ: Yahoo!ブログ)
- (5) 同じ距離を走っているのに自分はバテバテで女の子がピンピンというのは、かなり情けない。しかし立ち上がってみせるだけの体力も残ってなく、健太は目を閉じた。どく

んどくんと動いている心臓の音や、乱れた呼吸がなおさら聞こえてくる。限界まで頑張ったのだ、無様でも仕方ない。身体が熱いのが自分でもわかった。(BCCWJ: あすか正太『恋する国家権力』)

- (6) 会場内は冷房が効いてるとはいえ、真夏なので、ライブの前の方で人が密集していると熱いので、ジーパンとか通気性が悪いものはあまりお勧めしません。

(<http://www.tkoyama.com/archives/572/>)

(4)では、カゼをひいて温度感覚を生起する熱の発生源となっている娘に感覚主体である母親が触れることで「熱い」と捉えている。我々は、体調が悪くなると身体が熱くなることを経験している。この際に、顔が青ざめたり、赤くなったり、汗が出たり、など外からも観察可能である。この母親のように我々は熱の発生源に対して、様子をうかがったり、熱を測ったりし、観察することができる。感覚主体である母親も体調の悪い娘の熱の温度を知覚することによって「熱い」と捉え、観察者としてそれについて述べている。(5)は、人間自体が走るという活動を行うことで体温が上がり、感覚主体にとって自身の身体が「熱い」と捉えられていることを述べている。我々は、何かの激しい運動などの行動をすると、興奮状態になることを経験している。この用例では、観察者の視点ではなく感覚主体自体が、熱を発して熱の発生源にもなっている。

また、(6)をみると熱の発生源である人が密集すると「熱い」と捉えられることが観察者によって述べられている。熱い人が密集すると、場が熱くなるという性質が指摘できる。

次に、人間以外が持つ熱に関する「熱い」の用例が(7)、(8)である。我々は、人間以外からの熱に対しても、観察者の視点から「熱い」と捉えることができる。

- (7) スマホは、動作しているアプリや機能が増えるほど、それだけたくさんのプログラム処理が必要となるので、発熱しやすくなります。動画やゲームなど、重い処理が必要なものは、すぐに熱くなってしまうでしょう。(http://artroot.jp/article/201506051)

- (8) 今日走行中に車の異音がしたため、確認したところ、右後輪ホイールが触れない位熱を持っています。

他のホイールは熱くありません。

異音は熱くなったホイール辺りから聞こえます。

(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1383728213)

(7)では機械であるスマホが稼働するプログラムが増えると発熱し、熱くなることが観察者から述べられている。物である機械が激しく動くことで熱を発する発生源となり、直接触れて感覚主体にならなくても、観察者の視点において「熱い」と判断できる。また、(8)において機械である車に異音がしたので確認すると、熱を発して「熱い」と捉えられることが述べられている。ここでは、車のホイールが発生源であり、観察者として確認した後、ホイールに触れることで感覚主体となり、「熱い」と捉えている。我々は、直接触れなくても、その対象を観察することで異質な動きや湯気や音などで熱を持っていると判断できることを経験している。

我々は火に対しても「熱い」と捉えている。(9)～(11)は、熱の発生源を火とする用例である。

(9) 唐沢さんがトーチで火を付けると巨大な炎が燃え上がり、登壇者からは驚きの声が。...
唐沢さんは「熱い！炎—！！！！」と笑顔を見せ、寺島さんも「熱いよ！汗出てきたよ！！」と大騒ぎ。(<http://movie-news.jp/inthehero/2014/08/post-4.html>)

(10) 火はパチパチと音を立てながら、ものすごい勢いで燃え広がっていく。このままでは本堂までやられる。庫裏とつながる通路を取り壊すしかない。でも、たった2人ではどうしようもなくて...

火の粉は、寺のすぐ隣の観音堂のわらぶき屋根にも飛んでいた。寺が燃やされて、観音様まで燃やされるわけにはいかんでしょ。急いで家からはしごとを持って来て、おじさんと2人で観音堂の屋根に上った。降りかかる火の粉を、竹ぼうきで払い落とした。...
もう必死だね。熱いとか、言っている場合じゃなかった。

(<http://www1.saga-s.co.jp/news/tokushuu1/toku1news.0.2744117.article.html>)

(11) 護摩壇があらかた燃えたらそれを打ち崩していよいよ「火渡り」の準備をします。寒
際に私も裸足で渡って見たのですが意外と熱くない。いや、全く熱くない。実は本堂か
ら撮影していて気付いたのですが、まだ炎が燃え盛っている薪は両脇に避けて積み、中
央には炭が集められて専用の道具でバンバンと叩いて鎮火させていました。これが火
渡りの仕掛けです。(<http://tokotokoto.com/?p=6925>)

(9)では、観察者の視点から火がつき、大きく燃え広がる様子が述べられている。火自体が発生源となり、火は灼熱を発する。そして、唐沢さん、寺嶋さんという感覚主体にとって

「熱い」と捉えられている。また、(10)「ものすごい勢いで燃え広がっていく」とあるように火は周りに燃え広まっていき、その影響を拡大させていく。感覚主体にとっては、火に近づくと「熱い」と捉えられる。だが、(11)のように熱の発生源の火が鎮火すると、観察者は「熱くない」と判断できる。

以上のように、観察者にとって火は視覚で捉え、その様子を述べることができるものである。熱の発生源としての火には、火がつく、燃え上がる、鎮火するという構造を観察することができる。

次に、(12)～(14)は、身体経験における「あたたかい」「冷たい」の用例である。こちらは、温度の高低を知覚するという点では「熱い」と共通するものの、温度感覚の発生源の性質が異なる。

- (12) 少し時間がたって気になり外へ出ると息子がポツンと座っていました。とても寂しそうな子どもの後姿を見たときとても反省しました。そして子どもにそっと手を差し伸べ、「ごめんね。〇〇（息子の名前）のこと嫌いじゃないから。」と自然に子どもを抱きしめることができたんです。外は寒い冬の季節だったので抱きしめたときとても子どもの体が冷たかった・・・。けれど抱きしめることで子どもの身体が温かく感じました。子どもも抱きしめられることで愛されてると安心から涙が出たようです。

(http://www.wp-canon.com/enjoy/grow/post_50.html)

- (13) 蒸らして出来上がった紅茶を氷の入ったポットの方に一気に注ぎましょう。ここも最後まで絞り出さずに少し残すくらいで OK です。

氷で冷たくなったアイスティーをグラスに注いで完成です。

(<http://yvryvr.com/1478.html>)

- (14) 肌寒い日の朝は、温かいスープやコーヒーで体を温めてから心地よいスタートを切りたいもの。でも身支度などで忙しくしていると、せっかく用意したコーヒーが気づけば冷たくなってしまいうんてことも。(http://youpouch.com/2011/10/27/120029-6/)

(12)では、寒い夜に「冷たかった」子どもの身体を親が抱きしめることで保護され、「温かく」感じる様子が、感覚主体である母親の視点から描かれている。子どもは、抱きしめられることによって人肌のあたたかさを感じる。人間にとって生まれて初めて感じる物理的なあたたかさが親の肌のあたたかさである。そもそも、人は、愛情がなければ、人肌の熱を

感じるほどの接触をすることもない。経験基盤として、人間は抱きしめられることによって保護され、人肌にあたかたさを感じる事が確認できる。

つまり、人肌は直接身体と接することにより、「あたたかい」と触覚で知覚される。よって、人肌からの熱が、感覚主体に触れることによって熱の発生源として捉えられる。言い換えれば、我々は、感覚主体が平熱の発生源と接触することで熱を捉える状態を「あたたかい」と捉えている。

一方、(13)では、高い温度の発生源である「紅茶」が低い温度の発生源である氷によって冷やされ、「アイスティー」として「冷たい」と捉えられている。また、(14)にあるように常温の熱の発生源である「温かいスープやコーヒー」が時間の経過によって持っている熱の温度が下がる状態を「冷たい」と話者が述べている。温度感覚の発生源は時間の経過や外的要因によって温度が変化することを我々は経験していることが指摘できる¹⁴。

4.4.2 メタファー的意味における「熱い」「あたたかい」「冷たい」

身体経験における温度感覚は、人間の性格・言動として概念化される。ここでは、その概念化のプロセスにおける熱の捉え方を検討する。(15)～(17)は、人間の性格における「熱い」「あたたかい」「冷たい」の用例である。

(15) 体育会系の男とは、学生時代に何らかのスポーツに打ち込み、上下関係や規律の厳しい男だけの集団で青春時代を過ごしてきた、特有の性格をもっているものです。目的を達するために努力することを惜しまず、熱中しやすく、仲間意識が固い。男の美学やロマンが大好きな、熱い人が多いことでしょう。

(<http://allabout.co.jp/gm/gc/223652/>)

(16) 僕が入社後に一番驚いたこと。

それは、本当に温かい人が多いということです。

入社後は最初は全く売れない新人でしたが、その時も当時の店長は、どうすればいいかを一緒に考えてくれました。

一度ではなく、何度も何度も、僕ができるようになるまで、付き合ってくれました。

¹⁴ 山田(1976)においても、アツイ状態でなくなるのがサメルであり、ヒエルというのはもとの温度に関係なくツメタイ状態になることが指摘されている。

僕を励ますために、何度も飲みにつれて行ってもくれましたね。

入社するまでは、これほど周囲が関わってくれるとは思っていませんでした。

(<https://job.rikunabi.com/2016/company/blog/detail/r927700017/13/>)

- (17) 無認可だから、認可だから、金髪だから、黒髪だから、何も関係ありません。無認可で金髪でも、子供に愛情深い保育士もいれば、認可で、すごい太卒のエリート保育士でも、子供に冷たい人もいます。実際には、どれだけ気配りができるか、ということですが、そればかりは外見だけでは計ることはできません。(BCCWJ: Yahoo!知恵袋)

(15)「熱い人」、(16)「温かい人」、(17)「冷たい人」、では、大きくメタファー的意味が異なる。このメタファー的意味の違いは温度感覚の発生源の違いに起因する。(15)「熱い人」は「男の美学やロマン」を語るような人が温度感覚の発生源であり、そこから発せられる興奮が熱である。発生源から発せられる興奮を含んだ言動が周りの感覚主体にも「熱い」と捉えられることが観察者から述べられている。これは、興奮すると人間の体温が上がり、身体が熱くなることを基盤とする言語表現である。興奮は意図的にコントロールできるものではなく、熱としての興奮はそれを伝える対象を必要としない。よって、一人でも熱くなることができる。ここでは、興奮をする人が発生源であり、興奮の感情の高揚が熱を通して捉えられている。

だが、(16)「温かい人」は熱を伝える対象を想定できることが、発生源として捉えられることの前提にある。ここでは、感覚主体である新入社員が仕事で店長に助けられている様子を発生源の店長にあたたかさを感じ、話者として語っている。店長からの優しさを熱として捉え、それを知覚することで「温かい人」と述べている。一方、(17)においても、「子供に愛情深い保育士」が示すように熱の発生源である保育士から子供に対する優しさの熱が想定されている。観察者は、「子供に愛情深い保育士」と比較し、優しさの欠如した保育士を熱の温度の低い「冷たい人」と述べている。さらに、温度感覚の発生源の違いは、(18)～(20)の言動にも現れる。

- (18) 「今はまだ小さい会社だけど、いつかは静岡発のグローバル企業になりたい」。熱い言葉を口にしながら全国各地を飛び回る起業家の姿を見るたびに、自分ももっと取材をしなければ、という思いを駆り立てられた。(日本経済新聞 2013/02/28)

- (19) 例えば、携帯にちょっとした温かい言葉をメールしてあげたりということはお仕事にもできないでしょうか？「体のほうは大丈夫か？」とか。離婚を考える前に、まず、やれるだけの努力をやってみたらいいんじゃないかと思うんです。奥様への配慮を示す方法は何も家事をやってあげることだけではないと思います。(BCCWJ: Yahoo! 知恵袋)
- (20) 水仕事のせいで、冬場は手足のあかぎれに悩まされる。薬で手入れする私に、家事を一切手伝わぬ夫が「ビタミンが足らんからや」と冷たい言葉。「あんたの愛情が足らんのか」と言ってやった。(東京新聞 2013/01/16)

(18)「熱い言葉」では、起業家が熱の発生源となり、その言葉に興奮が熱として現れている。この場合、発生源が、言葉に興奮の熱がこもっている。取材者は、その熱を知覚する感覚主体となり「熱い」と捉えている。

ところが、(19)「温かい言葉」において、優しさの熱を発する発生源である夫と感覚主体としての妻が存在する。この関係が観察者の視点から述べられている。さらに、(20)「冷たい言葉」においても妻の視点から家事を手伝わぬ夫を発生源とし、感覚主体である妻への優しさの熱の欠如が述べられている。

このような優しさの熱に関する「あたたかい」と「冷たい」は、熱を伝える対象がないと言いつらい。これは、人肌が熱の発生源であり、人肌同士の接触が基盤となっているため、接触する対象の存在が前提となるからである。また、(21)～(24)の「視線」においても、温度の発生源がメタファー的意味の違いの要因となっている。

- (21) 海外の有名大学への進学熱が中高生の間で高まり始めている。米ハーバード大など有名大合格を目指す専門塾が高校生の熱い視線を集め、海外進学用コースを設置する学校も。((1)再掲)
- (22) 虐待を受けている子どもたちは、自分から「助けて」とはなかなか言えません。けれども周りの人が目を向ければ、ちょっとしたサインが見えることがあります。皆さんの温かい視線で、子どもたちの SOS をキャッチしましょう。((2)再掲)
- (23) 高校生の頃、母から言われました。「赤ちゃんって、寝顔がかわいいものなんだけど、あなたは違ったのよね。この子の寝顔、かわいくないわねえってよく思ったわ〜」。スヤスヤ眠っている私の顔を覗き込みながら、そんなことを考えていたのかとショック

でした。

私は物心つく前から、母の冷たい視線の中で生きていたのではないかと思えてなりません。私は大人になった今でも、いつもどこか孤独で、何をしてても不安で、自分の存在に自信が持てない。(http://dokuoya.inuwara.com/contents.cgi?no=37&num=162)

- (24) バブルの熱にあてられてしまった大人たちに対して、若者が冷たい視線を送っていることに大人たちは早く気付いた方が良くはないだろうか。(3)再掲)

「視線」は、発生源から送られるものである。(21)では、興奮が熱であり、熱の発生源から興奮して送られる視線が「熱い視線」である。海外の有名大学への進学を目指す専門塾に対し、中高生が熱の発生源となって興奮の熱がこもった視線を送っていることが観察者から述べられている。熱の発生源である人が関心を向ける対象に対して、感情が高まると興奮して熱くなることを基盤としている。

それに対し、(22)「温かい視線」においては、熱の発生源は周りの人々であり、熱は優しさとして捉えられる。ここでの優しさの熱が向けられる対象は「虐待を受けている子どもたち」である。「虐待を受けている子どもたち」に対して優しさを持って接するものと捉え、話者は「温かい視線」と述べている。さらに、(23)の「冷たい視線」では温度の発生源である母親の優しさの熱が感じられず、感覚主体である話者としての現在の私にとって「冷たい」と捉えられている。一方、(24)「冷たい視線」は、若者からバブルの熱にあてられてしまった大人への軽蔑した言動を表している。これは、(23)とは異なり、話者にとって温度の発生源である若者が大人に対して優しさ以前に全く関心が持てない軽蔑した状態を「冷たい視線」と捉えている。

以上のように、温度感覚の発生源には、人間自体が発する熱と人肌が发する熱が存在する。そして、人間の生理的な反応による熱は興奮として、人間同士の接触による人肌の熱は優しさとして概念化される。そこには、<<興奮は熱>>と<<優しさはあたたかさ>>という概念メタファーが関与している。言い換えれば、この基盤の違いが同じ「視線」でも解釈の違いをもたらす。

4.4.3 温度感覚の捉え方と概念メタファー

本節では、A.<<興奮は熱>>、B.<<恋愛は火>>、C.<<優しさはあたたかさ>>における、「熱い」「あたたかい」「冷たい」を考察する。<<興奮は熱>>では、人間の生理的な反応に

よる興奮の熱が発生源となり、<<恋愛は火>>では、火の灼熱が発生源となり、<<優しさはあたたかさ>>では、人間同士の接触による人肌の熱が発生源となることを検討する。なお、火の灼熱は人間の興奮の熱とは互換関係にある。

A.<<興奮は熱>>

まず、(25)～(29)の「熱い」において、興奮の高まりが熱を通して捉えられている。

- (25) ランドセル商戦がこの数年、過熱している。こだわりの限定ものに人気が集まり、購入時期は8月から秋とどんどん早く――。なぜ、親たちは熱くなるのか。（毎日新聞 2014/11/06）
- (26) 「今、上野が熱い」といううわさを耳にした。この暑いさなか、熱さを求める気にはまずなれない。だが、一杯飲み屋や格安靴店が並ぶ「オジサンの街」のイメージは過去の話、家族連れや若い女性にも人気らしい。（毎日新聞 2014/08/20）
- (27) {??喫煙/??振り込め詐欺}が熱い。
- (28) 禁煙治療が熱い。
- (29) ある犯罪グループのメンバー内では、今は振り込め詐欺が熱いらしい。取り込み詐欺はもう見向きもされないようだ。

(25)において、親たちがランドセルに関心を持ち、興奮と共に意欲が起こり、ランドセルについて調べる、実際に店に足を運ぶ、などの行動が想定される。発生源がある物事に関心を持ち、プラスの興奮と共に意欲が起こり、行動が促される。つまり、関心を持つことで、プラスの興奮が熱として捉えられ、概念化されている。親たちが発生源となり、ランドセルに対して意欲の熱が高まることを「熱くなる」と観察者から述べられている。そして、その熱が集まるものが「過熱」していると捉えられている。(26)においても、家族連れや若い女性などの発生源が発する興奮の熱が、上野という場所に集まると観察者から「熱い」と捉えられる。言い換えれば、「上野」に対して、店を開いたり、買い物をしたり、住みたい、など関心を持ち、興奮と共に意欲が起こり、行動が促されることが「上野が熱い」である。これは、空間において人の熱が密集するとより熱くなるということが基盤になっているメタファー表現である。

しかしながら、たとえ関心が高まっていたとしても、(27)では容認度が下がる。「喫煙/振

り込め詐欺」は不利益になることが想定され、発生源の人にはそれを求める行動は伴わない。熱である興奮が伴わないからである。ゆえに、容認度を上げるためには、(28)「禁煙治療」で示すように喫煙を止めることで人間にとって好ましいことが起こる行動が想起され、興奮が高まらないとならない。但し、(29)「振り込め詐欺」のような社会通念上好ましくないことでも、他の犯罪である「取り込み詐欺」と比べ、その行動をすることで利益となる興奮の熱を伴う発生源の集団である「犯罪グループ」を設定すれば「熱い」と捉えられる。

以上から、「熱い」は、発生源の興奮の熱が高まってもその物事が求められ、行動を促すものと捉えられない場合、容認度が下がるという制約が指摘できる。我々は、ある物事に対して、関心を示し、興奮が伴う場合、その興奮はプラスとしても、マイナスとしても、捉えられる。その興奮がマイナスの場合、憤りを伴い、「熱い怒り」や「怒りが燃える」などの怒りとして概念化される。対照的にプラスの場合、行動を促進し、興奮の熱として概念化される。

B.<<恋愛は火>>

一方、火の灼熱を基盤とする「熱い」を考えると、人間の興奮の熱を基盤とする「熱い」と異なるメタファー的意味の解釈の違いについてみることができる。(30)～(33)では、火を通して恋愛について語られ、愛は火として捉えられている。

(30) 日頃は消極的だったり大人しげでも、突如駆け落ちしたりして周囲を驚かせたりします。一度火が点くと誰も止められません。

しかしそんなことは一生に何度もあっては困ります。あなたにとって運命の人と出会うまで、恋に冷めている状態は悪いことではないのです。

思い込みの恋愛でヤケドしそう。

どこか冷めて恋愛を見詰めるのも大切です

恋に対して悲観的な想像をして、冷めるのは止めましょう。傷ついたらどうしよう、嫌われるのが怖い、なんてことで熱くなる心にブレーキをかけてしまうのは良くありません。

(<http://www.szeus.com/topics/topics11/virgo.html>)

(31) 妻に見放された主人公は新しい恋を探そうと奮闘する。ただ、その先の恋愛模様や愛欲の果ての心中・殺人など、渡辺文学ではおなじみのドラマチックな展開には至らな

い。大人のファンタジーを求める読者には物足りなさも残りそうだが、「予想以上に売れているのは、奇をてらわないリアリティーが受け入れられているから」(江口氏)でもある。喜寿を迎えた作家の描く60歳のリアリティーは、熱く燃え上がる恋とは別のところにあるらしい。(日本経済新聞 2010/11/10)

- (32) 恋人との愛が冷めてしまった場合、東京タワーの入口にある「カラフト犬記念像」の前で記念写真を撮影すると、熱い愛が復活する。

(<http://fuujia.com/jinnkusu/place/tokyo-tower.html>)

- (33) 暫くして、帰国したと彼から連絡が入りましたが、熱い恋は熱い国でしか燃え上がらず、炎は静かに消えていきました。(<http://teandte.com/?p=75>)

(30)は、話者が感覚主体にアドバイスをしている文脈で、話者の視点から恋愛感情である愛の始まりを「火が付く」と述べている。感覚主体が発生源となる場合、恋愛感情が弱まると熱が冷め、強まると熱が熱くなる、と捉えられている。さらに、恋愛感情がより強まると(31)のように発生源としての人の恋愛感情が「燃え上がる」ことが分かる。これらの火の灼熱は、感覚主体が持つ興奮の熱が具現化していると言える。興奮の熱から火の灼熱へと派生していることが考えられる。

そして、愛は、火と同様に構造を持ち、変化することがメタファー的意味の基盤になっている。(32)においては、発生源であり、感覚主体でもある恋人同士の恋愛感情が弱まっても、記念写真を撮影することで再び恋愛感情が強まるのが「熱い愛」が復活すると話者から述べられている。ついに、(33)では、発生源でもあり、感覚主体でもある話者が帰国後に熱い恋が燃え上がらず、終焉したことを「炎は静かに消えていった」と述べている。

これらから「熱い」において、<<愛は火>>は<<興奮は熱>>からの継承を受けている。これは、人肌を基盤とする「あたたかい」にはない性質である。

C.<<優しさはあたたかさ>>

さらに、(34)～(36)の「あたたかい」の用例を考える。人肌の熱のあたたかさがメタファー的意味の実現の制約となることが分かる。

- (34) 財務相は環太平洋経済連携協定(TPP)については「深く考えれば、資源のない国でこれから生きていくにはどうしたらいいかという結論は必ず見いだせる」と指摘。

T P P 交渉の参加に前向きな姿勢を示した。ただ「痛みを伴うところには温かい手を差し伸べなければならない」とも語り、農家への補償の必要性についても言及した。

(日経新聞 2011/10/12)

- (35) 池田市綾羽の五月山動物園に、ふさふさの白いたてがみが特徴のポニーが仲間入りし、人気を集めている。

昨年12月下旬に兵庫県川西市の民家から引き取られてきた雄のロッキー(9歳)。最近、円形広場(直径8メートル)で運動する機会が増え、来園者がその姿に温かい目を向けている。(読売新聞 2014/01/26)

- (36) 「気を付けて帰るんだよ」「はい、ちょっと止まってね」。同町新居屋の西小学校前。停止棒を持った広田さんが、横断歩道を渡る児童とあいさつを交わし、温かい目で見守る。

第一線の警察官として四十二年間勤務してきた広田さんは現在、町の嘱託職員として、地域の安全を守る先頭に立ち活躍している。(中日新聞 2007/06/09)

(34)「温かい手を差し伸べる」、(35)「温かい目を向ける」、(36)「温かい目で見守る」は、温度感覚の発生源と優しさの熱を発する対象が具体的に特定できる用例である。優しさを与える側にとって優しさを受け取る側は、優しさを持って保護できる対象でなければならない。これも、身体経験として人肌のあたたかさを抱きしめることで感じるものが基盤となっている。抱きしめる側が包み込むことによって抱きしめられる側は安心感や守られていることを実感するからである。

(34)「農家」、(35)「ポニー」、(36)「児童」は、社会的にも生物的にも保護が必要な弱い対象であり、優しさを受け取る側であると言える。よって、(34)「農家」から「政府」へ、(35)「ポニー」から「来園者」へ、(36)「児童」から「元警察官」へ、というように立場を逆にした場合に、「温かい手」や「温かい目」では容認度が下がる。

また、現代日本語では、LOVE と AFFECTION は共に愛と訳されることがある。しかし、(37)、(38)の用例を考えれば、メタファー的意味において愛と愛情について温度感覚を通じた解釈が異なることが確認できる。

- (37) {熱い/あたたかい/冷たい}カップルの愛。

- (38) {熱い/あたたかい/冷たい}老夫婦の愛。

(37)「カップルの愛」の場合、発生源である両者の感情である愛が始まり、大きく進展することも、破局のような終焉もあり得る。火が付き、燃え広がり、鎮火するなど変化の激しさが想定され、構造的に火と類似しているため「熱い」と捉えられる。もし、「カップルの愛」が「あたたかい」と捉えられる場合は、お互いの関係が変化なく一定に保たれるほど穏やかな持続性を持ったものとして解釈される。

だが、(38)は、「老夫婦」という発生源に人肌による熱が想定される。老夫婦は、カップルとは違い、既に結婚しており、恋愛感情の激しい変化は想定されにくい。そこには、興奮というよりも優しさを持った人肌の安心感が存在し、「あたたかい」と捉えられる。むしろ、「熱い老夫婦」もないわけではないが、この場合は「カップルの愛」のような恋愛感情にも似た感情の変化の激しさとして解釈される。

以上のように、愛も、様々な側面を持ち、想定される対象との関係や感情の変化によって、「熱い」「あたたかい」のメタファー的意味の解釈が異なることが指摘できる。「熱い」は男女の恋愛が想定され、「あたたかい」は人情や尊敬などの人間愛が想定される。どちらの「愛」も、感情が弱まることで冷めたり、冷えたりするものとして捉えられる。愛が弱まると、「冷たい」と捉えられる点では共通している。しかしながら、違いもあり、男女の恋愛は常温よりも高く「冷める」ことはあるが、人間愛は一定であるため「冷める」ことは起こりにくい。こういった現象も、メタファー的意味の基盤として火の灼熱と人肌の熱が存在することが要因になっている。

4.4.4 「熱い」「あたたかい」「冷たい」が明示されないメタファー表現

今までみてきたように、現代日本語の「熱い」「あたたかい」「冷たい」において、<<興奮は熱>>、<<愛は火>>、<<優しさはあたたかさ>、が影響を与えている。これらの概念メタファーの存在が、(39)～(43)のような「熱い」「あたたかい」「冷たい」が直接明記されない言語表現の解釈も可能とする。

(39) 今年に加えて、急激な円高、アメリカのインフレ懸念、原油高、信用残など、株価にとって悪材料ニュースが多く、投資家心理はかなり冷えてしまったと言えるでしょう。(http://allabout.co.jp/gm/gc/14500/)

(40) 巨額過ぎる資金も懸念材料だ。G P I Fが株を買い増せば、株価は一時的に上昇する可能性はあるが、逆に売りに転じれば市場は一気に冷え込む。(東京新聞)

2014/05/11)

- (41) I T (情報技術) によって業務効率が高まった一方で、職場の人間関係が希薄になりつつある。顔を合わせてもあいさつはなく、指示はメール。職場での会話が減り、孤独感を募らせる社員も増えているという。人間関係が冷え込む職場はトラブルも招きがちだ。(日本経済新聞 2011/10/25)
- (42) 秋葉原に通うオタクと地方のオタクでは温度差がありますか？本当のオタクは秋葉や日本橋なんかには行かない。それは手段の一つと位置付けているのだ。
(BCCWJ・Yahoo!知恵袋)
- (43) カップルの気持ちに温度差があるときは、温度が低いほうのペースでつきあうという方法があります。
熱を上げているほうは、「毎日でも会いたい。せめて週に1度は必ず会って、デートしたい」と考えるでしょう。
しかし相手にそれほどの気持ちがない場合、熱を上げているほうが望むペースで会うのは、少々ムリがあります。(http://woman.mynavi.jp/article/131120-008/)

(39)では、「株価にとって悪材料ニュース」によって発生源である投資家の意欲の熱が下がってしまっている「投資家心理はかなり冷えてしまった」と観察者から述べられている。投資家は、悪材料があると投資をする興奮が弱まり、行動が促されない。言い換えれば、相場において人々の興奮が弱まることが「冷える」である。(40)においても、市場に対して発生源である周りの人々がまったく興奮することなく行動が伴わない、好ましくない状況を「市場は一気に冷え込む」と観察者が述べている。相場や市場は、人々の興奮を伴う行動によって、売買や運営がなされ、止まることなく動いている。だが、その状況が悪化すると「冷え込む」と捉えられるのである。一方、(41)は、人間関係における優しさの熱の温度が下がり、悪化することが「人間関係が冷え込む職場」と話者から述べられている。この基盤は人肌の熱であり、発生源である職場の人々が互いに感覚主体として優しさの熱を感じることができない状態である。同じ「冷え込む」という言語表現でも文脈から喚起される概念メタファーによって解釈が異なることが指摘できる。

さらに、(42)、(43)の「温度差」について考える。(42)ではオタクの趣味に対する意欲について観察者が述べている。発生源である秋葉原に通うオタクと地方のオタクのそれぞれの趣味に対する興奮の熱の違いが「温度差」として捉えられている。それに対し、(43)はカ

ップルを発生源として恋愛感情の火の熱の違いが「温度差」として捉えられている。感情が強い方が「熱を上げている方」、感情が弱い方が「温度が低い方」と話者が述べている。このように、「熱い」「あたたかい」「冷たい」が直接明示されない温度感覚に関する言語表現も概念メタファーの働きにより解釈されることが指摘できる。

4.5 本章のまとめ

本章では、身体経験において触覚で知覚される「熱い」「あたたかい」「冷たい」における温度感覚の概念化のプロセスを明らかにした。温度感覚の概念化には、温度感覚を生起させる発生源、温度感覚を知覚すると捉えられる感覚主体、温度感覚について判断する観察者が関係する。

これらの温度感覚の捉え方がメタファー的意味の実現の制約にもなることを指摘した。まず、発生源の興奮が高まってもその物事が行動を促すものと捉えられない場合、「熱い」の容認度が下がるという制約を明らかにした。それは、人間にとって好ましいことが起こる行動が想起されないと、興奮が高まらないからである。つまり、我々は、ある物事に対して、関心を示し、興奮が伴う場合、その興奮はプラスとしても、マイナスとしても、捉えられる。これらは、<<興奮は熱>>の影響を受けた言語表現であると言える。その興奮がマイナスの場合、憤りを伴い、「熱い怒り」や「怒りが燃える」などの怒りとして概念化される。対照的にプラスの場合、物事に求められる行動を促進し、「熱い」と捉えられる。

次に、「あたたかい」において、優しさを与える側にとって優しさを受け取る側は、優しさを持って保護できる対象でなければならないという制約を提示した。これは、<<優しさはあたたかさ>>によって身体経験として人肌のあたたかさを抱きしめることで感じるものが基盤となっている。抱きしめる側が包み込むことによって抱きしめられる側は安心感や守られていることを実感するからである。

さらに、「熱い」「あたたかい」のメタファー的意味における温度感覚の発生源には、火の灼熱と人肌の熱が存在することを指摘した。火は火が付き、燃え広がり、鎮火する、という構造を持つが、人肌の熱は高低で捉えられる。

火の灼熱を温度感覚の発生源とする「熱い」と人肌の熱を温度感覚の発生源とする「あたたかい」は、冷めたり、冷えたりする場合、どちらも「冷たい」と捉えられる。「冷たい」状態は、関心や感情が弱まっている状態である。ここにも、<<愛は火>>と<<優しさはあたたかさ>>によって違いは生じ、男女の恋愛は常温よりも高く「冷める」ことはあるが、人間

愛は一定であるため「冷める」ことは起こりにくい。こういった現象も、メタファー的意味の基盤として火の灼熱と人肌の熱が存在することが要因になっている。

この考察を通して、現代日本語の「熱い」「あたたかい」「冷たい」において、<<興奮は熱>>、<<愛は火>>、<<優しさはあたたかさ>>、が影響を与えていることを指摘した。これらの概念メタファーが存在するからこそ、メタファー表現としての「冷える」「冷え込む」「温度差」などが解釈できることを示した。

第5章「晴れる」と「曇る」に関するメタファー表現

5.1 はじめに

本来、「晴れる」と「曇る」は気象現象を表す言語表現である。「雲」「霧」も、発生する場所が異なるが、類似した気象現象を表す言語表現である。これらの気象現象は、「心が晴れる/心が曇る」「疑いが晴れる/判断が曇る」「政界を暗雲が覆う/政界を霧が覆う」「相場に暗雲がかかる/相場に霧がかかる」など、メタファー的に感情・思考・状況を表すことができる。しかしながら、以下のような用例では、メタファー的意味の実現に差が生じる。

- (1) 恨みが晴れる。・*怒りが晴れる。/迷いが晴れる。・*不審が晴れる。
- (2) 憂さが晴れる。・*憂さが曇る。/*判断が晴れる。・判断が曇る。
- (3) 雲行きが怪しい。

(1)では、同じ気象現象を起点領域とした複数の言語表現が感情・思考という目標領域で容認度に差が生じ、(2)では「晴れる」「曇る」の2つの言語表現の対応関係が成立しないことが確認できる。また、(3)は、「霧」ではなく「雲」のみにしか存在しない言語表現である。

以上のように同じ気象現象が起点領域になっても、目標領域において写像の偏りや性質の違いが生じていることが指摘できる。本章では、この現象の要因について、起点領域である気象現象における「光」と遮蔽物と移動物という現象の構成要素がメタファー的意味の実現に影響を与えていることを主張する。

5.2 気象現象と感情・思考の理解

5.2.1 「晴れる」と「曇る」の意味の記述

まず、「晴れる」「曇る」の辞書等での記述を取り上げる。『大辞林』第三版(2006)では以下のように記されている。

「晴れる」

- ①雲や霧が消える。「空が真っ青に一・れる」「この霧はお昼頃には一・れるだろう」
- ②雨・雪が降りやむ。あがる。「四時頃から雨は一・れた。/田舎教師 花袋」
- ③いやな気分がなくなってすっきりする。はればれする。「気分が一・れない」

④犯罪の容疑や疑いなどがなくなる。「疑いが一・れた」

⑤展望が開ける。「谷しげけれど、西一・れたり/方丈記」

『大辞林』第三版(2006:2083)

「曇る」

①雲が出て、空を覆う。「急に一・ってきた」

②鏡・ガラスなど光をよく通したり反射したりしなくなる。「湯気で鏡が一・る」「眼鏡が一・る」

③不安・心配・悲しみなどで心がふさぐ。また、そういう気持ちが表情や声などに現れて、明るさを失う。「姉の顔が悲しげに一・る」「涙で声が一・る」「ココロが一・ル」

④光や色が鮮明でなくなる。物が輝きやつやを失う。「御かたちなどいと花やかに、ここぞ一・れると見ゆるところなく/源初音」

⑤涙などで、かすんで見える。「涙に一・る玉のはこかな/源夕霧」

⑥[「面曇る」の略]で、能で、顔をややうつむけにして、愁い・悲しみ・嘆きなどの感情を表現する型をいう。

(同上:735)

また、森田(1984)では、「晴れる」を<自然現象の場合>(1)「その場面に懸かり塞いでいた霧などが消え散ずる。」、(2)「雨、雪などが降っておらず、雲が切れて光の差す明るい状態となる。」、<精神現象の場合>(1)「心に掛っていた曇りや気掛かりな点が取れて、さっぱりと明るい気分になる。」、(2)「他者に対して引け目や遠慮などを感ずる状態が解消する。」と記述している。

以上のように「晴れる」と「曇る」が気象現象と精神現象を表すことは、先行研究にも記述されている。だが、これらの記述ではなぜ気象現象と精神現象が結び付き、「晴れる」と「曇る」が感情や思考の状態を表せるのかについて、その動機づけは、明らかになっていない。

5.2.2 「雲」と「霧」の意味の記述

気象現象としての「雲」・「霧」の定義について、気象庁(2007[1998]:50)によると、「雲は、微細な氷の粒や水滴が集まり、空中に浮遊しているもので、地表面に接する場合には雲

と言わず霧という。」¹⁵とある。ここから、「雲」と「霧」の現象としての違いは、知覚者の視点と現象が発生する場所との距離にあると考えられる。

次に、辞書における意味記述を確認する。『大辞林』第三版(2006)では、以下のように記されている。

「雲」

- ① 空気中の水分が凝結して水滴・氷晶となり、これらが群れ集まって空中を浮遊しているもの。主として、気流の上昇に伴う断熱冷却により発生する。 → 雲級
- ② ① の位置や形状などからの比喩的用法。
- ⑦ 身分・地位がはるかに高いことのたとえ。 「一の上の人」
- ⑧ 一面にひろがったり、たなびいたりしているもののたとえ。 「花の一鐘は上野か浅草か (芭蕉) / 続虚栗」
- ⑨ 気持ちや表情などの晴れ晴れしないことのたとえ。 「一晴れて身にうれへなき人の身ぞ / 山家 雑」
- ⑤ (火葬の煙を雲に見立てて) 死ぬことのたとえ。 「程もなく一となりぬる君なれど / 新千載 哀傷」
- ③ 家紋の一。① の形をかたどったもの。主に寺院の紋とする。

『大辞林』 第三版(2006:733)

「霧」

- ① 地表や水面の近くで水蒸気が凝結して無数の微小な水滴となり、浮遊している現象。発生場所によって海霧・山霧・盆地霧・川霧などに、また生因によって放射霧・移流霧・蒸気霧・前線霧などに分けられる。 [季] 秋。 [平安以後、秋のものを「霧」、春のものを「霞 (かすみ)」と言い分ける風があった] → 靄 (もや)
- ② 微小な水滴を空気中に細かく散るように飛ばしたものの。 「一を吹いてアイロンをかける」

(同上 : 672)

¹⁵ 気象庁(2007)[1998]『気象観測の手引き』
(http://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kansoku_guide/tebiki.pdf)(最終アクセス日 2013/12/10)

ここから、「雲」と「霧」は、水分の凝結である点で共通していることが分かる。しかし、「雲」には、比喩的用法に関する記述があり、「霧」には、比喩的用法に関する記述がない。実際には、「霧が晴れる」「霧が覆う」のようなメタファー表現が存在するが、これらの言語表現への言及がない。

5.2.3<<感情は天候>>とメタファー写像

本節では、<<感情は天候>>に関する先行研究を概観する。まず、大森(2004)では、英語の詩や日本の和歌など詩的表現の分析を行い、<<心は大気である>>が提唱されている。その下位メタファーとして、<<精神活動は風である>>とそのメタファー群(<<秘めた思いは優しい風である>>、<<絶望は荒涼たる風である>>、<<激情は嵐である>>、<<関心の変化は風向きの変化である>>、<<時空を越える思いは天翔ける風である>>)を心の動きを理解するプロセスに寄与するものとして位置づけている。また、Omori(2015)においても、AIRをEARTH、WATER、FIREと同様に四大元素と位置づけ、コーパスデータを用いて英語における感情メタファーの分析を行っている。一方、Shinohara and Matsunaka(2003、2009)では日本語における気象現象と感情に関するメタファーとして、<<EMOTION IS EXTERNAL METEOROLOGICAL/NATURAL PHENOMENON THAT SURROUNDS THE SELF>> (感情は自己を取り巻く外界の気象/自然現象)を挙げ、基盤として低気圧や太陽光の不足によって気分が落ち込むなど天気の変化は人間の心身に影響を与えることが指摘されている。さらに、篠原・松中(2010:747-748)においては、実験を通して、日本語話者は、天気の種類と感情の種類を対応づけるという言語による概念メタファーを持つだけでなく、視覚モードにおいても以下のように実際に天気の視覚的記号を感情解釈の手がかりとして用いていることが明らかにされている。篠原・松中によると、太陽の記号は「うれしい」、稲妻の記号は「怒っている」、雨雲という記号は「悲しい」という、ようにそれぞれの感情をより強く推測させる方向に働くことが提示されている。換言すれば、<<感情は天候>>において、好感情は好天候、悪感情は悪天候が心理学的にも存在することが示唆される。

だが、これらの研究は具体的な言語表現の分析に及んでおらず、メタファー表現の意味拡張のプロセスについては研究の余地がある。もし、本当に気象現象が人間の心身に影響を与え、メタファー的意味の基盤となるのであるなら「雪」や「虹」や「台風」など他の気象現象でも、日常的に感情を表すこともできるはずだが、メタファー的写像には偏りが存在する。

一方、日本語の気象現象と感情に関するメタファー表現について、靱山(2006)では「心が晴れない」「気が晴れる」「顔が晴れない」などの表現に言及し、<<よい心の状態(になること)を晴れ(ること)を通して見る>>という捉え方を示した。これらを基に靱山は、人間はどのような天気(の活動)にとって、好ましいか、好ましくないか経験的に理解し、「天気」に関する表現を用いることによって、「人間の心の状態(の変化)」を明示的に表現していることを指摘した。また、李(2007)でも、日・英、双方の言語で天候事象と心象との概念的な結び付きが存在することが観察されている。しかし、どのような要因によって気象現象と感情の好ましさが結び付くかについては、明らかになっていない。例えば、同じ好ましくない感情である「恨み」と「怒り」では、「晴れる」の容認度が変わるなどという現象は説明できていない。

5.2.4 気象現象における「光」と遮蔽物

ここでは、Kövecses(2010[2002])の以下の記述に注目する。

Light and darkness are also basic human experiences. The properties of light and darkness often appear as weather conditions when we speak and think metaphorically.

(概訳：光と闇は基本的な人間の経験である。光と闇の特性は我々が比喩的に話し、思考する際に天気の状態として現れることが多い。)

Kövecses (2010[2002]:21-22)

このように、「光」は好ましい精神状態に結び付くことが示されている。むしろ、英語での分析であり、日本語の気象現象に当てはまるのかは実例を通じた分析を必要とする。また、日本語における「光」とメタファーの関係については、瀬戸(1995a)が「分かる」ための条件として、(1)明るいこと、(2)区別がつくこと、(3)目立つこと、(4)見通せること、(5)覆われていないこと、(6)手に取れること、(7)一定の形をなしていることの、7項目を挙げている。そして、この7項目の条件の前提は「明るいこと」であり、それは「光」によって引き寄せられると述べている。「光」があることが「分かる」ことに結び付くのであるのなら、「光」が差さなければ視覚で「分かる」ことはできない。また、Barcelona(2000)では、<<NEGATIVE IS DARK(AND EXTREMELY NEGATIVE IS BLACK)>> (否定的なこと

は闇（極めて否定的なことは黒）を挙げ、「光」と闇が色として概念化されることに言及している¹⁶。

これらは「光」と「明るさ」の関係までしか言及がされていないが、気象現象における「光」と「明るさ」を分析する手掛かりとなるだろう。具体的な気象現象については、Deignan (1995)では、sunny・cloud について以下のように指摘されている。

When it is sunny, the sun is shining. Most people think that sunny weather is pleasant, and it often makes people feel happier. Sunny is used as a metaphor to describe people and situations that are cheerful and pleasant.

Someone who has a sunny personality is cheerful and friendly, and makes the people around them feel happy. If someone is in a sunny mood, they feel optimistic and happy. You can also say that the outlook or the future is sunny if you feel positive and optimistic about it. (Deignan(1995):144)

(概訳：晴れるとき、太陽は輝いている。多くの人々が晴れることは心地よく、人々をより幸福な気分にすると考えている。晴れることは比喩的に元気で、心地よい人々や状況を表す。陽気な性格の持ち主は元気で友好的で周りの人々を幸福にする。もし、陽気であれば、その人は楽観的で幸福に感じる。展望や未来をポジティブで、楽観的に感じていると、それを晴れていることで表すことができるのだ。)

A cloud is a mass of water vapour that floats in the sky. Clouds are usually grey or white, and they often bring rain or dull, cold weather. Cloud is used metaphorically in several expressions to refer to an unpleasant event which spoils a situation. It is also used to talk about things which conceal a situation or make it difficult to understand. Other words associated with weather used in this way are haze, fog, and mist. (同上:146-147)

(概訳：雲は大気中に浮かぶ水蒸気の固まりである。雲は灰色や白い色をして、しばしば雨やどんよりした、冷たい天気をもたらす。状況を台無しにするような好ましくない出来事について言及する表現に雲は比喩的に使われる。また、状況を隠してしまうことや

¹⁶ 「光」の概念化と明るさについては、3.2 を参照されたい。

状況をわかりにくくするようなことを話すのにも用いられる。他の天気に関連する言葉でこのように用いられるものとして、haze、fog、mist などがある。）

ここから、「晴れる」と「雲」・「霧」の有無が感情・思考に影響を与えていることが確認できる。「雲」・「霧」がなくなることが「晴れる」ことであるのなら、「雲」・「霧」は太陽の「光」を遮る遮蔽物としての性質を持つと考えられる。

5.3 気象現象と状況の理解

5.3.1 <<状況は天候>>とメタファー写像

気象現象は我々が様々な状況を表現するときに用いられる。尼ヶ崎(1990)では、天気を用以て語る、景気に関する表現として以下を挙げている。

「景気はどうだい？」

「去年は土砂降りでしたが、今年は曇りのち晴れといったところです」

尼ヶ崎(1990:9)

「一時はあまりよくなかったが今はよくなった」ことを「曇りのち晴れ」、「最悪の状況」のことを「土砂降り」と表すことは、同様の意味として対応しているわけではなく「曇りのち晴れ」には、一時の不安から脱した話し手の気分が、「土砂降り」には、同じくうちひしがれて惨めな気分が籠められており、単なる客観記述以上のものを伝えていると、尼ヶ崎は述べている。

また、Grady(1997)において、<<CIRCUMSTANCES ARE WEATHER>> (状況は天候) という概念メタファーが提示されている。その基盤として、天候の状態と我々の感情の状態や状況との相関関係を指摘している。

しかしながら、これらの研究で扱われている気象現象の用例は乏しく、その動機づけが明らかになっているとは言い難い。実際の用例をみると、「雲」・「霧」をはじめ、様々な気象現象で状況が表されている。

5.3.2 運動と移動物

「雲」は、遮蔽物だけではなく運動する移動物としての性質を持っている。瀬戸(1995a)

では、運動のメタファーの一種として、動きのメタファーを提示している。さらに、「動き」に「方向」が加われば、「動向」になることを挙げ、「動き」には一定の「方向」が存在することを指摘している。政治の「動き」も、心の「動き」も、季節の「移り変わり」も、すべて一系のものであると瀬戸は述べている。

一方、Lakoff(1993)では、線と移動、力および人間の移動に関連した複合領域を起点領域とし、事象の生起や人間的営為を構造化した事象構造メタファー(Event Structure Metaphors)が提唱されている。これを基に、鍋島(2011)は、日本語におけるメタファー<<活動は移動>>を取り上げ、その一部として、<外部事象←大きな移動物>¹⁷によって「波」、「流れ」、「風」など、外的要因が自然環境に喩えられていることを指摘し、「波に乗る/流れに乗る」、「流れに逆らう」、「追い風を受ける」などを例に挙げている。

何を以って遮蔽物とするのか、移動物とするのかの判断は、どのように決まるだろうか。瀬戸(1995b:90-110)では、空間の構成要素として、「場所」と「方向」を挙げている。瀬戸は、「場所」は、静的な空間を含意し、位置・形・延長（広がり）が問題となり、「方向」は、動的な空間を含意し、前後・左右・上下が問題になると指摘している。さらに、「冬来たりなば春遠からじ」という例を挙げ、「冬」と「春」など季節が移動したり、方向付けを得たりする前に、言語的に「こと」を<もの>として捉えなければ成立しないことに言及している。

そして、「雲」も、「場所」と「方向」を持つものである。また、<もの>としての側面を持ち、移動を伴う。この考察は、5.5で詳しく行うが、「雲」は、遮蔽物だけではなく移動物としての性質も持つことを本稿では重視する。

5.4「晴れる」と「曇る」の考察

本節では、気象現象における「晴れる」と「曇る」の性質を考察した後、感情領域、思考領域、「晴れる」と「曇る」のメタファー的意味を実際の用例を基に考察する。「晴れる」と「曇る」は、「光」の捉え方、遮蔽物の有無がメタファー的意味の実現に影響を与えることを主張する。

¹⁷ 鍋島(2011:174)には、「これらが単独のメタファーなのか写像なのかは曖昧であり、個別に検証する必要がある。」と述べられている。本稿では、言語表現の生産性の高さを踏まえて、概念レベルのメタファーとして捉える。

5.4.1 気象現象における「晴れる」・「曇る」の性質

5.4.1.1 空における「晴れる」・「曇る」

空において、遮蔽物の有無が「晴れる」と「曇る」という捉え方に影響を与えている。(4)、(5)では、空における「晴れる」と「曇る」の対応を示している。

(4) 土砂降りの林道でペダルを踏む選手たち。やがて空が晴れると、木漏れ日が差しこ
る。(読売新聞 2009/01/17)

(5) その日、雨の心配はなさそうだったが、空はどんよりと曇っていた。(日本経済新聞
2007/02/11)

(4)では、「雨」が止むことが「晴れる」と捉えられている。雨をもたらず雲が消えることが「空が晴れる」ことである。(5)のように空に雲が覆うと、雨が降らなくとも「空が曇る」と捉えられることが分かる。そして、(4)では、土砂降りの雨を降らす雲がなくなり、空が晴れた状態に「木漏れ日」などの光が同時に差し込むことになる。

5.4.1.2 知覚者の視界における「晴れる」・「曇る」

知覚者の視界においても「晴れる」と「曇る」は、対応関係にある。(6)、(7)は、知覚者の視界において「光」を遮る粒子状の遮蔽物が存在する用例である。

(6) 建築業武内義和さん(64)は「ドドーンという響きと同時に、土煙が立ち込めた。視界が晴れると、一面、廃虚になっていた」と話していた。(読売新聞 1995/01/18)

(7) チェーンソーや削岩機、ハンマーなどで床や壁を破壊して穴を開けた。室内は粉じんや排ガスで視界が曇るほど。(中日新聞 2006/12/23)

(6)「土煙」が視界を妨げるものとして存在し、それが消えることが「晴れる」と捉えられている。一方、(7)「粉じん・排ガス」が視界を妨げるものとして存在し続けることで「曇る」と捉えられる。そして、視界と「光」について考えると、「視界が{明るい・暗い}」が成り立つように「光」との対応関係も指摘できる。「光」が差し込む状態、「光」が遮られる状態が、視界にも影響を与えているのである。

5.4.1.3 遮蔽物としての「雲」・「霧」の性質

知覚者にとって、「雲」・「霧」は、遮蔽物として捉えられている。まず、(8)～(11)において、「雲」・「霧」の性質としてのその持続性をみる。

- (8) 雲の中では、小さな氷のつぶや水のつぶがくつつきあって、だんだん大きくなります。
すると、重くなって空にうかんでいられなくなり、落ちてくるのです。それが雨なのです。(https://kids.gakken.co.jp/kagaku/110ban/text/1401.html)
- (9) 本日の塩原温泉は、曇時々雨。
だんだんと雲が厚くなり、雨がパラパラと降り出しました。
(http://home.nasushiobara.kokosil.net/ja/archives/7573)
- (10) 島を一望できる展望公園に向かった。島内に公共交通機関はなく基本的に歩くしかない。コケむした石段が途切れた後は細い山道。道の脇に青と白のヤマアジサイが無数に咲いている。
やがて霧が濃くなり、数メートル先も見えないほどに。(日本経済新聞 2014/07/16)
- (11) 天気が良ければ鳥海山を見ながらの気持ちのいい道だろうなあとと思う。いつの間にか無料になった鳥海ブルーラインで標高を上げていくとだんだんと霧が深くなってい
く。(http://www.yukky.jp/yukky/97summer/0808.htm)

(8)～(11)で確認できるように、「雲」・「霧」は、突然発生するわけではなく、徐々に蓄積されていくものである。(8)では、だんだん「雲」が大きくなることが、(9)では、だんだん「雲」が厚くなることが、確認できる。また、(10)「霧」が濃くなる、(11)「霧」が深くなる、と捉えられている。

言い換えれば、遮蔽物としての「雲」・「霧」は、大きさ、厚さ、濃さ、深さなどの変化で捉えられる。「雲」・「霧」は、徐々に蓄積される性質を持ち、瞬間的ではなく持続的に変化が生じている。これが、遮蔽物の持続性として捉えられる。また、(12)、(13)において、「雲」・「霧」と視界の関係が確認できる。

- (12) 山頂に到着、富士山が見えた！となったら、まず撮ること！
一息入れたい、お茶を沸かそうと思っているうちに、みるみる雲が出てきて、富士山が隠れてしまうこともよくあることなのです。

(http://www.yamakei-online.com/special2/fuji_view_3.php)

- (13) 登山口辺りから久留米市内が望めるのだが、霧のため、成田山の慈母観音像がやっと見える程度、JR久留米駅まえのタワーマンションや、久留米市役所ははっきりしない。高良山も低い雲がかかっている。 (<https://yamap.co.jp/activity/276180>)

(12)においては、「雲」が山を隠してしまうことが述べられている。(13)では、「霧」や「雲」によって建造物や自然物が見えづらく、はっきりしないことが確認できる。

どちらも、遮蔽物としての「雲」・「霧」が存在することで、視界に影響が生じている。(12)では遮蔽物が対象を隠し、正体がつかめなくなる状態をもたらし、(13)では遮蔽物が対象を見えづらくさせ、はっきりしない状態をもたらすことが指摘できる。

5.4.1.4 「晴れる」・「曇る」の制約

「晴れる」と「曇る」には制約が存在し、「晴れる」もの、「曇る」ものに影響を与える。

(14)、(15)では、「晴れる」が持つ制約について確認できる。

- (14) 空が晴れる。

- (15) *青空が晴れる。

(14)「空が晴れる」では、遮蔽物の「雲」・「霧」が消え「光」の差し込む状態が表される。しかし、雲一つなく、太陽光が遮られていない状態である(15)「*青空が晴れる」は不自然である。ここから、遮蔽物の存在が前提になれば「晴れる」ことがないことが指摘できる。

一方、「曇る」自体にも「光」と遮蔽物の関係によって制約が存在する。(16)～(18)は、「曇る」の制約が確認できる用例である。

- (16) 空が曇る。{窓ガラス・レンズ}が曇る。

- (17) {*壁・*紙・*木}が曇る。

- (18) {*雲・*霧}が曇る。

(16)では、「空が曇る」のように雲が覆って光を遮っている状態、「{窓ガラス・レンズ}が曇る」のように光を遮る遮蔽物の水蒸気が平面に付着している状態を我々は「曇る」と捉え

ている。だが、「曇る」にも制約が存在し、たとえ水蒸気が付着したとしても(17)「壁」「紙」「木」など「光」を通す性質を元々持っていないものは、「曇る」ことはない。水蒸気という遮蔽物が付着すると、「光」が遮られ、見えないという状態をもたらす。また、(18)では、容認度が下がるように「雲」・「霧」など遮蔽物自体には、「曇る」性質はない。「曇る」は空間、平面における遮蔽物の存在に焦点が当たった言語表現であると言える。

5.4.2 メタファー的意味における「晴れる」・「曇る」の性質

本節では、メタファー的意味における「晴れる」と「曇る」を考察する。そこで、前節で明らかにした遮蔽物としての「雲」・「霧」の性質を以下にまとめる。

- ① 「雲」・「霧」は蓄積されることで、「持続性」を持つ。
- ② 「雲」・「霧」は「正体がつかめない」状態である。
- ③ 「雲」・「霧」は「はっきりしない」状態である。
- ④ 「雲」・「霧」自体には、「曇る」性質はない。
- ⑤ 「雲」・「霧」は平面には付着して「光」を遮り「見えない」状態をもたらす。

これらを踏まえて、「晴れる」と「曇る」感情領域・思考領域におけるメタファー的意味の実現を考えていく。

5.4.2.1 感情領域における「晴れる」・「曇る」

まず、<<感情は天候>>において、(19)～(21)は感情が気象現象として捉えられる用例である。容器のメタファーの一種である<<心は空間>>によって精神が空間として空に概念化されることが分かる。

- (19) 中山町長崎から家族と同館を訪れた渋谷陽子さん(30)は「地震で自粛ムードが続いていたこともあり、連休中初めての外出。花を見て心が晴れた」と笑顔で話していた。(読売新聞 2011/05/05)
- (20) そんなことはわかっています。だったら、もっと明るく生きたい。それなのに生命線のせいで心はずっと曇っています。(読売新聞 2009/07/31)
- (21) 水田に映る岩手山の姿は藤沢さんにとっても原風景だ。かがんで草取りをしてい

て、顔を上げると目に入る。そんな時ずっと胸が晴れる。(読売新聞 2010/05/05)

(19)では、心という空間に好ましくない「地震の被害」に対する不安・心配が「雲」・「霧」のように発生し、それが消えることが「晴れる」と捉えられている。しかし、不安・心配などの好ましくない感情が遮蔽物として捉えられ、心に存在すると(20)「曇る」ことになる。それらが消え、安心感や爽快感として捉える光が差し込むことが(20)では、「明るく生きる」と表現されている。これらのメタファー表現における「光」は、<<喜びは光>>によって安心感や爽快感として捉えられていると言える。

また、(21)では、不安・心配などの遮蔽物が空間としての胸に生じ、それが消えることが「胸が晴れる」と述べられている。胸も、心と同様に感情が宿る場所として捉えられていることが確認できる。次に、感情と身体部位の関係から(22)、(23)をみる。

(22) 85 分の 2 点目で試合を決めたヒーローの表情が晴れることはなかったが、決勝への決意は固まった。(読売新聞 2010/01/10)

(23) 「やっと勝つことができました」。曇っていた表情が、ヒーローインタビューを受けてようやく輝いた。(日本経済新聞 2010/06/23)

(22)、(23)は、感情と顔との隣接性に基づくメトニミー表現である¹⁸。自己の精神状態が好ましいか、好ましくないかによって顔の表情にも変化が起こる。表情は、好ましくない不安・心配など遮蔽物として捉えられる感情が消えると(22)のように「晴れる」、存在していると(23)のように「曇る」ことになる。

そして、(24)～(27)においては、心に気象現象が発生しているように捉えられていることが確認できる。

(24) 月一回、東京の病院に通うため東武線を利用するので、時々の特急に乗って小さな旅

¹⁸ 有菌(2007)においても、感情と身体部位という観点から「胸が晴れる」を取り上げ、胸に感じていた閉塞感が解消することを基盤として<不安の解消>を表していることに言及がある。さらに、有菌(2008)では、<感情表出>フレームに基づくメトニミーによって、内的心情を外部へ表出する道具を表す「顔」で、感情表出という機能の結果生じる生産物(<表情>)を表すと指摘した。そこから、種々の感情が無意識に<表情>として表れてしまう用例として、「{浮かぬ/怪訝な}顔をする/顔が曇る/顔が変わる」を挙げ、それぞれ「表情」への言い換えも可能としている。

気分。また、途中下車して散策するのも楽しい。心のもやもやが晴れます。(東京新聞 2011/01/26)

- (25) 谷家の話は新鮮だった。「その舞台で、私もやりたいことを生かしたい」とメールを送った。胸のもやもやが、さっと晴れた。(朝日新聞 2011/08/21)
- (26) そんなセコくて卑劣で悲しい行為に精を出しても、気持ちが晴れるどころか、なおさら複雑でタチの悪いストレスに包まれるだけでしょう。(朝日新聞 2011/08/20)
- (27) 昨年4月から今年1月末までに、センターを利用したのは34人、うち12人が発達障害者だった。参加した女性はコミュニケーションがうまく取れず、仕事が長続きしなかったという。「同じ悩みを抱えている人がいて、自分だけじゃないと知って安心しました。なぜうまくいかなかったのか分かるようになって、雲が晴れる思いです」と打ち明ける。(読売新聞 2012/02/27)

(24)「心のもやもやが晴れる」、(25)「胸のもやもやが晴れる」では、心や胸の中で感情が「もやもや」という「霧」の一種である「もや」¹⁹のイメージで捉えられている。また、(26)でもはっきりとしない「霧」のように包み込む「ストレス」が消えることを「晴れる」と捉えている。さらに、(27)では、障害から生じる「コミュニケーションがうまく取れず、仕事が長続きしない」という悩みに関する感情を正体につかめない「雲」のように捉え、消えることを「晴れる」と捉えている。「悩み」も「ストレス」も何かははっきりとしないことから生まれ、持続性を持っている感情と言える。

言い換えれば、遮蔽物は、「雲」・「霧」の身体経験を基盤に、正体につかめず、はっきりとしない感情に結び付きやすい性質を持つ。そして、それが消えることで安心感や爽快感が「光」として差し込む。

さらに、(28)～(30)は、具体的な感情が遮蔽物として存在する用例である。これは、遮蔽物としての「雲」・「霧」の「正体につかめない」、「はっきりしない」、「持続性を持つ」といった性質に焦点が当たっている。

- (28) しかし、この悲惨な被爆体験を語り継ぐことも大切ですが「恨み心で恨みは晴れない」

¹⁹ 『大辞林』第三版(2006:2534)では、「もや」について「空气中に小さい水滴や吸湿性の粒子などが浮遊し、遠方のものが灰色にかすんで見える状態。視程は1キロメートルを超え、霧よりは見通しがよい。」という意味記述がある。

ともいいます。(読売新聞 2002/08/02)

(29) 人をおもんばかりの純な心の主人公に笑い、泣かされ、ひととき浮世の憂さが晴れた。

(日本経済新聞 2008/12/18)

(30) 東電に対しても「事故を発生させ、(その後の賠償についての対応も) 紳士的とは言えない」と述べ、経営陣の総退陣を求めた。国会事故調には「苦しさや無念さが晴れるような調査をお願いしたい」と訴えた。(毎日新聞 2012/01/31)

(28)「恨み」、(29)「憂さ」、(30)「苦しさや無念さ」も「雲」・「霧」同様の性質を有する感情であるという点で共通している。また、これらは「雲」・「霧」同様に、急に出現せず、徐々に積もって大きくなるものである。以上の経験から感情の遮蔽物として捉えられる。これらの感情の遮蔽物が消えることで「光」が差し込み「晴れる」ことになる。

しかし、遮蔽物の性質と合致しないような感情はメタファー的意味の実現が阻害される。

(31)～(34)では、遮蔽物の性質がもたらすメタファー的意味の実現の制約をみていく。

(31) {*怒り・*恐怖・*恥ずかしさ}が晴れる。

(32) 積もり積もった/長年の{??怒り・??恐怖・??恥ずかしさ}が晴れる。

(33) {*喜び・*愛しさ・*幸福}が晴れる。

(34) {*恨み・*憂さ・*苦しさ・*無念さ}が曇る。/心が曇る。

まず、(31)のように、何らかの刺激によって一時的に生じ、蓄積されず持続性が生まれにくい感情は容認度が下がる。よって、「怒り」「恐怖」「恥ずかしさ」では、遮蔽物の性質と合致しない制約によって容認度が下がる。だが、(32)「積もり積もった」「長年の」など蓄積や持続性を明示することにより容認度が上がる。つまり、遮蔽物の性質との合致が容認度を左右する。

次に、元々存在すること自体が好ましい感情である(33)「喜び」「愛しさ」「幸福」では負の感情で遮られているわけではなく「晴れる」では容認度が下がる。「晴れる」ためには、遮蔽物と捉えられる感情が存在する「曇る」状態を前提とする性質により容認度が下がる。

さらに、「*雲が曇る」が不自然になるように、遮蔽物自体には「曇る」性質がない。この制約によって(34)「恨み」「憂さ」「苦しさ」「無念さ」など具体的な感情の遮蔽物自体は「曇る」ことはない。但し、「心が曇る」は心に遮蔽物が存在する状態を捉えているためメ

タフアー的意味が実現する。

5.4.2.2 思考領域における「晴れる」・「曇る」

「光」によって見えることに関する経験が思考へと写像される。ここでは、<<思考は天候>>について考える。(35)～(37)は、知覚者の空間としての精神における思考の遮蔽物に関する用例である。

- (35) 鑑定で別物と判明し、疑いが晴れる有力な材料になったという。(読売新聞 2010/01/01)
- (36) 友達と満足に遊べず、少し嫌になっていた。「やめてしまおうか」。しかし、実際に想像すると無性に寂しくなった。「テニスなしの生活は嫌や」。迷いが晴れた。(読売新聞 2006/02/22)
- (37) {*不審・*怪しみ・*混乱}が晴れる。

「光」は「白」、闇は「黒」の二項対立関係を持つのに対し、気象現象は、「晴れ」と「雨」の対立に加え、その中間にあたる「曇り」が存在する。「雨」でも「晴れ」でもない「雲」・「霧」の状態は、黒でも白でもない、はっきり白黒判断できない中間の「灰色」として概念化が起こる。これは、<<理解は見ること>>の働きであると考えられる。この関係をまとめたのが表 5-1 である。

表 5-1 色としての気象現象の概念化

二項対立関係	光「白」	—	闇「黒」
色としての概念化	晴れ「白」	曇り「灰色」	雨「黒」

以上を基盤に、有罪か、無罪かという対立関係に対し、中間段階の「曇り」の状態である(35)「疑い」、そして、「テニス」を続けるか、やめるか、どちらを選択するか、ということへの中間段階の「曇り」の状態である(36)「迷い」などの二項対立関係を前提としながらはっきり白黒判断できない思考の状態に結び付く。これらが知覚者の精神空間の空に「雲」・「霧」となって立ち込める。思考のこのような遮蔽物が消えると、「分かる」ことができ安心感や爽快感が「光」となって差し込む。一方、(37)「不審」「怪しみ」「混乱」のような

どちらかを判断する二項対立関係のない思考の場合、容認度が下がってしまう。つまり、知覚者にとってどちらか二項対立関係の判断がなく、中間段階の「曇り」の状態が想起されない、漠然と単に考えているだけの思考は「晴れる」ことはない。

また、(38)~(41)は精神が平面として捉えられ、思考の遮蔽物が付着している状態である。これは、「曇る」の遮蔽物が平面に付着する性質に焦点が当たる。ここでは、存在のメタファーの一種である<<心は物体>>が影響している。

- (38) 心が曇ると、心が立ち騒ぐことになる。明鏡止水の心境で、心静かにいることが重要である。(BCCWJ: Yahoo!ブログ)
- (39) 最高裁のテミス像には目隠しが無い。そんなものをしなくても、富や権力、議員バッジなどに判断が曇るはずもないのだろう。(読売新聞 2012/04/28)
- (40) 今後の景気の動向など難しい予想もある。期待が強すぎて目が曇る場合もある。(中日新聞 2009/05/18)
- (41) *疑いが曇る。/{*判断・*目}が晴れる。

(38)では、心を鏡の平面として捉え、落ち着きがない思考が付着した状態を「心が曇る」と表現している。これは、感情ではなく思考に関する文脈であるため(20)の「心は曇る」と解釈の違いが生じている。(39)も「富」「権力」「議員バッジ」など人間の思考の正常な判断を妨げるものを遮蔽物と捉え、それらが付着すると正しい判断ができなくなる。つまり、不必要な考えが遮蔽物として付着して、「光」を遮っている状態が「判断が曇る」である。これも遮蔽物が光を遮ると「分かる」ことができないということを基盤としている。さらに、視界に係る身体部位である目と判断が結び付き(40)「目が曇る」というメトニミー表現も存在する。以上のように、付着した遮蔽物が視界に及ぼす「はっきり判断できない」事柄に関する思考が「曇る」と捉えられる。

しかし、(41)では、メタファー的意味の実現の制約も確認できる。そもそも、「疑い」は遮蔽物であり、「曇る」ことはない。元々、「判断」「目」は遮蔽物として捉えられるものが存在せず、「光」が差し込む状態であるため「晴れる」ことはない。思考領域においても遮蔽物の存在が、メタファー的意味の実現の制約となっていることが指摘できる。

5.5 「雲」・「霧」と状況の理解

本節では、気象現象における「雲」と「霧」の相違点を考察した後、状況領域における「雲」と「霧」のメタファー的意味を実際の用例を基に考察する。

まず、我々が、「雲」と「霧」に関してどのような経験をして、どのような知識を持っているかを考察する。そこから、それぞれの気象現象に対する我々の捉え方を探っていく。

5.5.1 気象現象における「雲」・「霧」の相違点

5.4.1.3 では、「雲」・「霧」の遮蔽物としての共通点を確認した。ここでは、「雲」・「霧」の相違点についてみていく。(42)～(44)は、「雲」が遮蔽物として、特定の場所に留まっていることを表す。

- (42) 現在304メートル。早ければ3月下旬に東京タワー(333メートル)を追い越す。
最近ではスカイツリーの先端を雲が覆う日もある。(読売新聞 2010/03/07)
- (43) 重い雲が垂れ込め、時折細かな雨が降るあいにくの天気となったものの、6月21日の豊中運動場は3万人の大観衆(主催者発表)で埋まった。(毎日新聞 2013/06/08)
- (44) 雲の中で視界がきかない標高2000メートル級の山間部で高度約1500メートルに降下するよう指示した管制官のミスは、一步間違えば大惨事につながっていた。
(読売新聞 2010/10/28)

(42)では、「スカイツリーの先端」を「雲」が覆い、(43)では、「豊中運動場」に「雲」が垂れ込めている。なお、(43)では、「重い雲」と表せるように質感・量感のあるものとして捉えられている。そして、「垂れ込める」という表現から、「雲が」上に留まりつつ、下へ領域を広げ、総体としてそこに存在するものに境界線を持って覆い被ることも指摘できる。

以上から、「雲」は、境界線の存在する<もの>としての側面も持つことが分かる。さらに、「細かな雨が降る」という表現から、「雲」は、「雨」の前兆であることも指摘できる。通常、我々は「雲」の中に存在することはないが、(44)「視界がきかない」とあるように、我々が標高の高い位置にいる場合において、「雲」は視界を遮る性質を持つ。だが、それ以外の場合は「雲」は直接的に視界を遮るものではない。「雲」に視界を遮られている状態は、前を見通すことができない、好ましくない状態である。

また、(45)～(47)は、「霧」に関する用例である。「霧」は、「雲」と異なる性質を持つこと

が確認できる。

- (45) 温泉地として知られる大分県由布市湯布院町の由布院盆地で18日、4月としては珍しい朝霧が立ち込め、市街地がすっぽりと白く覆われた。(読売新聞 2013/04/18)
- (46) 5合目にある山梨県側の吉田口では、濃い霧が立ち込めて30メートル先も見えないような天候の中、登山者が午前中から列を成して登り始めた。(日本経済新聞 2013/07/01)
- (47) 唐松山荘では中島さんの弟さんに天気のアドバイスを受け、霧雨の中キレットに臨みました。ガスのために周囲がよく見えなかったのが、結果的には幸いだったようで、霧が晴れて切り立った絶壁を目にした時にはよくぞあんな陰しいところをと震えが来ました。(BCCWJ:石井善子『明日のおもいで』)

(45)「覆う」という「雲」と異なる性質を持つ遮蔽物であることが分かる。「霧」が覆う場合、知覚者はその中に入ってしまうことが分かる。さらに、(46)は、濃淡で表わされた「濃い霧」が「光」を遮り、視界を悪くするものとして捉えられている。また、(47)では「雲」とは異なる身体経験として「霧が晴れる」様子が述べられている。ここでは、「霧」が晴れることによって、見えていなかった絶壁が見えるように、目の前のものがはっきり見えることが分かる。

しかし、「霧」は、どこからどこまでがその領域なのか、広がりとは特定できず、境界線が不明瞭である。例えば、子どもに「雲」の絵を描くように指示を出せば難なく描くことができるが、「霧」は、形も境界線も把握しにくく描くことはできないだろう。また、「雲」は数えることができるが、「霧」は数えることはできない。ここから、「霧」は、<もの>化しにくく、存在する場所が問題となることが指摘できる。

いずれの場合も、遮蔽物が特定の場所に留まる状況は、好ましくない状態で、知覚者の視界にも影響を与える。これは、「雲」にも共通する性質である。だが、(48)、(49)からは、「雲」が広範囲の「広さ」を持っていることが分かる。

- (48) 春、東京の空を観察しました。向いている方向は、北です。空には雲が少なく、天気ははれでした。次の日、雲が空一面をおおい、天気はくもりから雨に変わりました。
(http://www2.nhk.or.jp/school/movie/clip.cgi?das_id=D0005300049_00000)

(49) 日本気象協会によると、21日は日本の南海上に前線が延び、全国的に雲が広がりやすくなる見通し。(日本経済新聞 2012/05/20)

(48)では「東京の空」に「雲が空一面をおおい」、(49)では「全国的に雲が広がる」のようにその範囲は広い。

ここから、「雲」の範囲の「広さ」が指摘できる。一方、「霧」は、地表に存在するものであり、「広さ」は主に知覚者の視界が範囲となる。むろん、「霧」も「霧が漂う」、「霧が流れる」のような移動に関する表現も存在はするが、その「広さ」は主に知覚者の視界の範囲内である。言い換えれば、「霧」は、濃淡で捉えられるように「奥行き」を持った現象であると言える。

さらに、(50)～(52)では、「雲」の「動き」が位置変化と捉えられていることが分かる。「雲」は、「通過」や「迫る」など移動を伴い移動物としての性質を持つ。だが、移動物としての性質を範囲の「広さ」や移動の「大きさ」を有さないため「霧」は持ちにくい。そもそも、「霧」は移動が起こる前に消えてしまうことが多い。また、「雲」の移動は、多く「雨」が伴う。

(50) 気象庁天気相談所は「急な豪雨は注意報・警報が間に合わないこともある。予報で『大気の状態が不安定』のコメントがあるときや、黒い雲が迫ってきた際は、浸水しそうな危険な場所には近づかないようにしてほしい」と話している。(日本経済新聞 2010/08/14)

(51) 雨雲が通過する影響で、東海地方は十五日午後九時ごろから深夜にかけ、平野を中心に大雨が予想される。十六日朝までの二十四時間予想雨量は、三重県で一〇〇ミリ、愛知、岐阜県で八〇ミリ。(中日新聞 2011/10/15)

(52) 午前中はうだるような暑さ。午後になると雲行きが怪しくなり、午後2時半ごろ雷鳴とともに豪雨が降りだした。(毎日新聞 2010/07/10)

(50)「黒い雲」が迫ってくると、急な「雨」が降る前兆であり、(51)「雨雲が通過する」と、その場所は「雨」が降り、(52)「雲行きが怪しく」と、「雨」など好ましくない変化が起こることが予測される。そして、「雲行き」という表現が存在することからも「雲」の「動き」と我々の予測との関係は密接であることが分かる。

つまり、「雲」があることは観察できるが、その移動はコントロールできない。そして、「雲」が知覚者の方に近づくことは、好ましくない変化に巻き込まれる危険性がある。以上のように、我々は、「雲」の動きを観察することで、気象の状況を予測することはできるが、それを我々の力でコントロールできないという性質が指摘できる。

5.5.2 状況領域における「雲」・「霧」

気象現象の様々な性質は、目標領域の状況に写像される。ここでは、<<状況は天候>>において、「雲」と「霧」の遮蔽物としての性質と「雲」の移動物としての性質がメタファーの意味に影響を与えていることを考察する。

(53)、(54)は、遮蔽物としての「雲」についての用例である。ここでの「雲」は、光を遮り、「見通しがきかない」状況をもたらす。<<理解はみること>>によって遮蔽物が遮っている状態は「見通しがきかない」状況に概念化されていることが指摘できる。

(53) 暗く重い雲が日本の上空を覆っている。まず経済的状況。日本が特別悪いわけでもない——というより、元気だった中国経済まで変調をきたし世界全体が落ちこんでいる。東日本大震災もあった。そして、前々から言われている財政赤字や少子高齢化に伴う市場の縮小もいまだ改善のめどがない。(毎日新聞 2011/12/18)

(54) 今の日本は出口のない閉塞（へいそく）感に覆われている、と言われます。原発や消費税、年金……、最近では岡山出身の芸人に端を発した生活保護など、山積する問題を先送りしている限り、雲が晴れることはありません。(毎日新聞 2012/06/04)

(53)では、「経済的状況」、「東日本大震災」、「財政赤字」、「少子高齢化に伴う市場の縮小」など様々な要因、(54)では、「原発」、「消費税」、「年金」、「生活保護」などの問題の「閉塞感」が「雲」として捉えられる。また、遮蔽物は、「光」を遮る性質を持つため「暗く」、蓄積する性質を持つため「重い」と表現されている。

そして、(53)「改善のめどがない」、(54)「出口のない」が示すように、遮蔽物が留まる状態は、「見通しがきかない」状況である。これは、遮蔽物が「光」を遮っている状態が、先や前を見通すことができないことを基盤とする。

対照的に、(55)、(56)は、遮蔽物としての「霧が晴れる」に関する用例である。(54)の「雲が晴れる」と比べると、範囲の「奥行き」という点で違いが指摘できる。

- (55) 選挙を意識しないで、景気対策の効果を算段することは不可能だ。これから少なくとも2カ月は視界不良。霧が晴れるまで、誰もリスクを取りたくない。（日本経済新聞 2010/09/09）
- (56) 現在の濃霧が晴れるかどうかは企業の行動次第。節約して身を縮めず、グローバルな革新を進めれば期待がある。（中日新聞 2009/01/09）

「霧」は、地表に近いという性質を持っているため直接視界に働きかけ、差し迫って「見通しがきかない状況」を表す。よって、(55)では、「2カ月は視界不良」と近い時間を表し、視界が遮られる状態は行動しにくい状況であり、「誰もリスクを取りたくない」となる。(56)「現在の濃霧」も、まさに差し迫った状況を表し、「節約して身を縮めず」とあるように行動しにくい状況にある。

(57)～(59)は、「暗雲」に関する用例である。これは、「明るい」、「暗い」で表わされる「光」との関係が分かる。

- (57) 債券相場の先行きに暗雲が漂い始めている。政府の追加経済対策に伴って7月発行分から増額になった2～40年債の入札を無難に消化。（日本経済新聞 2009/07/23）
- (58) 衆院選で後退し、国政とのパイプまで失えば、支持者にとって自民の存在意義さえ薄れる。残り任期二年を切った石原知事の後を争う知事選にも暗雲がかかる。（東京新聞 2009/07/14）
- (59) 正副議長の選出を受け、猪瀬直樹知事も今後の都政運営の方針を述べた。安倍晋三政権の経済政策について「暗雲に覆われた日本列島に一筋の光が差し込んできた、というのが大方の実感」と評価したうえで「この光を確かな輝きにするため、安心、希望、成長の三つを軸に都政運営を行う」と話した。（毎日新聞 2013/08/09）

(57)「債券相場の先行き」に「暗雲が漂い始めている」、(58)「知事選」に「暗雲がかかる」と捉えられている。これも、特定の場所に遮蔽物としての「暗雲」が留まっていて、「見通しがきかない」状況を表している。「光」が差さない状態、目の前に遮蔽物がある状態は、我々にとって自由に動けなくなってしまう。こういった基盤があることによって、「見通しがきかない」状況を表すことになる。

そして、(59)のように、先行きに見通しがきくと、遮蔽物の「暗雲」から「一筋の光が差

し込む」ことになる。この状況は、見通しがきき、視界が広がる。「光」は、何らかの異なる状況への好転のサインとして捉えられる。これは、「光」と「視覚」との関係からも指摘できる。同様に、(60)～(62)の用例からも「光」と遮蔽物の関係が分かる。

- (60) 同派離脱中の安倍晋三首相も駆けつけ「日本を覆っていた黒雲が吹き飛んで明るい日差しがさしてきた。日本を取り戻す戦いは道半ばで清和会からも多くの候補者がある」と参院選での躍進に期待。総裁派閥の勢いは「脱派閥」を掲げる石破氏の目にどう映ただろうか。(日本経済新聞 2013/05/14)
- (61) 鉄鋼大手首脳は、足元の状況を「土砂降りを脱して薄日が差してきたが、先には黒い雲が立ち込めている状況」と例える。本格回復への道のりはまだ遠いようだ。(東京新聞 2009/10/30)
- (62) 名古屋商工会議所の高橋治朗会頭は二十三日の定例記者会見で、東日本大震災による名古屋地域の景気への影響について「真っ暗な土砂降りだ。明るくなる時期は後ろにズレるということだろう」と厳しい認識を示した。(中日新聞 2011/03/24)

(60)「日本を覆っていた黒雲」が吹き飛んで、「明るい日差し」が差し込むことを、見通しがきく状況で、好ましいことが起こる前兆だと捉えている。一方、(61)、(62)は、「土砂降り」に関する用例である。(61)では、「鉄鋼大手首脳」にとって業績が好ましくない状態を「土砂降り」と捉え、そこに「薄日が差してきた」先に、「黒い雲が立ち込めている」と捉えている。(62)では、「雲」が登場せず、好ましくない状況を表す「真っ暗な土砂降り」が留まる遮蔽物となって「光」を遮っている。それが消えることで見通しがきき、景気が良くなることを「明るくなる時期」と捉えている。

また、(63)、(64)の「霧」の用例にも遮蔽物の性質は顕著に表れている。だが、「霧」の用例は、「雲」の用例と違い、形は表されにくい。これは、<もの>として捉えにくいからである。「霧」は、遮蔽物の存在する場所が多く問題になる。

- (63) 岩手の地域医療体制の将来は、深い霧がかかったまま、先がみえずにいる。(毎日新聞 2009/05/31)
- (64) 四国経済同友会の松田清宏代表幹事（JR四国会長）は「スマートフォンのヒットなど小さな明かりはあるが、大きく景気が上向く兆候が見いだせない。霧の中にいる感

じ」と陰しい表情。(読売新聞 2011/01/13)

(63)「地域医療体制の将来」に「深い霧」がかかっている。この状況も「地域医療体制」という差し迫った緊急性を要する問題に「先がみえず」という表現から分かるように「見通しがきかない」状況である。それが、深さを持つ「霧」として捉えられている。また、(64)では、「景気が上向く」見通しが分からない状況を「霧の中」と捉えている。対照的に、景気の見通しに好ましい状況をもたらす「スマートフォンのヒットなど」は、「小さな明かり」として捉えられ、「光」と対応関係にあることが分かる。

そして、(65)～(67)は、移動物としての雲に関する用例である。ここでは、「雲」の「動く」という性質に焦点が当たる。つまり、<<活動は移動>>の働きによって「雲」が移動物に概念化されることが指摘できる。

(65) 参院選の大勝で、自民党が衆参とも巨大与党となり、原発の再稼働への動きが強まる雲行きになってきた。(中日新聞 2013/08/07)

(66) テレビをつけると、レスリングの浜口父娘が現れた。オリンピック種目から消えるのではと心配されたレスリングが、無事残れそうな雲行きになってきたため、インタビューを受けているのだった。(毎日新聞 2013/06/16)

(67) 安倍政権の経済政策アベノミクスが雲行き怪しい。異次元の金融緩和で盛り上がった市場も、肝心の成長戦略で失望が広がった。(東京新聞 2013/06/07)

「雲」が「動く」には、「雲」が<もの>として捉えられないと、運動するものとして観察できない。また、通常、「雲」の「運動」は、「雨」などの変化を伴うものである。現代日本語において、「雨」自体よりもそれをもたらす「雲」の方が際立ちの高いものとして捉えられている。我々は、「雲」の「動き」からこれから「晴れ」や「雨」になりそうだという予測を日常的に行っているからである。

(65)では、「自民党の原発再稼働への動き」が「雲行き」と捉えられている。(66)「レスリング」が「オリンピック種目に無事残れそうな動き」が「雲行き」と捉えられている。つまり、「雲行き」とは、「今後のなりゆき」のことである。「雲」が運動する方向は、我々ではコントロール不能で見守るしかない。ゆえに、(66)「オリンピック種目に無事残れそうな動き」のような期待を表すことができる。また、不安が伴う場合、(67)「安倍政権の経済政策

アベノミクスの動き」のように好ましくない変化が起こりそうな状況であることが「雲行きが怪しい」と捉えられる。

5.6 本章のまとめ

本章では、現代日本語における<<感情は天候>>、<<思考は天候>>、<<状況は天候>>という概念メタファーの存在を提示した。また、起点領域である気象現象における「光」と遮蔽物と移動物という現象の構成要素がメタファー的意味の実現に影響を与えていることを指摘した。これらの現象の構成要素に阻まれると、「晴れる」と「曇る」のメタファー的意味の実現が阻害される。

<<感情は天候>>の感情領域においては、心は空として捉えられ、<<喜びは光>>によって「光」は安心感や爽快感として捉えられる。そして、「雲」・「霧」は、「持続性を持つ」「正体をつかめない」「はっきりしない」という性質を持った感情として捉えられる。つまり、<<心は空間>>によって、空として概念化されるからこそ、その空に「雲」・「霧」が発生するものとして捉えられる。

<<思考は天候>>の思考領域においては、心は空と物体として捉えられ、「光」は「分かる」状態をもたらす。「雲」・「霧」は、二項対立関係を持つ思考の白黒ははっきり判断できない状態に結び付く。これは、<<理解は見ること>>の影響を指摘できる。また、心の平面に遮蔽物が付着すると捉えられるのは<<心は物体>>による働きだと考えられる。

<<状況は天候>>の状況領域においては、「光」は何らかの異なる状況への好転のサインとして捉えられる。また、<<理解は見ること>>によって「光」は「見通しがきく」状況として捉えられる。そして、「雲」・「霧」は、好ましくない状況と結び付く。「雲」・「霧」は、遮蔽物としての性質を持つが、性質が異なる。「雲」は、上空に存在するのに対し、「霧」は、地表に近いという性質を持っているためより直接的に視界に働きかけ、差し迫っている状況や行動しにくい状況をもたらす。さらに、「霧」は、濃淡で捉えられるように「奥行き」を持った現象であると言える。

「雲」と「霧」の根本的な違いとして「雲」は移動物としての性質を持つ。なお、移動物は<<活動は移動>>によって産出される。移動物として捉えられることは「雲」が持つ固有の性質であると言える。「雲」の移動物としての性質は以下にまとめられる。

移動物＝観察することができる・変化を伴う動きで巻き込む・知覚者には予測ができるが、

コントロール不能。

従って、移動物としての「雲」は、今後のなりゆきと結び付く。「雲」は、範囲の「広さ」や移動の「大きさ」を有し、移動物としての性質を持つ。一方、「霧」は、境界線がはっきりせず、<もの>化しにくく、範囲も移動も知覚者の視界の範囲内であるため移動物としての性質は持ちにくい。

以上のように、「光」と遮蔽物と移動物という現象の構成要素の領域ごとの表れ方の違いとその性質を示した。これらの現象の構成要素を設定することによって、各領域のメタファ―表現の写像の偏りや性質の違いを明らかにした。

第6章 「風」に関するメタファー表現

6.1 はじめに

「風」は、日本中どこにいても経験することができる普遍的な身体経験である。そして、日常生活だけではなく社会情勢や人間関係などの様々な状況の変化がメタファー表現の「風」を通して捉えられる。

しかし、同じ「風」でも、プラスの意味を表す「追い風」、マイナスの意味を表す「向かい風」が存在するように、その評価性は捉え方によって大きく変わる。また、「先輩風」のように気象現象としては存在せず、語構成からみても意味が推測できないような言語表現も存在する。

本章では、実際の用例に基づき気象現象である「風」を取り上げ、メタファー表現としての「風」の現象の構成要素を「方向」・「力」と設定し、考察する。そこから、メタファー表現としての「風」の動機づけを明らかにする。

6.2 「風」を通じた状況の理解

我々は、様々な状況を「風」を通してメタファー的に理解する。靱山(2006)では、「追い風が吹く」「風向きが悪い」「順風（が吹く）」「逆風」など「風」に関する表現を挙げ、これらの言語表現がいずれも、人間（の営み）に何らかの影響を与える、その人を取り巻く状況、世の中の状況を表していることを指摘した。こういった「風」に関するメタファー表現も鍋島(2011)が<<活動は移動>>で提示した<外部事象←大きな移動物>の影響を受けていると考えられる。

しかしながら、以上の先行研究では、なぜ「風」が現代日本語において様々な状況を表せるのか明らかになってはいない。また、メタファー表現としての評価性についても言及はなされていない。さらに、「風向き」「風当たり」「先輩風」などの分析されていない表現も存在する。

6.3 「風」の移動と構成要素

「風」は、それ自体が移動を伴う気象現象である。気象現象としての「風」の定義について、気象庁(2007[1998]: 20)によると、「風は、大気の地表面に対する相対的な動きであり、

風向と風速によってベクトル（普通は極座表による方向と速さ）で表す。」²⁰とある。また、『大辞林』第三版(2006:471)では、以下のように記されている。

「風」

- (1)空気の動き。一般に、気圧の高い方から低い方に向かう水平方向の空気の流れをいう。「一が吹く」
- (2)人に対する社会全体の態度。「世間の一は冷たい」
- (3)ならわし。しきたり。風習。「芦原や正しき国の一として／新千載 慶賀」
- (4)名詞の下について、接尾語的に用いる。
- (ア)様子・態度・素振りなどの意を表す。「先輩一」「役人一」
- (イ)人のある気分させることを表す。「臆病一に吹かれる」 → かぜ（風邪）

これらを踏まえると、「風」は、空気の動きであることが分かる。その動きには、風向と風速が伴う。そして、「風」は、気圧の高い方から低い方へ上から下へ吹く。また、我々にとって速い風は強い風として、遅い風は弱い風として捉えられることを経験している。さらに、森(1998:63)には、「風が山に当たると、空気が山に押しつけられて高気圧ができる。その高気圧から山頂を吹き越えてくる風は、元々勢いがついている上に、山肌を転がり落ちるように吹くので、強い「おろし風」となる。」とある。この「風」は、知覚者にとって山を発生源とする風のように捉えられる。

ここまでの、気象現象としての「風」について我々が有している知識である。本稿では、移動物として「風」を考察する。移動物として「風」を捉えると、その移動には本節でみてきたように「方向」・「力」が存在することが指摘できる。「方向」には、前/後・上/下、「力」には、強/弱が存在すると想定する。なお、「方向」における空間関係は、Johnson(1987)らが提唱したイメージ・スキーマの Clausner and Croft (1999)のリストの中の<前/後>・<上/下>に一致すると考えられる。また、「風」の動きは、知覚者によって捉えられることで概念化される。こうした身体経験から「風」自体にも時間的展開を持つことが指摘できる。風は発生源から吹く、風は方向を変える、風は知覚者によって捉えられる、風は吹いた後に何らかの影響を及ぼす、という性質を持っており、これらの性質が時間的展開を持つことが考

²⁰ 気象庁(2007)[1998]『気象観測の手引き』
(http://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kansoku_guide/tebiki.pdf)(最終アクセス日 2014/10/30)

えられる。

6.4 「風」の考察

本節では、身体経験における「風」の性質を考察した後、現象の構成要素である「方向」・「力」という観点から目標領域である状況領域における「風」を実際の用例を基に考察する。

6.4.1 身体経験における「風」の性質

6.4.1.1 「風」の「方向」と「力」

「風」の移動に焦点が当たる場合、発生源は特定できない。(1)～(4)は、「風」の「方向」と「力」に関する用例である。

- (1) 今大会から「一般男子六十歳以上の部」が新設され、ハーフマラソンでは愛知県東浦町の大泉通（とおる）さん（67）が優勝。「前半は向かい風が強かったが、後半は追い風が背中を押してくれた。マイペースで走ることができた」と笑顔で振り返った。（中日新聞 2010/05/24）
- (2) 火災発生現場の風下側では、延焼による火災の移動だけでなく、飛び火による二次火災発生の危険性も高いことを認識し、火災現場の位置の確認と風上側への早めの避難が大切です。（読売新聞 2009/11/13）
- (3) 鳴子署や同農協によると、倒れたのは互いに支柱を結び合わせていたテント5張り、隣の1張り。北西からの強い風でテントが持ち上がり、来場者らに覆いかぶさるよう
にして倒れたという。（日本経済新聞 2012/11/04）
- (4) 宅配会社の伝票用コンピュータ用紙もあった。あちこちで白い綿のようにふくらみ、弱い風にも揺れているのは、シュレッダーで細かく裁断されたコンピュータ用紙だった。（BCCWJ:青木慧『ゴミ』）

「風」は、様々な方向から吹いている。しかし、知覚者の視点においては「風」による移動への働きかけが問題となる。つまり、知覚者にとって後ろから吹く「風」は、移動を助け、加速させる。一方、知覚者にとって前から吹く「風」は、移動を妨げ、減速させるということに焦点が当たる。(1)では、マラソンの走行において知覚者の前から吹く「向かい風」によって最初は走るのが妨げられていたが、知覚者の後ろから吹く「追い風」になると、背中が

押されて走りやすくなっていることが分かる。この「風」の前/後は、一定ではなく、知覚者にとって常に変化するものとして捉えられる。よって、知覚者は「風」の前/後の方向によって、移動の助けになったり、妨げになったりする。

また、「風」は、気圧の高いところから気圧の低いところへ吹く。そこには、上から下という方向が指摘できる。(2)では、知覚者からみて、「風」の吹いて来る方向が「風上」、吹いて行く方向が「風下」と捉えられている。さらに、「風上」からの「風」により「風下」は、影響を受けやすく、火や煙が広がりやすいことが指摘できる。これは、「風」の方向は吹いて来る方向である上から吹いて行く方向である下へと捉えられることを示している。そのため、下から上には「風」の影響が及ばないことが指摘できる。なお、前/後の場合の「風」の方向とは異なり、上/下の方向関係は一定で変化することはない。上から下への「風」の方向は、知覚者の身体の向きと関係なく気圧の高いところから気圧の低いところへ吹き続けるからである。

さらに、(3)、(4)では、「風」の力の強/弱についてみることができる。(3)「強い風」は、テントなど物を倒し、人を巻き込む場合は危険である。一方、(4)「弱い風」は、物を倒すことはなく、わずかに揺らすぐらいの力しかない。

6.4.1.2 「風」の移動の捉え方

「風」の移動は知覚者によって捉えられる。(5)～(8)は、「風」の移動に対して、様々な捉え方がなされている用例である。

- (5) ロタホールはすごくきれいだけど、それ以外のポイントは劣る。波に弱く、風向きが悪くなるとなかなか潜れなくなる。(BCCWJ: Yahoo!知恵袋)
- (6) 県危機管理課によると、重油は19日に富津市海岸の約5キロにも漂着。貨物船には約400トンの重油が積んであったが流出は続いているとみられ、「風向きによっては、更に他の海岸に漂着する可能性がある」という。(毎日新聞 2014/03/23)
- (7) ヤシの木が好きな方はドラセナも好みます。一般的にドラセナと呼ばれて親しまれていますが、ニオイシュロランです。風当たりが強いと、葉が落とされて枯れたりするので要注意です。(http://www.nakayama-ueki.com/original82.html)
- (8) 瀬戸内海にそって屏風のようにそびえたつ六甲山は、神戸市・芦屋市・西宮市・宝塚市の4つの市にまたがり、高さは最高で931m。まちの背にそびえる緑豊かな山で

す。

つまり阪神間と呼ばれる上の4つの市は、北を六甲山系、南を瀬戸内海にはさまれ、東西に長くのびています。この地域にいる時は、「山のある方が北、海のある方が南」なので東京と違って、方角がわからないということは、ありません。

この六甲山系から冬に吹きおろしてくる冷たくて強い風が「六甲おろし」です。

(http://www.uchihashi.jp/masaya/wind/rokko_oroshi.htm)

「風」自体は直接目には見えないものもあるが、(5)「風向きが悪くなる」と思うように進まなくなるという変化がある。そして、(6)では、予測はできるが、コントロール不能な「風向き」によって流出している重油について述べられている。このように物事の進行に関わる「風」の向きは、常に一定ではなく変わる。「風」の向きによって状況は良くも、悪くも、変わることが分かる。

さらに、(7)では、「風当たりが強い」と、植物であるニオイシュロランを弱らせることが述べられている。「風」が、特定の対象に吹いている状況は、その対象を弱めていることが分かる。(8)の「六甲おろし」は、六甲山系の山から吹くと捉えられる「風」である。知覚者にとってこの「風」は発生源が特定でき、上から下に吹き降ろしてくる強い風として捉えられる。つまり、発生源の特定できる「風」が上から下へ吹いている時、巻き込まれる対象を弱める好ましくない状況として捉えられる。但し、(9)、(10)の人間が作り出した建築物内の「風」は、ある程度は、コントロール可能である。

(9) 二人が考案したのは、古い町屋が並ぶ伊勢市河崎地区への建造を想定した木造二階建ての建築物。編み上げたわらを使用した「わら壁」が特徴で、わらの量で光や風通しを調節でき、香りを楽しむこともできる。(中日新聞 2016/02/05)

(10) 両親は救助を求めに行き、遠藤さんは、足が悪かったすゑのさんの手を取り、隙間から家に入った。外は雪がちらつき、ぬれた体に隙間風が突き刺さった。すゑのさんは全身を震わせながら「和樹、大丈夫か」と気づかせてくれた。うなずくだけで精いっぱいだった。(読売新聞 2016/03/26)

(9)では、「風通しを調節」とあるように、壁のわらの量を調整することで、「風」の入る量を調節することができ、「風」をコントロールできることが確認できる。(10)は、「隙間風」

が冷たいということ共に、「風」の入る量が調節でき、「風」の入る範囲が区切られた、建築物内の「風」であることが分かる。そもそも、隙間が離れているからこそ、「隙間風」が吹くのであり、隙間を埋めることで「隙間風」はなくすことができる。

今までみてきたように、自然界で吹く「風」は、コントロールはできない。しかし、我々は、範囲が区切られた建築物内の「風」に対しては、「風」の通り道や隙間に対し、「風」の入る量を調整することでコントロールでき、快適な状態を保つことができる。

6.4.2 状況領域における「風」の性質

6.4.2.1 「風」の移動と状況の変化

ある目的を有する活動において、状況の変化が「風」の「方向」として捉えられる。ここでは、「風」の移動と状況の変化の関係をみていく。(11)、(12)は、状況の変化が「風」の動きとして捉えられている。

- (11) 世界の政治変化や欧米の金融危機など、物事が非常に変わる年になると覚悟している。

日本でも政府のエネルギー基本計画が見直され、原子力をはじめエネルギー供給のあり方を変えることになれば、ガス事業にも必ず影響する。変化が多ければピンチもチャンスもある。追い風か、向かい風か、いずれにしろ強い風が吹くだろう。製造拠点の海外移転が加速してガスの需要が減るかもしれない。あるいは、海外の混乱を避け、国内にとどまる企業が増える可能性もある。（日本経済新聞 2012/01/20）

- (12) 自民に追い風が吹いている、と言われて戦ってきたが、各陣営の受け止めは違った。

「無風」「そよ風」。当選者たちは、県内全域での圧勝という結果に戸惑い、確たる手応えもないままに、国会議員のバッジを着けることになった。（中日新聞 2012/12/18）

(11)では、ガス事業関連の企業活動にとってエネルギー供給のあり方の変化でチャンスとなり得る要因が「追い風」と捉えられ、ピンチとなり得る要因を「向かい風」と捉えている。そして、どちらの要因も、もたらす変化も大きいため「強い風」と捉えている。さらに、(12)は、政治に対する世論の状況を「風」と捉えられている。世間では、自民党候補者における有利な要因を「追い風」と捉えているが、実際の自民党候補者にとっては、「無風」、「そよ風」としてほとんど実感がなく、状況の変化が感じられないものとして捉えられている。従

って、同じ「風」でも、知覚者が状況の変化が感じられるかによって前/後、強/弱が変わることが指摘できる。

このように、知覚者の活動において、状況が進む要因が存在すれば後ろから吹く「風」として捉えられ、状況が妨げられる要因が存在すれば前から吹く「風」として捉えられる。つまり、状況におけるある要因に対しての評価を「風」の「方向」を通して概念化している。

また、(13)、(14)の例では、「風」は状況として捉えられ、状況の変化そのものが「風向き」の変化と捉えられている。

- (13) 監督は無駄な労力を使わない人で、それを表したのが「一生懸命負けるなよ」という言葉だった。一生懸命にやったあげく、負けるのが一番よくない、風向きが悪いとみたときにはさっさと引きなさい、というのだった。（日本経済新聞 2011/08/25）
- (14) 民主都連幹部の一人は「区議選は『どれだけ歩いたか』が勝負だ。地域に根差した自民党は、どんな風が吹こうと議席を確保してきた。風に振り回される時点で、党も候補者も未熟だ」と戒める。（東京新聞 2011/04/26）

ここでは、「風」の知覚と及ぼす変化に焦点が当たる。知覚者にとって状況が一定ではなく何かの変化が起こることが「風向き」の変化と捉えられる。(13)のように負けそうな好ましくない状況は「風向きが悪い」と捉えられる。間接的に周りの状況を手掛かりに「風向き」をみることによって、ある程度は、状況の変化を予測することはできることが述べられている。また、(14)「どんな風」からも分かるように何らかの状況である「風」は常に吹いている。そして、凌ぐこともでき、振り回されることもある。

このように、常に吹いている「風」の動きは予測できるが、その「方向」がコントロールできないという性質を持つ。以上のように、一定ではなく変化する状況が「風」として捉えられている。

6.4.2.2 「風」の発生と人間の言動

人間関係において状況を変えるものは言動である。言動は知覚者がその場になくても、「風」と同様に人々がいる限りあらゆるところで発生している。つまり、人間が気象現象の

発生源と捉えられ、その言動が「風」として概念化される²¹。本稿では、この概念メタファーを<<言動は風>>と呼ぶ。我々は、人々の言動を外から観察することもできる。しかし、その中に身を置くと巻き込まれてしまう。そこで、(15)、(16)の「風当たり」についてみる。

(15) 佐倉工場の一角に囲いをして、そこを拠点とし FPC プロジェクトは、職場環境こそ恵まれなかったが、技術的には着実に成果を上げていく。しかしながら採算という面では、苦戦続き。1 億円売り上げることと同じくらいの赤字が出るという状況だった。歩留まりが悪く、コストがかさみ、悪循環の中で、次第に社内の風当たりが強くなっていった。

(http://www.fujikura.co.jp/rd/odyssey/vol_04/03.html)

(16) 安心、防災、代替、余力……。震災以降、これらのキーワードを武器に国交省は予算を勝ち取り、事業を拡大。公共事業への厳しい風当たりをかわすため「次なる危機への備え」を前面に打ち出す戦略が奏功した。(日本経済新聞 2012/04/21)

(15)では、赤字が出るという状況に対して、社内に批判が高まり、プロジェクトの関係者にとって悪いと感じられるようになり、「風当たりが強い」と捉えている。対照的に、(16)では、今までの公共事業への世間からの言動である「厳しい風当たり」をかわすために国交省の戦略が打ち出されている。どちらの言動も社内や世間などの不特定多数の発生源からの言動によって作られる好ましくない状況であると言える。

つまり、不特定多数の発生源の言動によって作り出される状況を「風」として捉えていることが指摘できる。「風」は常に吹いているように、不特定多数の人間の言動も止まることはない。一度、その中に巻き込まれると「風」である言動を直接受け、状況が悪くなり「風当たり」として捉えられる。ここでは、「風」の不特定多数の発生源と特定の対象に向けられた場合に及ぼす影響に焦点が当たる。

また、(17)～(22)は、社会的力の上下関係における「風」の発生源と周辺に及ぼす影響に焦点が当たった用例である。まず、(17)～(19)の「先輩風」をみていく。

²¹ 『大辞林』第三版(2006:459)では、「風向き」の③の意味に「人の気分、機嫌。「社長のーがよくない」という意味記述がある。これも、人間を発生源とした「風」が目に見えない影響を周辺に及ぼすという性質を表した言語表現であると言える。

- (17) 先輩は最上級生で、ボール拾いやグラウンド整備、休憩時のお茶くみしかやらせてもらえない1年生にとっては、雲の上の人だった。とても、こちらから話しかけることなど出来るムードではなかっただけに、「つらいだろうが、辛抱しろよ」と声をかけてくれたことを今でも覚えている。中には先輩風を吹かせ、後輩をいじめる人たちもいたが、正晴先輩からは一度も殴られたり、理不尽な命令をされたことがなかった。
(毎日新聞 2001/01/23)
- (18) 「先輩風」はこの時期、職場でよく吹きます。新入社員を前に、盛んにホラを吹く人がいます。かわいらしい女性が異動してくると、それがエスカレートする男性社員もいます。
(<http://www.nikkeibp.co.jp/article/column/20100520/92357/>)
- (19) 店長、数年先にオープンしたというだけで、エラそうに珈琲の淹れ方を伝授したり、ホットサンドについて解説したりしてしまった。先輩風、ビュービュー吹かせちゃった。(<http://nakazumi-cafe.jugem.jp/?eid=630>)

(17)では、先輩から後輩へ、(18)では、先輩社員から新入社員へ、(19)先に開店した喫茶店の店長から開店したばかりの店長へ、先輩のような言動が「先輩風」として捉えられている。そして、(17)では、「先輩風」に吹かれた人が、時に、殴られる、理不尽な命令をされる、などのいじめを受けることが示されている。一方、(18)では、先輩社員のホラを吹くという言動が「先輩風」であり、巻き込まれなければ影響を受けないものとして捉えられている。このように「先輩風」を吹かせることは、間接的に相手を従わせることでもある。

一方、(19)は、「先輩風」を「ビュービュー」と吹かせる様子がオノマトペで述べられた用例である。こうした「風」の強さがオノマトペとしての形式で表れても、その解釈を可能とするのも概念メタファーの働きであると言える。

このように、「先輩風」は、起点領域の気象現象には存在しない言語表現である。同時に、「先輩+風」の語構成からも意味が導き出せない言語表現である。これは、山から吹く風のような発生源が具体的に特定できる「風」を基盤とする言語表現である。

言い換えれば、「先輩風」には、社会的力の上下関係が前提にあると言える。先輩のような言動をする人間を気象現象の発生源と捉える。また、そのような言動を「風」と捉えている。山から吹く風は、上から下に吹き降ろしてくる強い風として捉えられるように、巻き込んだ下の人間に好ましくない影響を与える。

以上から、メタファー表現としての「風」には、巻き込まれる対象への上から下という上下関係である「方向」と目には見えない強い影響という「力」が指摘できる。対照的に、社会的に下の関係の人間からは、社会的に上の関係の人間にこの意味での「風」を吹かせることはできない。これは、<上/下>のイメージ・スキーマが介在するからである。そして、(20)～(22)では、先輩・後輩以外の社会的力の上下関係における「風」をみることができる。

(20) そういえば、若い女性でも、朝のラッシュの時間帯に、駅の階段下やホームなどでう
ずくまっている姿をよく見かける。顔色は真っ青で、どうやら立ちくらみを起こして
いるらしい。

働く女性の先輩としては、放っておけない。「大丈夫?」「誰かに連絡する?」と声を
かけつつ、ついつい「朝ごはん食べてきた?」「ちゃんと寝たの?」などと先輩風、
いや母親風を吹かせたくなる。(読売新聞 2012/11/04)

(21) 安藤氏が部課長ら幹部の資質として挙げるのは(1)県民主役の県政を理解した人(2)
役人風を吹かさない人(3)手もみ(ごますり)しない人—の三つ。人事異
動は遅くても10月ごろまでに実施し、対象は「課長級以上」を視野に入れている。
(毎日新聞 2003/07/31)

(22) ユングが問題視しているのは、「舞台を離れてもその仮面を外せずにいる人」
職場を離れた後も教師風を吹かせて説教じみたことばかり言ってしまうたり、奥さ
んに対してもまるで部下を扱うような態度で指導したりする人はペルソナとの関係
に問題があるのかもしれない。

(<http://www.j-phyco.com/category1/entry4.html>)

(20)では、実際には、先輩や母親ではないものの、他人の若い女性に対して、ある女性が先輩や母親のような言動によって力関係で上の立場になって余計なことをしてしまう様子が「先輩風、いや母親風を吹かせたくなる」と述べられている。また、(21)「役人風」の背景には市民、(22)「教師風」の背景には生徒が存在する。これらの「風」に巻き込まれると、傲慢な態度や説教じみた言動を受けることになる。そして、この「風」は、意図的にも、無意識にも、吹かせてしまうことがある。

しかしながら、市民から役人へ、生徒から教師へ、社会的力関係が逆になる下の関係から上の関係への言動は、「風」とは捉えられない。ここから、社会的力関係において上から下

への影響が存在しなければ、「人+風」の容認度が下がるという制約が指摘できる。

さらに、(23)、(24)では、組織が建築物、その中の人々が発生源で、彼らの言動が「風」として概念化が起こっている。

(23) 私は長年、日本の企業を外から見てきましたが、風通しはどんどん悪くなっていると感じます。正社員が減られ、雇用不安が高まった結果、従業員は自己防衛にきゅうきゅう。(東京新聞 2015/09/12)

(24) 称賛されていたのは、パート店員が事件発覚の端緒だった点。末端の従業員の報告を受け、すぐに本部が調査し、2日後には廃棄物処理業者による不正な横流しを特定した。素早い対応は「組織の風通しが良い証拠」とされた。(中日新聞 2016/03/04)

(23)では、企業という利益という成果を目指す組織が「風通しが悪い」と言動が伝わらず、上手く意思疎通できないことが述べられる。それに対し、(24)では、言動の動きが上手くコントロールされ、意思疎通のとりやすさが企業の「風通しが良い」と捉えられている。この「風通しが良い」ことで廃棄物処理業者による不正な横流しを特定できたことが述べられている。

このように、「風」は成果を目指す組織内に常に吹いている。我々は「風通し」を調整することによって、快適な状態を保てることが、身体経験の基盤となっている。意思疎通をとることによって運営される組織にとって、「風通し」の良さ、悪さが、成果を左右する。従って、成果が問われることがない家庭や趣味のサークルなどの人間の集まりだけでは「風通し」が良い、悪いでは、捉えられず容認度が下がってしまう。つまり、「風通し」は、成果を上げるために意思疎通のとりやすさを変えることによってある程度コントロールすることが可能であると言える。対照的に、(25)～(29)の「風」では、人間や人間の集団との関係の捉え方が変わることが指摘できる。

(25) 母子三人、肩を寄せ合うように生きているが、少しでも気を緩めると、心細くて涙がこぼれそうになる。

世間の風は冷たい。それでもわずかな蓄えでしのいでいる。せめて金利を上げてもらえないだろうか。(読売新聞 2001/05/08)

(26) 抱月は腹を固め、文芸協会幹事を辞任する。加えて早稲田大学教授の職も辞し、妻子

も捨て、世間の冷たい風にさらされながら須磨子との愛、須磨子の女優としての才能に自らの後半生を賭（か）けて突き進んでゆく。

(<http://www.shimintimes.co.jp/yomi/aruku/97.html>)

- (27) 夫婦関係にすきま風が吹き出すと、離婚に発展しかねない。「熟年離婚」という言葉も定着した。(日本経済新聞 2013/11/30)
- (28) 日本の鉄鋼業界と造船業界に“すきま風”が吹いている。日本造船工業会は日本鉄鋼連盟に韓国向けより国内用厚板価格が高い「内外価格差」是正を文章で求めることを決めたが、鉄連の反応はつれない。日本の造船会社は円高で受注商談が苦戦。(日経産業新聞 2011/12/15)
- (29) 9月に訪米した中国の習近平主席は、南シナ海問題でオバマ米大統領と折り合いを付けられず、両国間に隙間風が吹いた。10月に入り、米アトランタで日米をはじめ環太平洋の12カ国は、環太平洋経済連携協定（TPP）に大筋合意した。

(http://www.jiji.com/jc/v4?id=foresight_00162_201511040001)

(25)では、母子家庭の貧困に対して、世間からの言動に愛情を感じられないことが「世間の風は冷たい」と捉えている。(26)でも、職や妻子を捨て、不倫関係を持つ抱月に対する世間からの蔑みを「世間の冷たい風」と捉えている。どちらも、<<優しさはあたたかさ>>が合成されていることが指摘できる。不特定多数の集団である世間という発生源からの言動である「風」を温かさがなく「冷たい」と温度感覚で捉えているのである。

また、(27)では夫婦間、(28)では業界間、(29)では国家間、の二者間の隔たりが「隙間風」として捉えられている。これは、「風」の性質に Grady(1997)の<<INTIMACY IS CLOSENESS>>（親密さは近さ）が関係したメタファー表現である。親密であれば接触しているはずの二者間に隙間が生じている。そこに、「風」が通ってしまうことが問題となる。特徴的なのは、「世間の風」はコントロールできないが、「隙間風」はコントロールしようとするのが可能である。つまり、「世間の風」は不特定多数であるが、「隙間風」においては、その二者間の隙間と捉えられる原因に対して、何か対策を講じてその隙間を埋めることができる。そこが、不特定多数・二者間の言動で、「風」のコントロールのしやすさの違いに表れている。

6.5 本章のまとめ

本章では、<<状況は天候>>において、「風」の現象の構成要素として「方向」・「力」を持つことを提示した。「方向」には、前/後・上/下、「力」には、強/弱が存在する。また、風は発生源から吹く、風は方向を変える、風は知覚者によって捉えられる、風は吹いた後に何らかの影響を及ぼす、という性質を持つ。これらの性質が時間的展開に基づき一連の構造を形成する。

知覚者の活動において、状況が進む要因が存在すれば後ろから吹く「風」として捉えられ、状況が妨げられる要因が存在すれば前から吹く「風」として捉えられる。つまり、状況におけるある要因に対しての評価を「風」の「方向」を通して概念化している。この場合、前/後という「方向」に焦点が当たり、「方向」は一定ではなく常に変化する。

そして、人間を「風」の発生源と捉えるメタファー表現の基盤についても考察した。我々は、<<状況は天候>>の影響を受け、不特定多数の発生源の言動によって作り出される状況を「風」として捉えていることも指摘した。この概念メタファーは<<言動は風>>として生産性を持つ。「風」は常に吹いているように、不特定多数の人間の言動も止まることはない。一度、その中に巻き込まれると「風」である言動を直接受け、状況が悪くなり「風当り」として捉えられる。一方、「先輩風」は、先輩のような言動をする人間を気象現象の発生源と捉えることによって生まれる言語表現である。このメタファー表現は、人間関係における社会的力の上下関係が前提にある。「先輩風」に巻き込まれる対象への上から下への「方向」、目には見えない強い影響である「力」によって構成されている。対照的に、社会的に下の関係の人間からは、社会的に上の関係の人間にこの意味での「風」を吹かせることはできないという制約となる。なお、この上/下という「方向」は、知覚者の身体の向きと関係なく「風」は気圧の高いところから気圧の低いところへ吹き続けるという身体経験によって変わることはない。

さらに、「風通し」「世間の風」「隙間風」においては、組織内・不特定多数・二者間の「風」の捉え方の違いを指摘した。これらの言語表現は<<状況は天候>>、<<言動は風>>だけではなく複数の概念メタファーとの関係も明らかにした。意思疎通をとることによって運営される組織にとって、「風通し」の良さ、悪さが、成果を左右する。従って、成果が問われることがない家庭や趣味のサークルなどの人間の集まりだけでは「風通し」が良い、悪いでは、捉えられず容認度が下がってしまう。「世間の風」では、「風」の性質に<<優しさはあたたかさ>>が合成されていることを指摘した。不特定多数の集団である世間という発生源からの

言動である「風」を温かさがなく「冷たい」と温度感覚で捉えているのである。「隙間風」は、「風」の性質に<<親密さは近さ>>が関係したメタファー表現である。親密であれば接触しているはずの二者間に隙間が生じている。そこに、「風」が通ってしまうことが問題となる。「世間の風」はコントロールできないが、「隙間風」はコントロールしようとする事が可能である。つまり、「世間の風」は不特定多数であるが、「隙間風」においては、その二者間の隙間と捉えられる原因に対して、何か対策を講じてその隙間を埋めることができる。それが、不特定多数・二者間の言動で、「風」のコントロールのしやすさの違いに表れている。

以上のように、我々は、社会情勢や人間関係などの様々な状況の変化をメタファー表現の「風」を通して理解している。その概念化には、「風」自体の性質と複数の概念メタファーが関わっていることを明らかにした。

第7章 「嵐」と「台風」に関するメタファー表現

7.1 はじめに

「嵐」と「台風」は、日本において頻繁に経験する気象現象である。我々は、激しい雨と風をもたらす移動を伴う気象現象に対して「嵐」と呼び、その中でも特定の条件を満たすものを「台風」と呼んでいる。つまり、「台風」は「嵐」の一種であると言える。

しかし、「嵐」と「台風」は、メタファー的に共に変化を表しながら、その性質は異なる。

「嵐」は、次々に現象が起こることを表す「賞賛の嵐」「落胆の嵐」などプラス・マイナス両方の評価性、現象の激しさを表す「感動の嵐」「怒りの嵐」などプラス・マイナス両方の評価性、現象が引き起こす被害を表す「リストラの嵐」「不況の嵐」などマイナスの評価性のよう、プラス・マイナスの両方の評価性の意味に解釈される。一方、「台風」は、「(人・組織)＋台風」、「台風の目」など被害をもたらす大きな変化の発生源としてマイナスの評価性である脅威を伴い解釈される。

つまり、気象現象という同領域内の「嵐」と「台風」が、メタファーの意味において評価性に違いが生じている。これは、それぞれの気象現象が持つ固有の性質の捉え方が影響を与えているからであると主張する。本章は、「嵐」と「台風」という2つの気象現象の性質を比較し、メタファーの意味の動機づけを明らかにすることが目的である。

7.2 「嵐」と「台風」の定義と関係性

本節では、「嵐」と「台風」の定義と両者の関係性について確認する。最初に、気象庁のHPをみると、気象現象における「台風」の定義について次のように記されている。

熱帯の海上で発生する低気圧を「熱帯低気圧」と呼びますが、このうち北西太平洋（赤道より北で東経180度より西の領域）または南シナ海に存在し、なおかつ低気圧域内の最大風速（10分間平均）がおおよそ17m/s（34ノット、風力8）以上のものを「台風」と呼びます²²。

²² 気象庁「台風」(<http://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/typhoon/1-1.html>)
(最終アクセス日 2015/08/21)

我々は、「低気圧」の中で上記の条件を満たすものに対して、「台風」と呼んでいる。「嵐」と「台風」は、「低気圧」によってもたらされるという点では共通する。しかし、「嵐」は気象庁の HP に記述はなく、正式な気象学の用語ではない。「嵐」は、雨と風が伴う現象自体を指すのである。その点では、「台風」は「嵐」の一種であると言える。

次に、辞書における「嵐」と「台風」の意味記述についてみていく。『大辞林』第三版(2006)では、以下のように記されている。

・あらし [嵐]

①激しく吹く風。暴風。烈風。

②激しく荒れ狂う風雨。暴風雨。

③（比喩的に）事件や騒ぎ。また、感情のゆれ。 「学園紛争の一もやっと静まった」
「激しい感情の一」

[句]

嵐の前の静けさ

大事件の起こる前の、少しの間の不気味な静けさ。

（『大辞林』第三版(2006): 81）

・たいふう [台風・颱風]

北太平洋の南西部に発生する熱帯低気圧のうち、最大風速が毎秒 17.2 メートル以上に発達したもの。直径数百から千キロメートルほどの渦巻で、風は中心に向かって反時計回りに吹き込む。風速は中心から数十キロメートル離れたところが最大で、中心では静穏になっていることが多い。また、進行方向に対して右側が強い。 [季] 秋。

（同上: 1518）

・たいふうのめ [台風の目]

①台風の中心部で、直径数十キロメートルほどの風の静穏域。台風眼。

②激動する物事の中心にいて、影響を与えている勢力や人物。

（同上: 1518）

ここでは、「嵐」のメタファー的意味の記述において、③「事件・騒ぎ・感情のゆれ」という性質の異なる現象が一緒に記述されており、「賞賛の嵐」「感動の嵐」「リストラの嵐」

では意味や評価性が異なることに言及はない。

また、「台風」については、メタファー的意味の記述はない。その代り、メタファー的な言語表現である「台風の目」が見出し項目として記述されている。「台風の目」については、三好(2010)において次のような記述がある。

日本語の気象学用語である「台風眼」に関しては、外国語（英語）の専門用語からの訳語である可能性が高い。とはいえ、この専門用語と等価の一般語である「台風の目」が「台風眼」から発展した語形であるとしても、一般語（「台風の目」）における外国語の直接的な影響があったとは言えない。外国語から一段階（「台風眼」）を経て成立しているからである。

三好(2010:15)

ここから、日本語の「台風の目」のメタファー的意味については外国語からではなく日本語において意味の拡張が起こった可能性が示唆される。しかし、辞書における「台風」のメタファー的意味についての言及は不十分であり、動機づけについては明らかになっていない。

7.3 行為者としての気象現象

自然現象は行為者として擬人的に捉えられることが知られている。Grady(1997)では、<<EVENTS ARE ACTIONS,INANIMATE PHENOMENA ARE HUMAN AGENTS>>（出来事は行為、無生物の現象は人）が提案されている。また、瀬戸(1995b)において、以下のように「台風」が擬人法的に捉えられることが指摘されている。

たとえば、台風について考えてみよう。すると、ほとんど擬人法以外で考えることが不可能であることに気付く。「台風の目」(the eyes of typhoon)という表現にかぎられない。台風は、「成長」し、「ゆっくりと北上を続け」、本土を「窺い」、ついには「上陸し」、各地で「暴れ回り」、「相当な被害をもたらし」、ようやく東の海上に「去っていく」のである。「暴風雨」の「暴」や台風の「つめ痕」という表現からすれば、台風は凶暴な猛獣に見立てられているというほうが正確であるが、これも広い意味での擬人法的メタファーであると見なしてよいであろう。

だが、「嵐」は「台風」同様に「襲う」ことはあっても、「台風」のように「成長する」や「暴れ回る」など猛獣としては捉えられにくい。言い換えれば、「嵐」は「台風」と異なり、猛獣の性質を持ちにくい。その点では、「嵐」と「台風」は、擬人法的に捉えられる点では共通するものの、性質の異なる捉え方がされている。

一方、黒田(2005)では、社会的災害を自然災害として捉える「襲う」の評定実験を行い、分析がなされている。黒田は、メタファー表現としての{xは<嵐>である}の意味制約を自然災害が被害者を襲う状況記述の視点で以下のように記述している。

a. xが起こっているあいだは、被害者 y には<見通しが利かない>、<下手に動くとは危険な状態>が続く。

b. y の最善の対処法は、それが<過ぎ去るまで待つ>ことで、その際、<身になるべく小さく屈め>、<その場にじっとしている>のが被害を最小限にするためには望ましい。

{台風、大雪、吹雪}は<嵐>の特殊な場合である。

xは人為性の高い災害である傾向が強いが、これは元領域の嵐から継承される特徴ではなく、先領域に特有の特徴である²³。

黒田(2005:54)

だが、黒田の研究は社会的災害を自然災害として捉える「襲う」だけが対象となっており、他の言語表現を対象としていない。実際には、「嵐」も「台風」も「襲う」以外とも共起し、「嵐の前の静けさ」、「台風の日となる」のようにそれぞれ固有の言語表現を持ち、メタファー的にも性質が異なる。本章は、「嵐」と「台風」のメタファー表現の性質を実例に基づいて分析していく。

²³ 「赤狩り」「粛清」「リストラ」「改革」「インフレ」などが「嵐」との共起で容認度の高い社会災害 x として挙げられている。また、「襲う」対象が「国」「地域」「人」の場合、「嵐」よりも「台風」との共起で容認度が高いということから目標領域において特有の特徴があることが示されている。

7.4 気象現象と評価性

良い天気、悪い天気など、それぞれの気象現象は、評価性が伴う。例えば、久野(1973)においても、災難、被害を表す場合には「にあう」が用いられるが、良いことを表す場合には用いられないことが指摘されている。

- (1) a. 嵐/吹雪/ヒドイ目/悲シイ目ニ会ウ。
b. *ソヨ風/*オ天気/*嬉シイ目ニ会ウ。
cf. 嬉シイ目ヲスル。

久野(1973:64,表記は原文ママ)

それについて、鍋島(2011)では、問題などマイナスの評価性を持った出来事が<敵>と捉えられる<敵>メタファー²⁴が提唱されている。マイナスの評価性を持った出来事の「あう」の使用が自然になるのは、それが敵対者に見立てられるためであるという可能性が指摘されている。

確かに、「嵐」と「台風」は、共に「あう」と共起ができる。だが、「嵐」の場合は、「リストラの嵐」のような用例ではマイナスの評価性はあるものの、「賞賛の嵐」「感動の嵐」においてはプラスの評価性にしか解釈されない。また、「台風」の場合は、巻き込む対象を脅かすマイナスの評価性を持つものとししか解釈されない。このように、「嵐」と「台風」にも、メタファー的意味の解釈に評価性が関わっていることが示唆される。

7.5 「嵐」と「台風」の考察

本節では、起点領域である身体経験における「嵐」「台風」の性質を考察した後、目標領域である状況における「嵐」「台風」のメタファー的意味を実際の用例を基に考察する。

7.5.1 気象現象における「嵐」「台風」の共通点

ここでは、気象現象における「嵐」と「台風」の共通点を確認していく。(2)～(5)は、身体経験における「嵐」と「台風」に共通の性質があることを示す。

²⁴ Lakoff(1993)、Grady(1997)においても同様に<< DIFFICULTIES ARE OPPONENTS>> (困難は敵)が提唱されている。

- (2) 春のものすごい嵐がやってきた！ 外は風がごうごう 雨はざあーざあー 明日は終日 海はぐちゃぐちゃ間違いなし！
- (3) 台風の接近に伴い暖かく湿った空気が流れ込むため、西日本から東北の広範囲で十五日から十六日にかけて大雨や暴風、高波に警戒が必要だ。(東京新聞 2013/09/15)
- (4) {嵐/台風}が襲来する。
- (5) {嵐/台風}に巻き込まれる。

(2)からは、「嵐がやってくる」と、激しい雨と風がもたらされることが分かる。つまり、「嵐」は移動しながら、雨や風など激しい現象を引き起こす。(3)の「台風」も、「接近」と捉えられるように、移動しながら、「大雨」「暴風」「高波」を引き起こす。どちらも、人間にとって経済的損失や命の危機に瀕するような被害につながる。「嵐」と「台風」は、人間にとって被害をもたらす、コントロールできない存在である。

さらに、(4)において、「襲来する」と共起し、好ましくないものとしてマイナスの評価性で捉えられているのが分かる。(5)になると、「嵐」と「台風」が知覚者を巻き込む対象として捉えられている。これには、「嵐」と「台風」の被害をもたらす性質が関わっていると考えられる。今までの考察から気象現象における「嵐」「台風」の共通点をまとめると表 7-1 のようになる。

表 7-1 気象現象における「嵐」「台風」の共通点

嵐と台風の共通点
①移動を伴い現象を引き起こす。
②人間にとってコントロールできない存在である。
③知覚者が巻き込まれると被害を受ける。

7.5.2 気象現象における「嵐」「台風」の相違点

「嵐」と「台風」は、共通点も多いが、各々に固有の性質を持っている。(6)～(10)からは、「嵐」が固有に持つ性質が指摘できる。

- (6) 嵐の前の静けさ、そして突然風が吹き始めると要注意。空が一変して暗くなっていく。
公園で遊んでいた人たちも、みんな急ぎ足で帰っていく。
(http://www.tokaiedu.co.jp/kamome/contents_i214.html)
- (7) あす 20 日(月)は、全国的に雨や風が強まって春の嵐となりそうです。特に西日本や東

日本の太平洋側を中心に非常に激しい雨が降り、大雨となるおそれがあります。低い土地の浸水や河川の増水、強風や高波などに注意・警戒が必要です。

(<http://weather.yahoo.co.jp/weather/video/?c=36873>)

- (8) 春の嵐となっています。帰宅時間は、東海、関東、東北で、激しい雨が降るでしょう。太平洋側では局地的に非常に激しく降ることも。風も強まる。

雨や風が強まる期間をまとめました。東海地方にはすでに活発な雨雲がかかっています。このあと、あすの未明にかけて、激しい雷雨があるでしょう。帰宅時間にかけてがピークとなる見込みです。今夜遅くにかけて、突風が吹くおそれもありますので、あわせて注意・警戒を。

(<http://www.tenki.jp/forecaster/diary/naraokakimiko/2015/04/20/23321.html>)

- (9) 昨日の嵐もおさまり、春らしい陽気で包まれた 4/13(日)。

(<http://www.netz-sendai.jp/baseball/2014/news.html>)

- (10) 母と子の森外周のラクウショウの足元では、オオアマナ類がみごろをむかえました。春の嵐が過ぎ去った後、晴天が続いていますが、今日もからっと晴れ、雲一つない良いお天気になりました。(<http://fng.or.jp/shinjuku/news/place/place-view-spring/>)

(6)において、「突然風が吹き始める」「空が一変して暗くなっていく」前の状況を「嵐の前の静けさ」と捉えている。我々はこの静けさの後に天気が一変することを経験している。(7)では、「春の嵐」が、「大雨、土地の浸水、河川の増水、強風、高波」など次々に様々な現象を引き起こすことが述べられている。ひとたび、「嵐」になると、様々な現象が起こり、その被害さえも予想できないことが分かる。言い換えれば、「嵐」がもたらすどの現象が具体的な被害につながるかも把握できない。

さらに、(8)の「雨や風が強まる」や「ピークとなる」とあるように、「嵐」の雨や風は一定ではなく徐々に強まり、ピークに達する。このような身体経験によって、我々は、「嵐」がもたらす雨や風を激しいものとして捉えている。

また、(9)では、雨や風がやむことを「嵐がおさまる」と捉えている。(10)においては、「嵐が過ぎ去った後」に、元のように晴れることが述べられている。

つまり、嵐が起こる前は静かな状態である、嵐は次々に様々な現象を引き起こす、嵐がもたらす現象は一定ではなく徐々に強まってピークに達する、嵐に知覚者が巻き込まれると被害を受ける、嵐がおさまると現象が止む、嵐が過ぎ去ると元の状態に戻る、という性質が

指摘できる。「嵐」のこれらの性質は現象の時間的展開によって結び付いていると言える。

一方、「台風」の場合は、「嵐」より移動物として特定しやすいということが指摘できる。

(11)～(14)では、「台風」が固有に持つ性質をみていく。

- (11) 台風の進路は、気象庁が5日先までの予報を発表する。自分の住む地域で風雨が強まる日時をおおまかに把握して▽不要な外出は控える▽家の周りの片づけや見回りは天候が崩れる前に済ませる—といった工夫をしよう。(読売新聞 2012/08/26)
- (12) 台風12号：居座り台風、被害拡大 岡山・玉野全域の6.5万人に避難勧告(毎日新聞 2011/09/03)
- (13) 県は27日午後3時現在の台風15号による被害状況を発表した。各市町村で被害確認が進み、けが人は8人、住宅被害は三島村・黒島の全壊3棟を含む218棟に増えた。文化財にも影響が出ており、県などでは対応を検討している。(読売新聞 2015/08/28)
- (14) 台風の目の中に入った経験、皆さんはお有りだろうか。筆者は中学生だった30年ほど前に1回だけある。暴風雨に見舞われていたが、突然雨も風もやみ、日も差してきた。もう、台風は通過したのかな?と思っていたら、にわかにかき曇り、再び風雨が襲ってきた。後から、それが台風の目だと知った。(毎日新聞 2011/09/24)

(11)では、「台風の進路」とあるように進路の予想ができ、対策を考えることができることが指摘できる。そして、(12)は、動きが遅い台風である「台風」が「居座る」という人間の行為として捉えられている。(13)においては、台風がもたらす被害の範囲が広く、人命を脅かす、建築物や文化財なども破壊するなど、甚大であることが述べられている。

一方、(14)は、「台風の日」に関する経験が話者から語られている。「台風の日」の下に入ると、雨や風が止み、台風が通過したかのような状態になる。だが、「台風の日」を抜けると、再び雨風が襲ってくる。知覚者にとって「台風の日」の内では雨風が止み、外では雨風が起こると捉えられる。

以上のように、「台風」は、進路が予想でき、移動の速度があり、被害も甚大である。これらの性質を持つため、「台風」は実体をもつ移動物として把握され、現象を起こす発生源として捉えやすい。このことは、「台風」や「台風の日」は天気図などで図示することができるが、「嵐」にはそれはできないことから言える。今までの考察から「嵐」「台風」が持

つ性質の相違点をまとめると表 7-2 のようになる。

表 7-2 気象現象における「嵐」「台風」の相違点

嵐と台風の相違点	
嵐	台風
①次々に様々な現象を引き起こす。	①実体があるため進路が明確で予想できる。
②現象は一定ではなく徐々に強まってピークに達する。	②実体のあるものとして図示できる。
③現象の時間的展開がある。	③被害の範囲が広い。

7.5.3 メタファー的意味における「嵐」「台風」

「嵐」「台風」に関する身体経験は、状況の変化として概念化される。ここでは、身体経験とメタファー表現としての「嵐」と「台風」の写像関係をみていく。

まず、(15)～(19)は、「嵐」の次々現象が起こるという性質に焦点が当たった用例である。

- (15) 登山電車は次の上大平台信号場で3度目のスイッチバック。発車すると水色や紅色、紫色の花が車窓をかすめた。「アジサイだ!」。女性客の声があがり、カメラのシャッター一音の嵐。箱根登山鉄道一の「あじさい銀座」に差しかかったのだ。(日本経済新聞 2012/06/27)
- (16) 確かに、進学校である浦和高校では、当然、それなりの受験のテクニックを教える必要はあるのですが、生徒が求めているものは、知的好奇心をくすぐるような授業や、学問としての英語の奥深さを追求するような授業だったのです。ですから、授業はいつも質問の嵐でした。(https://www.beret.co.jp/column/59.html)
- (17) チャイコフスキーの5番の演奏が終了したそのとき、会場全体は賞賛の嵐に包まれた。(http://hajime.halfmoon.jp/hirokyou2010.html)
- (18) 福山雅治の結婚によって日本中の女に悲鳴と落胆の嵐が吹き荒れていますが男の方もショックは大きい(女程ではないにせよ)のではないのでしょうか?
独身の中年男にとって心の拠り所だった彼が結婚してしまった事によって結婚への焦りやプレッシャーが再燃しているのではないのでしょうか?
(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q10150905215)
- (19) 大阪府内の男性(64)は毎週、自助グループに通う。
「パチンコ、競馬、競艇。1日1回は行かんとおさまらんかった。大きな家が建つぐらいつぎ込んだ」。給料の額を家族にごまかし、消費者金融からも借りた。発覚して、死

んでしまえ、と怒られた。もうやりませんという誓約書を何度も書いた。その時はやめようと思う。でも叱責の嵐が過ぎると、また手を出す。(読売新聞 2014/09/21)

(15)の場面において、女性客が「アジサイ」に気づき、次々に押されるカメラのシャッター音が「シャッター音の嵐」として捉えられている。(16)「質問の嵐」でも、授業中に次々と教室内で生徒から挙がる質問が「質問の嵐」として捉えられている。また、(17)の場面では、演奏が終了した時の会場から次々起こる賞賛が「賞賛の嵐」として述べられている。また、(18)において、福山雅治の結婚が原因で日本中の女性が次々に起こる「悲鳴と落胆」が「悲鳴と落胆の嵐が吹き荒れる」と捉えられている。プラス・マイナス両方の評価性で「嵐」が次々起こる現象として捉えられていることが指摘できる。

さらに、(19)では、「パチンコ、競馬、競艇」に依存する男性も、続けざまに家族などから叱責されることを「叱責の嵐」と捉えている。そして、その叱責がおさまることが「叱責の嵐が過ぎる」と述べられており、「嵐」の次々現象が起これば、ピークに達して、いつかはおさまるという性質が表れている。

次に、(20)～(22)は、「嵐」が激しさとして捉えられる用例である。

(20) 今回のメインは富士五湖めぐり。山中湖から始まり、河口湖、西湖、精進湖、本栖湖を2日かけて見て回った。

期待していなかったのに、朝、旅館の窓から突然雄大な富士の姿を目にしたときは、ただただ感激の嵐だった。しっかり脳裏に焼き付けて、今度また再会できることを願って、帰途に就いた。(毎日新聞 2007/12/15)

(21) Kスタ宮城で、幼稚園に通う息子と応援していた仙台市若林区、主婦熊谷知美さん(45)は「感動の嵐です。きょうの試合は途中まで優勝は無理だと思ったが、マー君が最後を締めてくれて本当に格好良かった」と話した。(読売新聞 2013/09/27)

(22) 感情のパワーはものすごいもので、時にあなたの体も簡単に支配してしまいます。失敗してしまった恥ずかしさでパニックになったり、激しい怒りを感じたり、自分だけ独りぼっちだという孤独感にとらわれてしまったり。あまりに強い感情の嵐で、体が動かなくなったり、震えてきたり、動悸が止まらなくなることがあります。

(http://sukupi.com/human_relations/12268/)

これらの用例では、「嵐」がもたらす現象が一定ではなく徐々に強まり、ピークに達することが激しさとして概念化されていることが分かる。富士の姿を目にした時の次々起こる感激を表す(20)「感激の嵐」、野球チームが優勝したことによる感動を表す(21)「感動の嵐」のようにプラスの評価性の激しい感情の変化が「嵐」として捉えられている。(20)においては、期待していなかったのに富士の姿を目にしてピークに達した感情、(21)においては、優勝までに至る過程への様々な出来事に対する感情、など単に激しさだけではなく次々に感情が高まるということも含んでいる。また、(22)では、「恥ずかしさ」「怒り」「孤独感」というマイナス評価の感情の激しさが「嵐」として捉えられている。この例でも、次々に感情が高まっていることが確認できる。

ここでは、プラス・マイナス両方の評価性で感情の激しさが「嵐」として捉えられていることが指摘できる。感情も一定ではなく徐々に強まり、ピークに達する性質が表れている。これは、(15)「シャッター音の嵐」、(16)「質問の嵐」がプラス・マイナス両方の評価性関係なく現象が起こる状況を表すことを基盤としている。つまり、(20)～(22)で表しているのは、次々起こる感情の状況の変化そのものである。そのため、単に「感激の嵐」「怒りの嵐」では感情そのものではなくプラス・マイナス両方の評価性で激しい感情の変化自体が解釈される。以上を踏まえると、これは、<<感情は天候>>ではなく、<<状況は天候>>の影響を受けたメタファー表現であると考えられる。さらに、感情に関する「嵐」のメタファー表現の場合、鍋島(2016)で提唱されている<<精神的影響は物理的接触>>との合成が指摘できる。換言すれば、「嵐」が次々起こす現象の物理的接触が、プラス・マイナス両方の評価性で感情の激しさである精神的影響として概念化が起こっているのである。

そして、(23)～(25)の用例では、「嵐」に知覚者が巻き込まれると被害を受けるという性質が言語表現に表れている。

(23) かつて日本経済の柱の一つだった電機業界に、やむことのないリストラの嵐が吹き続けている。早期退職募集人員は合計で1万人を上回る。「電子立国・日本」を支えてきた優秀な技術者たちの身に何が起き、彼らは今どこへ行こうとしているのか。(日本経済新聞 2013/12/13)

(24) 人員削減も深刻で、NECが国内外で正社員を含む二万人、ソニーが一万六千人を削減。各社の正社員や非正規従業員の削減・配転計画は、合計約六万八千人に達することになる。しかし、各メーカーとも不況の嵐が通過するまで身を縮めて待つだけでは、

次の成長は期待できない。(中日新聞 2009/02/23)

- (25) 愛知県一宮市生まれ。東京の大学に進んだが、学生運動の嵐が去ったキャンパスは、
しらけムードが漂っていた。そんな中、夏休みに名古屋で照明のアルバイトをし、ス
タッフの生き生きとした仕事ぶりに新鮮さを覚えた。(東京新聞 2012/03/02)

(23)では、電機業界で相次いでリストラが起こることを「リストラの嵐」と捉えている。
この「嵐が吹き続ける」ことで技術者たちが職を失うなどの被害を受けることになる。その
一方で、(24)のように「不況の嵐」の通過を「身を縮めて待つ」という捉え方もされる。(25)
では、当時、全国的に次々に起こった学生運動の終息を「学園運動の嵐が去った」と述べら
れている。

これらは、「嵐」に知覚者を巻き込まれることで、被害を受けることを基盤にしている。
知覚者は「嵐」に巻き込まれることで、次々と好ましくないことが起こる。つまり、知覚者
を巻き込む「嵐」が、好ましくない変化として捉えられている。

さらに、(26)、(27)は、「嵐」の時間的展開を通して状況の変化を「嵐」として捉える用
例である。

- (26) トヨタ自動車が11日発表した2010年3月期連結決算は2期ぶりに黒字を確保
した。ただ、大規模リコール(回収・無償修理)問題は完全には収束していないうえ、
販売を支えたハイブリッド車「プリウス」の新車効果も一巡する。本格的な業績回復
には、新興国市場の開拓など新たな成長戦略が欠かせない。(中部経済部 戸塚光彦、
小嶋伸幸 本文記事2面)

「まだ嵐の中にいるが、遠くに晴れ間も見えてきた」

豊田章男社長は11日の記者会見で、安堵(あんど)の表情を浮かべた。(読売新聞
2010/05/12)

- (27) 小泉純一郎元首相が郵政民営化や規制緩和などを進めたころは、嵐の前の静けさだっ
たのだ。世界的な不景気の影響も手伝って、嵐は起きた。強者のための政治が「生活
の痛み」をさらに弱者へとかぶせていった。働く仕組みも変わり、非正規雇用労働者
が増えた。(毎日新聞 2009/01/26)

(26)において、トヨタ自動車の業績が好ましくないことを「嵐の中」と述べ、「黒字」に

よって見通しがきいてきたことを「晴れ間が見えてきた」と捉えている。(27)では、「小泉政権の郵政民営化や規制緩和などを進めたころ」を「嵐の前の静けさ」と表し、「世界的な不景気の影響」が要因の一部となって、次々起こった政治・経済の混乱を「嵐」と捉えている。その結果、「非正規雇用労働者が増える」など好ましくないことが起こったことが述べられている。

このように、「嵐」の時間的近接性を通して状況の変化を理解されているのが確認できる。「嵐」の時間的近接性から好ましくないことが次々起こる状況の変化として捉えていることが指摘できる。

一方、「台風」は、被害をもたらす脅威として捉えられている。まず、(28)、(29)の「台風の日」に関する用例をみていく。

(28) 初日のハイライトは鶴竜対嘉風の取り組み。立ち会いから激しい突き押しで前に出た嘉風が、圧力に退いてしまった鶴竜を一気に土俵下まで突き飛ばした。大分県出身のご当地力士でもある嘉風の活躍に場内は沸いた。

秋場所では 2 横綱、2 大関、2 関脇を破った嘉風。今場所も台風の日になりそうだ。
(<http://cyclestyle.net/article/2015/11/09/29589.html>)

(29) 民主、自民、公明など中央政党は大阪維新の会との関係づくりに腐心している。衆院選の台風の日とみて接近を試みるが、政策や手法に振り回される警戒感もある。橋下徹市長の出方に加え衆院解散時期も見通せず、慎重に間合いを探る。(日本経済新聞 2012/05/04)

(28)は、相撲における嘉風の幕下力士である嘉風が 2 横綱、2 大関、2 関脇を破った活躍について述べられている。相撲で格上の力士を破る変化を起こす嘉風について、話者が「台風の日」と捉えている。また、(29)では、民主、自民、公明などの「中央政党」からみて大阪維新の会が「台風の日」として捉えられている。「台風の日」である大阪維新の会が大きい変化を起こす存在として捉えられ、「中央政党」を振り回す脅威となっている。

言い換えれば、変化を起こす大きな力の発生源が「台風の日」である。知覚者にとって、大きな変化を起こし、マイナスの評価性である脅威の対象となった発生源が「台風の日」として捉えられるのである。そこで、(30)～(32)の「(人・組織) + 台風」の用例を考えてみる。

- (30) 「公共事業は減り、業界としての要望や陳情が極めて難しくなる」。山梨県建設業協会の幹部はため息をつく。同協会は衆院選で県内3小選挙区の自民候補を推薦したが、猛威を振るった「民主台風」を前に全滅。3人とも比例復活の道も絶たれ、県内公共事業を支えた後ろ盾を失った。(日本経済新聞 2009/09/08)
- (31) 一方、敗れた前田雄吉さん(民前)は比例で復活当選し「小泉台風が吹き抜ける中で
の今回の当選がこれまでで一番うれしい」と笑顔を見せた。柳沢けさ美さん(共新)
は、共産支持層以外に浸透しきれなかった。(中日新聞 2005/09/12)
- (32) 石原氏は5日の定例記者会見で、新党について、「急転直下、どうなるか分らんね。
人生何が起こるか分らんよ」と述べ、新党の可能性を探っていることをにじませた。
実際、石原氏は尖閣諸島が国有化された9月中旬以降、たちあがれ日本の平沼代表、
園田幹事長らと頻繁に会合を開き、新党の具体化を進めているという。
「維新の会」代表の橋下徹大阪市長との連携にも依然意欲を見せ、「新党ができれば、
衆院選の台風がもう一つ増える」(自民党関係者)との指摘は少なくない。たちあがれ
日本には、「新党が結成されれば、立候補したい」との希望者も相次いでいる。(読売新
聞 2012/10/09)

(30)において、自民党陣営からみた民主党を「民主台風」と捉え、猛威を振るわれ、全滅させられたとまで述べられている。一方、(31)は、民主党候補からみた小泉党首を「小泉台風」として捉えて、「吹き抜ける中」という捉え方がされている。ここでは、民主党候補からみて脅威となる変化を起こす大きな力を持つ存在として小泉党首が「台風」と捉えられている。(32)では、自民党関係者からみた衆議院選挙の状況が述べられている。「維新の会」を「台風」とみなし、さらに石原氏が作ろうとしている新党に対しても「台風」と捉えている。

「台風」の性質を考えると、その存在を図示できるように移動物として実体を持っている。また、被害の範囲も広い。これらが基盤となり「台風」は、脅威となる大きな変化を起こす発生源として概念化されるのである。

7.6 本章のまとめ

本章では、気象現象という同領域にある「嵐」と「嵐」の一種である「台風」をそれぞれが持つ固有の性質という観点から考察した。「嵐」と「台風」は<<状況は天候>>において、

メタファー的に共に状況の大きな変化を表すがその性質は異なる。「嵐」は状況の変化そのものを表すのに対し、「台風」は脅威となる大きな状況の変化の発生源を表す。

そこには、「嵐」と「台風」が固有に持つ性質の違いが指摘できる。この性質の違いがメタファーの意味にも影響を与えている。

「嵐」は、嵐が起こる前は静かな状態である、嵐は次々に様々な現象を引き起こす、嵐がもたらす現象は一定ではなく徐々に強まってピークに達する、嵐に知覚者が巻き込まれると被害を受ける、嵐がおさまると現象が止む、嵐が過ぎ去ると元の状態に戻る、という性質が指摘できる。「嵐」のこれらの性質は時間的展開によって結び付いている。「嵐」が知覚者を巻き込む以前の段階では、プラスの評価性・マイナスの評価性の両方に捉えられる。そして、「嵐」は、プラスの評価性・マイナスの評価性関係なく次々現象が起こることを表す。また、次々現象が起こることが基盤となり、感情の状況の変化の激しさそのものを表すため「感動の嵐」「怒りの嵐」といった感情に関するこれらのメタファー表現も<<感情は天候>>ではなく、<<状況は天候>>の影響を受けたメタファー表現であると考えられる。さらに、感情に関する「嵐」のメタファー表現の場合、<<精神的影響は物理的接触>>との合成が起こることを指摘した。換言すれば、「嵐」が次々起こす現象の物理的接触が、プラス・マイナス両方の評価性で感情の激しさである精神的影響として概念化が起こるのである。

一方、「嵐」に知覚者が巻き込まれた場合、被害を受けるためマイナスの評価性を伴う。

それに対し、「台風」は、このような性質を持たない。「台風」は、存在を図示できるように移動物として実体を持っている。また、被害の範囲も広い。知覚者を巻き込むマイナスの評価性である脅威の対象として伴い解釈される。これらが基盤となり「台風」は、脅威となる大きな変化の発生源として概念化される。

第8章 結論

8.1 本稿のまとめ

本稿は、現代日本語における気象現象に関するメタファー表現を個別的に分析することで、その概念化のプロセスを明らかにした。また、気象現象を起点領域とするメタファー表現の「まだら」問題の要因となるものとして、現象の構成要素と各々の気象現象の捉え方がメタファー的意味の実現に影響を与えていることを示した。

第1章では、本稿の研究の動機と目的を述べ、本稿の考察の対象と本稿が提案する「現象の構成要素」について提示した。

第2章では、認知言語学における概念メタファー理論に至るまでのメタファーの研究史を振り返った。次に、概念メタファー理論の争点を指摘した。それに基づき、前提とする言語観と援用する諸概念について述べて、本稿の立場を示した。

第3章では、「光」と視覚に関するメタファー表現として「明るい」と「暗い」を考察対象とし、<<喜びは光>>、<<知識は光>>、<<希望は光>>において、光源（発光体・反射体）、光り方（瞬間的・持続的）、届き方（前/後・中心/周辺）、の3点の「光」の捉え方を提案した。「明るい」と「暗い」には、光源として発光体が存在し、「光」で照らされる空間と現象を知覚する視覚が存在する。これらの「光」の性質が、メタファー的意味の実現に影響を与えていることを指摘した。

第4章では、身体経験において触覚で知覚される「熱い」「あたたかい」「冷たい」の考察を行い、温度感覚の概念化のプロセスを明らかにした。温度感覚の概念化には、温度感覚を生起させる発生源、温度感覚を知覚すると捉えられる感覚主体、温度感覚について判断する観察者が関係することを示した。そして、現代日本語の「熱い」「あたたかい」「冷たい」において、<<興奮は熱>>、<<愛は火>>、<<優しさはあたたかさ>>が、影響を与えていることを指摘した。

第5章では、「晴れる」と「曇る」に関するメタファー表現の考察を通して、現代日本語における<<感情は天候>>、<<思考は天候>>、<<状況は天候>>という概念メタファーの存在を提示した。また、起点領域である気象現象における「光」と遮蔽物と移動物という現象の構成要素がメタファー的意味の実現に影響を与えていることを指摘した。これらの現象の構成要素に阻まれることで、「晴れる」と「曇る」のメタファー的意味の実現が阻害される。「光」と遮蔽物と移動物という現象の構成要素の領域ごとの表れ方の違いとその性質を

示した。現象の構成要素を想定することによって、各領域のメタファー表現の写像の偏りや性質の違いを明らかにした。

第 6 章では、「風」に関するメタファー表現の考察を行った。<<状況は天候>>における「風」は、メタファー表現としての現象の構成要素として「方向」・「力」を持つことを提示した。「方向」には、前/後・上/下、「力」には、強/弱が存在する。また、風は発生源から吹く、風は方向を変える、風は知覚者によって捉えられる、風は吹いた後に何らかの影響を及ぼす、という性質を持つ。これらの性質が時間的展開に基づき一連の構造を形成する。

そして、「風当たり」や「先輩風」をはじめとした人間を「風」の発生源と捉えるメタファー表現の基盤についても考察した。我々は、<<状況は天候>>の影響を受け、不特定多数の発生源の言動によって作り出される状況を「風」として捉えていることも指摘した。この概念メタファーは<<言動は風>>として生産性を持つことも述べた。また、「世間の風」や「隙間風」の考察を通して、<<優しさはあたたかさ>>、<<親密さは近さ>>など、「風」と複数の概念メタファーが関わっていることも明示した。我々は、社会情勢や人間関係などの様々な状況の変化をメタファー表現の「風」を通して理解していることを明らかにした。

第 7 章では、「嵐」と「嵐」の一種である「台風」についてそれぞれが持つ固有の性質について考察した。「～の嵐」、「(人・組織) + 台風」、「台風の目」というメタファー表現の考察を行った。この考察を通して、<<状況は天候>>における「嵐」と「台風」は、メタファー的に共に状況の大きな変化を表すがその性質は異なる。「嵐」は状況の変化そのものを表すのに対し、「台風」は脅威となる大きな状況の変化の発生源を表す。そこには、「嵐」と「台風」が固有に持つ性質の違いが存在することを指摘した。この性質の違いがメタファー的意味にも影響を与えていることを述べた。

以上のように、本稿では、気象現象を「光」、遮蔽物、移動物という現象の構成要素を設定して、捉え直した。それぞれの気象現象とそれに対応する現象の構成要素は表 8-1 に提示する。また、現象の構成要素と概念メタファーとの関係は表 8-2、気象現象の変化と現象の構成要素の関係は表 8-3 にまとめる。

表 8-1 気象現象と現象の構成要素

気象現象	雲	霧	風	嵐	台風
現象の構成要素	遮蔽物・移動物	遮蔽物	移動物	移動物	移動物

表 8-2 概念メタファーと現象の構成要素

気象現象に関する概念メタファー	《感情は天候》	《思考は天候》	《状況は天候》
下位概念メタファー	《心は空間》・《喜びは光》	《心は空間》・《心は物体》・《理解は見ること》	《活動は移動》・《理解は見ること》
現象の構成要素	光・遮蔽物	光・遮蔽物	光・遮蔽物・移動物

表 8-3 気象現象の変化と現象の構成要素

気象現象の変化		晴れる	曇る
現象の構成要素	遮蔽物	無	有
	光	明るい	暗い

この 3 つの表を見れば分かるように、気象現象に関する概念メタファーである《感情は天候》、《思考は天候》、《状況は天候》は、対応する複数の下位概念メタファーによって構成されていることを指摘した。そして、気象現象の「光」、遮蔽物、移動物という現象の構成要素と各々の気象現象の固有の性質がメタファー的意味の実現に影響を与えていることを示した。

さらに、気象現象を現象の構成要素から分析し、「晴れる」とは「光」が遮蔽物に遮られていない状態であり、「曇る」とは「光」が遮蔽物に遮られている状態であることを指摘した。また、「雲」「霧」が遮蔽物として捉えられ、「雲」「風」「嵐」「台風」が移動物として捉えられることも述べた。気象現象の概念化に関する身体経験として、「光」がもたらす「明るい」は「見える」、「暗い」は「見えない」という視覚に関する身体経験や「熱い」「あたたかい」「冷たい」という温度感覚に関する身体経験との相互関係も論じた。これらを明らかにすることによって、現代日本語における気象現象の概念化のプロセスを解明した。

8.2 今後の課題

本稿は、現代日本語における気象現象の概念化のみを対象としたケーススタディーである。その前提で、気象現象に関する個別的なメタファー表現を基に分析を行った。そのため、全ての気象現象に関するメタファー表現を考察したわけではない。しかしながら、概念メタファーに対し、メタファー表現の視点でどのように気象現象が捉えられ、どのような要因がメタファー的意味の実現に影響を与えているかについては提示できた。むしろ、一般的な概

念メタファーの記述を目指すアプローチと概念メタファーによって産出される個別的なメタファー表現の記述を目指すアプローチは概念メタファーに対する着眼点の違いであって、表裏一体にあると考えられる。本稿は後者のアプローチをとることによって、今まで見過ごされてきた、現代日本語における外界の現象自体から生じるメタファー写像の偏りや複数の概念メタファーの関連を記述することができたと言える。

今後の課題としては、以下の3点が挙げられる。

①起点領域としての気象現象の性質を中心に扱ったため、目標領域の性質までは踏み込み切れていない。換言すれば、起点領域と目標領域との写像関係を明確に描き切れず、各々の概念メタファーの継承や合成などの関係も完全に明らかにできたとは言い難い。その点では、概念メタファーの研究ではあるが、正面から挑み切れず、一般的な概念メタファーの記述には至ってはいないと言えるだろう。つまり、現代日本語において気象現象に関する概念メタファーによって産出されるメタファー表現を観察し、記述したということに留まっている。

②気象現象の概念化のプロセスの解明を目的としたため、日常的な身体経験に基づいたメタファー表現が中心となり、文学作品や歌詞などに表れる詩的メタファーを扱ってはいない。詩的メタファーにおいては、雨と悲しみが結び付き、風と寂しさが結び付くようなことはよくある。つまり、「雨」や「風」に対し、我々が悲しみや寂しさを感じる経験はあるが、気象現象自体に感情が常に含意されるわけではない。しかし、これらの気象現象をもちいて感情を表す表現が詩的メタファーにはみられる。そこには、我々が「雨」や「風」に対して、個別に持つ詩的なフレームも関係すると考えられる。また、シミリーとの関連でも検討の余地があるだろう。

③「まだら」問題についても、本稿は気象現象を中心とするメタファー表現の分析を行ったが、現代日本語には液体に関するメタファーや時空間に関するメタファーなどで今までのメタファー論では解明し切れていない写像のギャップが存在する。このような写像のギャップに対しても、現象の構成要素や外界の現象の捉え方という観点から分析を進めていくことも課題としたい。

今後は、本稿のような内省に基づく理論的な研究だけではなく心理実験などを用いた実証的な研究が必要とされる。こういった他の分野に渡る研究との接点を持つことによって、

人間は言語を通して世界をどう捉えているか、つまり、認知能力を通しての言語とは何かを、より精緻に探究することが可能になるだろう。本稿が、認知言語学におけるメタファー研究として様々な分野の研究に繋がることを願う。

参考文献

文献：

- 浅野百合子(1979)「ヒカル・カガヤク・テル」柴田武 他(編)『ことばの意味Ⅱ：辞書に書いてないこと』,276-283,東京:平凡社.
- 尼ヶ崎彬(1990)『ことばと身体』,東京:勁草書房.
- 荒川洋平(2002)「「太い」回線と「重い」データー仮想空間を見立てる形容詞メタファーの考察一」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』28,103-116.
- 荒川洋平(2013)『デジタル・メタファー』,東京:東京外国語大学出版会.
- 荒川洋平・森山新(2009)『わかる！！日本語教師のための応用認知言語学』,東京:凡人社.
- 有菌智美(2007)「「頭」「胸」「腹」—精神活動の在り処としての身体部位詞—」『日本認知言語学会論文集』7, 310-320.
- 有菌智美(2008)「「顔」の意味拡張に対する認知的考察」『言葉と文化』9, 287-301, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻.
- 李潤玉(2007)「日・英における気象表現と感情表現との対応関係のメカニズム—認知言語学的アプローチ—」『近畿大学語学教育部紀要』7(1), 97-118.
- 伊藤創(2008)「空間から時間へ 概念メタファーの考察—「先」「前」「後」の分析を通じて—」『KLS』28,1-11,関西言語学会.
- 稲益佐知子(2015)「「恐怖」を修飾する表現について—直喩の果たす役割に着目して—」『表現研究』102, 37-46,表現学会.
- 今井新悟(編)(2011)『日本語多義語学習辞典 形容詞・副詞編』,東京:アルク.
- 岩橋一樹(2007)「メタファー表現の形式とその効果—品詞の相違の観点から—」『KLS』27,65-75, 関西言語学会.
- 大石亨(2007)「日本語形容詞の意味拡張をもたらす認知機構について」『日本認知言語学会論文集』7, 160-170.
- 大石亨(2010)「メタファー実現への文法的制約とその動機付け」『明星大学研究紀要 情報学部』17・18, 9-20.
- 大堀寿夫(編)(2004)『認知コミュニケーション論』,東京:大修館書店.
- 大森文子(2004)「大気のメタファーと心の認知」河上誓作教授退官記念論文集刊行会『言葉のからくり—河上誓作教授退官記念論文集』, 545-558,東京:英宝社.

- 沖本正憲(2012)「身体経験とことば—プライマリー・メタファーの観点から—」『苫小牧工業高等専門学校紀要』47, 6-35.
- 小野寺美智子(2011)「概念メタファー理論に関する一考察—メタファーの認知的基盤と動機—」『拓殖大学語学研究』124, 1-23.
- 笠貫葉子(2013)「メタファー」森雄一・高橋英光(編)『認知言語学 基礎から最前線へ』,53-78,東京:くろしお出版.
- 清海節子(2007)「感覚表現とは何か?」『駿河台大学論叢』33, 31-45.
- 久島茂(2001)『<物>と<場所>の対立』,東京:くろしお出版.
- 楠見孝(編)(2007)『メタファー研究の最前線』,東京:ひつじ書房.
- 楠見孝(2015)「愛の概念を支える放射状カテゴリーと概念比喩—実験認知言語学的アプローチ—」『認知言語学研究』1, 80-98,東京:開拓社.
- 国広哲弥(1982)『意味論の方法』,東京:大修館書店.
- 久野暉(1973)『日本文法研究』,東京:大修館書店.
- 黒田航(2005)「概念メタファーの体系性、生産性はどの程度か?—被害の発生に関係するメタファーの成立基盤の記述を通じて—」『日本語学』24(6), 38-57.
- 香西秀信(2004)「「譬え」はなぜ説得力があるのか?」柳澤浩哉・中村敦雄・香西秀信『レトリック探究法』,59-68,東京:朝倉書店.
- 後藤秀貴(2015)「液体の放出を表す動詞のメタファー的使用とその制約—<感情は液体>日本語メタファー表現のコーパス調査と分析—」『KLS』35, 73-84,関西言語学会.
- 小松原哲太(2016)『レトリックと意味の創造性』,京都:京都大学学術出版会.
- 小矢野哲夫(1980)「「に格」をとる形容詞文について」『日本語・日本文化』9, 1-18, 大阪外国語大学研究留学生別科.
- 佐藤信夫(1978)[1992]『レトリック感覚』,東京:講談社.
- 崎田智子・岡本雅史(2010)『言語運用のダイナミズム』,東京:研究社.
- 篠原和子・松中義大(2010)「視覚的に表出された概念メタファーの解釈—天候記号が感情の推測に及ぼす影響」『日本認知科学大会発表論文集』27, 745-751.
- 新地綾(1997)「形容詞<重い>の多義性に関する認知言語学的考察」『言語科学論集』3,77-104, 京都大学総合人間学部基礎科学科情報科学講座.
- 菅井三実(2013)「解釈/捉え方(construal)、解釈する(construe)」辻幸夫(編)『新編 認知言語学キーワード事典』, 27-28,東京:研究社.

- 杉本孝司(2012)「不変性仮説とカテゴリー化」『言語文化共同研究プロジェクト 2011 時空と認知の言語学 I』, 21-28, 大阪大学大学院言語文化研究科.
- 杉本巧・鍋島弘治朗(2015)「メタファーと発話の連鎖―「枠組み」設定としてのメタファー表現―」『日本語用論学会大会発表論文集』10,73-80.
- 鈴木幸平(2010)「<怒り>を表す英語類義語が持つメタファーへの選好―概念比喻理論の視点から―」『神戸言語学論叢』7, 60-77.
- 鷲見幸美(2010)「日本語の歌詞に見る「心」の概念化」『戯れのテクノロジー』,73-80, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科.
- 瀬戸賢一(1995a)『メタファー思考』,東京:講談社.
- 瀬戸賢一(1995b)『空間のレトリック』,東京:海鳴社.
- 瀬戸賢一(2002)「メタファー研究の系譜」『言語』31(8), 16-23.
- 平知宏(2010)「比喻理解と身体化認知」楠見孝(編)『思考と言語』,245-269,京都:北大路書房.
- 平知宏・中本敬子・楠見孝(2006)「日本語動詞の上下イメージ図式記述: 尊敬は上? 軽蔑は下?」『日本認知心理学会大会発表論文集』4,203.
- 平知宏・中本敬子・木戸口英樹・木村洋太・常深浩平・楠見孝(2009)「具体文および抽象文を用いた行為・文一致効果の実験的検証」『認知心理学研究』7(1),57-66.
- 平知宏・楠見孝(2011)「比喻研究の動向と展望」『心理学研究』82(3), 283-299.
- 高尾享幸(2003)「メタファー表現の意味と概念化」松本曜(編)『認知意味論』,187-249, 東京:大修館書店.
- 谷ロー美(2003)『認知意味論の新展開―メタファーとメトニミー』,東京:研究社.
- 多門靖容(2006)『比喻表現論』,東京:風間書房.
- 多門靖容(2014)『比喻論』,東京:風間書房.
- 鄭基成(2001)「お天気、飛行機、病人―経済はどのような隠喩で概念化されるのか?」『茨城大学人文学部紀要 コミュニケーション学科論集』10, 1-16.
- 辻幸夫(編)(2003)『認知言語学への招待』,東京:大修館書店.
- 中尾愛美・鍋島弘治朗(2014)「恋と愛―J-POP の認知メタファー分析―」『英米文学英語学論集』3, 21-44, 関西大学英米文学英語学会.
- 中村明(2013)『比喻表現の世界 日本語のイメージを読む』,東京:筑摩書房.
- 鍋島弘治朗(1997)「動詞「かける」の多義に関する認知的考察―比喻が意味拡張に果たす役割―」『KLS』17,78-87, 関西言語学会.

- 鍋島弘治朗(2003)「メタファーと意味の構造的性—プライマリー・メタファーおよびイメージ・スキーマとの関連から—」山梨正明 他(編)『認知言語学論考』2,25-109,東京:ひつじ書房.
- 鍋島弘治朗(2004)『『理解』のメタファー—認知言語学的分析—』『大阪大学言語文化学』13,99-116.
- 鍋島弘治朗(2007)「黒田の疑問に答える—認知言語学からの回答」『日本語学』26(3), 54-71.
- 鍋島弘治朗(2011)『日本語のメタファー』,東京:くろしお出版.
- 鍋島弘治朗(2016)『メタファーと身体性』,東京:ひつじ書房.
- 鍋島弘治朗・中野阿佐子(2016)「MIP—理想のメタファー認定手順を求めて—」『英米文学英語学論集』5, 1-18,関西大学英米文学英語学会.
- 西村義樹(1998)「行為者と使役構文」中右実・西村義樹『構文と事象構造』,108-204, 東京:研究社.
- 西村義樹(2008)「換喩の認知言語学」森雄一・西村義樹・山田進・米山三明(編)『ことばのダイナミズム』,71-88,東京:くろしお出版.
- 入学直哉(2002)「太陽光の意味拡張における認知メカニズム」上野義和(編)『認知意味論の諸相—身体性と空間の認識』49-98, 東京:松柏社.
- 野内良三(2000)『レトリックと認識』,東京:日本放送出版協会.
- 畠山雄二(編)(2014)『ことばの本質に迫る理論言語学』,東京:くろしお出版.
- 馬場典子(2002)「「腹が立つ」の動機付けに関する一考察」『言葉と文化』3, 31-44, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻.
- 半沢幹一(2016)『言語表現喩像論』,東京:おうふう.
- 韓涛(2009)「メタファーのスコープに関する一考察—中国語“火”の場合—」『ことばの科学』,22, 61-77, 名古屋大学言語文化研究会.
- 東森勲(2007)「仏教に対する認知語用論的アプローチ」『佛教文化研究所紀要』46, A9-A30,龍谷大学.
- 平沢慎也(2015)「Metaphors We Don't Live By—現代英語母語話者は by の時空間メタファーを使って生きているか—」『東京大学言語学論集』36, 39-55, 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部言語学研究室.
- 深田智・仲本康一郎(2008)『概念化と意味の世界』,東京:研究社.
- 古牧久典(2005)「ドメインマトリックスと概念メタファー解明方法の一考察—」『日本認知言語学会論文集』5, 272-282.

- 本多啓(2005)『アフォーダンスの認知意味論』,東京:東京大学出版会.
- 松井真人(2007)「メタファーの経験的基盤に関する一考察—「心」の存在場所に関する日英語のメタファーをめぐって—」『山形県立米沢女子短期大学紀要』42, 37-44.
- 松本曜(2007)「語におけるメタファー的意味の実現とその制約」山梨正明 他(編)『認知言語学論考』6, 49-93,東京:ひつじ書房.
- 水野真紀子・内田諭・Nagy Anita・大堀壽夫(2007)「人間関係のメタファーにおけるスキーマ類型」『日本認知言語学会論文集』7, 120-130.
- 宮崎公江(2005)「日英語における光と光の欠如」『南山短期大学紀要』33, 149-169.
- 三好準之助(2010)「「台風の目」と ojo del huracan ー日西比較研究:「目」の意義特徴との関わりー」『京都産業大学論集 人文科学系列』41,1-21.
- 室山敏昭(2012)『日本人の想像力ー方言比喩の世界』,大阪:和泉書院.
- 梶山洋介(2006)『日本語は人間をどう見ているか』,東京:研究社.
- 梶山洋介(2010)『認知言語学入門』,東京:研究社.
- 梶山洋介(2014)『日本語研究のための認知言語学』,東京:研究社.
- 森雄一(2001)「能力としての比喩、彩としての比喩」『成蹊國文』34,90-100.
- 森雄一(2013)「メトニミーとシネクドキー」森雄一・高橋英光(編)『認知言語学 基礎から最前線へ』,79-102,東京:くろしお出版.
- 森田良行(1984)『基礎日本語3 意味と使い方』,東京:角川書店.
- 山田進(1976)「アセル・サメル」柴田武 他(編)『ことばの意味:辞書に書いてないこと』,263-270,東京:平凡社.
- 山梨正明(1988)『比喩と理解』,東京:東京大学出版会.
- 山梨正明(1995)『認知文法論』,東京:くろしお出版.
- 山梨正明(2000)『認知言語学原理』,東京:くろしお出版.
- 山梨正明(2012)『認知意味論研究』,東京:研究社.
- 山梨正明(2015)『修辭的表現論』,東京:開拓社.
- 吉村公宏(2013)「概念化(conceptualization)」辻幸夫(編)『新編 認知言語学キーワード事典』,29-30,東京:研究社.
- 李愛華(2015)「漢語語彙におけるメタファーの日中対照ー自然現象をモト領域とする感情表現ー」『比較日本文化学研究』8, 43-69, 広島大学大学院文学研究科総合人間学講座.
- Aristotle.(330BC-abt) *The Art of Rhetoric*.(戸塚七郎(訳)(1992)『弁論術』,東京:岩波書店.)

- Aristotle.(330BC-abt) *Poetics*.(松本仁助・岡道男(訳)(1997)「詩学」『アリストテレース詩学／ホラーティウス詩論』,東京:岩波書店.)
- Barcelona, A.(2000)“On the plausibility of claiming a metonymic motivation for conceptual metaphor.”In A.Barcelona.(ed.),*Metaphor and metonymy at crossroads : A cognitive perspective*. Berlin:Mouton de Gruyter, 31-58.
- Black, M.(1954) “Metaphor.” *Proceedings of the Aristotelian Society*, 55:273-294.(尼ヶ崎彬(訳)(1986)「隠喩」佐々木健一(編)『創造のレトリック』,東京:勁草書房.)
- Black, M.(1979) “More about Metaphor.” In A. Ortony.(ed.),*Metaphor and Thought*. Cambridge:Cambridge University Press,19-41.
- Clausner, T. and W.Croft.(1999) “Domains and image schemas.” *Cognitive Linguistics*, 10:1,1-31.
- Croft, W. and A.Cruse. (2004)*Cognitive Linguistics*. Cambridge:Cambridge University Press.
- Cruse, A.(2008) “Metaphor, Simile and Metonymy : Aspect of conceptual blending in figurative language.” In M. Casas Gómez,(dir.), A. I. Rodríguez-Piñero Alcalá. (ed.), *X Jornadas de lingüística*. Cádiz: Universidad de Cádiz,137-160.
- Cruse, A.(2011)*Meaning in language : an introduction to semantics and pragmatics* .3rd ed. Oxford: Oxford University Press.(片岡宏仁(訳)(2012)『言語における意味—意味論と語用論—』東京電機大学出版局.)
- Deignan, A.(1995)*Collins Cobuild English Guides 7 : Metaphor*. London:London Harper Collins.
- Deignan, A.(2005)*Metaphor and corpus linguistics*.Amsterdam:John Benjamins.(渡辺秀樹他(訳)(2010)『コーパスを活用した認知言語学』,東京:大修館書店.)
- Fauconnier, G. and M. Turner.(1998) “ Conceptual integration networks.” *Cognitive Science*,22(2),133-187.
- Fillmore, C.(1982) “Frame semantics” In *Linguistics in the Morning Calm*.Seoul:Hanshin Publishing,111-137.
- Gibbs, R.(2006)*Embodiment and Cognitive Science*.Cambridge:Cambridge University Press
- Glucksberg, S. and B. Keysar.(1993) “How metaphors work” In A. Ortony.(ed.),*Metaphor and Thought*. Cambridge:Cambridge University Press,401-424.
- Glucksberg, S.(2001)*Understanding Figurative Language*. Oxford:Oxford University Press.

- Grady, J.(1997) “Foundations of Meaning: Primary metaphors and primary scenes. ” Ph. D. dissertation, University of California, Berkeley.
- Group μ.(1970) *A General Rhetoric*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.(佐々木健一・樋口桂子(訳)(1981)『一般修辞学』,東京:大修館書店.)
- Johnson, M.(1987) *The body in the mind : The bodily basis of meaning, imagination, and reason*. Chicago: University of Chicago Press.(菅野盾樹・中村雅之(訳)(1991)『心のなかの身体』,東京:紀伊國屋書店.)
- Kövecses, Z.(2000) *Metaphor and emotion : language, culture, and body in human feeling*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kövecses, Z.(2010)[2002] *Metaphor : A Practical Introduction*. 2nd ed. Oxford: Oxford University Press.
- Kövecses, Z.(2005) *Metaphor in Culture : Universality and Variation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, G.(1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: University of Chicago Press.(池上嘉彦・河上誓作 他(訳)(1993)『認知意味論』,東京:紀伊國屋書店.)
- Lakoff, G.(1990) “The Invariance hypothesis : Is abstract reason based on image schemas? .” *Cognitive Linguistics* 1, 39-74.(杉本孝司(訳)(2000)「不変性仮説—抽象推論はイメージ・スキーマに基づくか?—」坂原茂(編)『認知言語学の発展』,東京:ひつじ書房.)
- Lakoff, G.(1993) “The contemporary theory of metaphor.” In A. Ortony.(ed.), *Metaphor and Thought*. Cambridge: Cambridge University Press, 202-251.
- Lakoff, G. and M. Johnson. (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.(渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸(訳)(1986)『レトリックと人生』,東京:大修館書店.)
- Lakoff, G. and M. Johnson.(1999) *The Philosophy in the Flesh*. New York: Basic Books.(計見一雄(訳)『肉中の哲学—肉体を具有したマインドが西洋の思考に挑戦する』,東京:哲学書房.)
- Lakoff, G. and M. Turner.(1989) *More than cool reason : A field guide to poetic metaphor*. Chicago: University of Chicago Press.(大堀俊夫(訳)(1994)『詩と認知』,東京:大修館書店.)
- Langacker, R.(1987) *Foundations of Cognitive Grammar. Vol. I. : Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R.(1991) *Foundations of Cognitive Grammar. Vol. II. : Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.

- Langacker, R.(2008) *Cognitive Grammar : A Basic Introduction*.Oxford:Oxford University Press.(山梨正明(監訳)(2011)『認知文法論序説』,東京:研究社.)
- Omori, A.(2015) *Metaphor of Emotions in English : With Special Reference to the Natural World and the Animal Kingdom as Their Source Domains*.Tokyo:Hituji Syobo.
- Pragglejaz Group.(2007) “MIP: A method for identifying metaphorically used words in discourse.” *Metaphor and symbol*,22(1),1-39.
- Reddy, M.(1979) “The conduit metaphor.” In A. Ortony.(ed.),*Metaphor and Thought*. Cambridge:Cambridge University Press,284-324.
- Richards, I.A. (1936) *The Philosophy of Rhetoric*. Oxford:Oxford University Press.(石橋幸太郎(訳)(1961)『新修辞学原論』,東京:南雲堂.)
- Searle, J.(1979) “Metaphor.” In A. Ortony.(ed.),*Metaphor and Thought*. Cambridge:Cambridge University Press,83-111.(渡辺裕(訳)(1986)「隠喩」佐々木健一(編)『創造のレトリック』,東京:勁草書房.)
- Shinohara, K. and Y. Matsunaka.(2003)“An analysis of Japanese emotion metaphors.” 『ことばと人間』 4,1-18,横浜「言語と人間」研究会.
- Shinohara, K. and Y. Matsunaka.(2009)“Pictorial metaphors of emotion in Japanese comics.”In C.J. Forceville, E.Urios-Aparisi.(ed.),*Multimodal Metaphor*.Berlin:M. de Gruyter,265-293.
- Stern, J.(2000)*Metaphor in Context*. Cambridge, MA:MIT Press.
- Steen, G. et al.(2010)*A method for linguistic metaphor identification from MIP to MIPVU*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Sullivan, K.(2013) *Frames and constructions in metaphoric language*.Amsterdam: John Benjamins.
- Sweetser, E.(1990)*From Etymology to Pragmatics : Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*.Cambridge:Cambridge University Press.(澤田治美(訳)(2000)『認知意味論の展開—語源学から語用論まで』,東京:研究社.)
- Talmy, L.(2000)*Toward a Cognitive Semantics.Vol. I . : Concept Structuring Systems*. Cambridge, MA:MIT Press.
- Talmy, L.(2001)*Toward a Cognitive Semantics.Vol. II . : Typology and Process in Concept Structuring*.Cambridge, MA:MIT Press.

Taylor, J.(2003)*Linguistic Categorization*,3rd ed.Oxford:Oxford University Press.(辻幸夫・鍋島弘治朗・篠原俊吾・菅井三実(訳)(2008)『認知言語学のための14章』東京:紀伊國屋書店.)
Ungerer, F. and H.J Schmid.(1996)*An Introduction to Cognitive Linguistics*.London/New York:Longman.(池上嘉彦 他(訳)(1998)『認知言語学入門』東京:大修館書店.)

参考資料:

化学工学会 SCE・Net(編)(2007)『はじめて学ぶ熱・エネルギー』,東京:工業調査会.
加藤俊二(1993)『身の回りの光と色』,東京:裳華房.
菊池勝弘(2008)『雲と霧と雨の世界』,東京:成山堂書店.
気象庁(<http://www.jma.go.jp/jma/index.html>)
気象庁(2007)[1998]『気象観測の手引き』
(http://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kansoku_guide/tebiki.pdf)
倉嶋厚・原田稔(編)(2014)[2000]『雨のことば辞典』,東京:講談社.
NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB) NLB1.30 版(<http://nlb.ninjal.ac.jp/>), 国立国語研究所.
松村明(編)(2006)『大辞林』 第三版,東京:三省堂.
森朗(1998)『風と波を知る 101 のコト—海辺の気象学入門』 東京:榊出版社.

用例出典:

Google(検索期間 2012/04/01~2016/09/25)
KOTONOHA『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 少納言(BCCWJ), (検索期間 2012/04/01~2016/09/25)

謝辞

本稿は、筆者が名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士後期課程在籍中に取り組んだ研究成果をまとめたものです。指導教員である本研究科の鷺見幸美准教授には博士後期課程における研究活動全般に渡り、終始、熱心で温かいご指導を賜りました。鷺見先生のご指導のおかげで、専門的な理論の知識や分析の方法を身につけることができました。鷺見先生のご指導がなければ、本稿は完成できませんでした。心より感謝申し上げます。

本稿の審査においては、関西大学の鍋島弘治朗教授、本研究科の玉岡賀津雄教授、杉村泰教授からは今後の研究への発展にも繋がる貴重なご指摘、ご助言を賜りました。篤く感謝申し上げます。

学部時代、博士前期時代の恩師に深く感謝申し上げます。学部時代を過ごした成城大学では、指導教員の池田一彦教授から近代文学の作品を通して言葉を探究することを学び、筆者の研究への原体験となっています。博士前期課程を過ごした成蹊大学では、指導教員である森雄一教授に認知言語学の基礎からご指導をいただき、その中で本稿のテーマである概念メタファー理論と出会うことができました。成蹊大学の日本語教員養成課程においては、横浜国立大学の小田切由香子先生、吉田昌平教授に初歩から日本語教育のご指導をいただきました。

さらに、本研究科の方々に感謝を申し上げます。本研究科の靄山洋介教授、李澤熊准教授をはじめとする現代日本語学研究会の方々には、お世話になりました。また、本研究科の修了生の有菌智美氏、大西美穂氏からは研究に関するご助言だけではなく様々な励ましもいただきました。同研究室の陳帥氏、梶原彩子氏とは、研究面だけではなく精神面でも、支え合いながら、切磋琢磨してきました。

そして、関連分野の研究学会や研究会でお世話になった皆様に御礼を申し上げます。共立女子大学の半沢幹一教授、愛知学院大学の多門靖容教授、東京外国語大学の荒川洋平教授、関西看護医療大学の鈴木幸平氏からは、比喩研究に関して多くのご指導やご助言を賜りました。他にも、多くの研究仲間や友人との交流が筆者の研究への刺激となり、励みになりました。謝意を表します。

最後に、いつも筆者を信じて、支えてくれた家族に心から感謝を捧げます。

2017年3月 松浦 光